ISSN 0288-6480

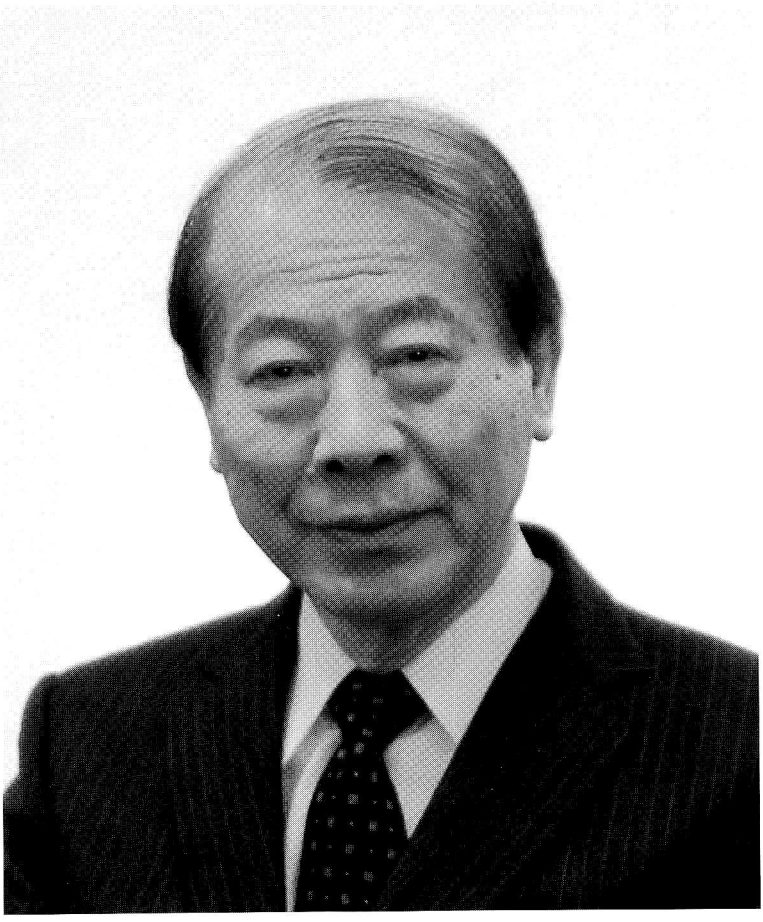
眞宗學

第129・130合併號

林智康教授
内藤知康教授
廣田デニス教授
定年退職記念特集號
—親鸞仏教の研究—

平成26年3月

龍谷大學　眞宗學會



林　智康教授近影

内藤知康教授近影

廣田デニス教授近影

題　言

林智康教授、内藤知康教授、廣田デニス教授の三先生が平成二六年三月三一日をもって長らくご在職になられた龍谷大学を定年退職になられます。誠に惜別の思い一入のものがあります。三教授ともどもに龍谷大学にご着任以来今日まで、教育、研究にご尽力いただき、その大いなる学恩に対して甚深の謝意を申し上げるものであります。

林智康教授は、昭和三九年に龍谷大学に入学後、大学院修士課程を経て、博士課程を依願退学後、宗学院で研鑽を積まれました。その後、昭和五七年に九州（佐賀）龍谷短期大学仏教科専任講師に就任され、さらに昭和六二年には龍谷大学文学部助教授に着任され、平成一二年に文学部教授に就任されました。その間には中央仏教学院の講師、浄土真宗教学研究所教授、さらには米国仏教大学院、ハワイ仏教研究所、武蔵野大学、韓国東国大学校等で教鞭を執られ、また本願寺関係では布教講会、安居等で講師を務められました。大学の役職としては、学生部

長、宗教部長、真宗学会長の重責にあたられ、さらに学外におかれては、真宗連合学会理事、日本印度仏教学会理事等をお務めになり、学生の教育、大学の発展のために尽力されてこられました。

先生は、真宗教義学、真宗教学史の領域に広い関心を持たれ、親鸞の教義、覚如、存覚さらには蓮如の教義を明らかにされてきました。その研究成果として『蓮如教学の研究』『愚禿鈔講讃』『顕浄土真実信文類（本）講讃』『親鸞読み解き事典』等多数の著書、論文を上梓されています。さらに、先生の研究において特記される点は、唯円の明かしたと見られる『歎異抄』については、特に強く関心を持たれ、その成果として『歎異抄講讃』、さらには編著として『歎異抄事典』等を出版され、親鸞研究について、研究者のみならず一般の関心をも大いに惹起されました。それらの業績に対して大いなる尊崇の意を表するものであります。

内藤知康教授は、昭和四六年に龍谷大学に入学後、大学院修士課程を経て、博士課程を依願退学後、宗学院で研鑽を積まれました。その後、平成四年に龍谷大学助教授に着任され、平成一二年に文学部教授に就任されました。その間には中央仏教学院の講師、浄土真宗教学研究所助教授、浄土真宗聖典編纂委員会編纂委員、さらには本願寺派勧学寮員等の役職を勤められ、

さらには米国仏教大学院、ハワイ仏教研究所、韓国東国大学校等で教鞭を執られ、また本願寺関係では安居等で講師を務められました。大学の役職としては、教学部長、宗教部長、大学院実践真宗学研究科長、仏教文化研究所長、真宗学会長の重責にあたられ、さらに学外におかれては、真宗連合学会理事、日本印度仏教学会評議員等をもお務めになり、学生の教育、大学の発展のために尽力されてこられました。

先生は、真宗教義学、真宗教学史の領域に強い関心を持たれ、親鸞の教義、江戸期における真宗教学を明らかにされてきました。その研究成果として『安楽集講読』『顕浄土真実教行証文類』『安心論題を学ぶ』等多数の著書、論文を上梓され、直近においては『顕浄土真実教行証文類（コロタイプ版）解説』（共著）や『顕浄土真実教行証文類（解説論集）』（共著）を執筆されています。さらに、先生の研究において特筆される点は、親鸞の教義においてさまざまな解釈が渦巻く現代において、ことに真宗における行の問題、ならびに往生浄土の問題等について、積極的にその理解を明らかにされてこられました。それらの業績に対して大いなる崇敬の念を表するものであります。

廣田 デニス教授は、昭和四二年にUniversity of California, Berkeley、さらにSan Fran-

cisco State University の大学院修士課程を修了され、平成一一年に筑紫女学園大学の教授に着任され、平成一五年には龍谷大学教授に就任されました。その間には、本願寺国際センターの Head Translator を長年勤められ、さらには Colgate University, Harvard University, Institute of Buddhist Studies, 国際日本文化研究センター St. Andrews University, Scotland,等の客員教授、客員研究員等を務められました。また先生は平成八年には名古屋大学大学院（東洋哲学）より文学博士の学位を取得されました。

先生の研究業績は、長い親鸞の著作における翻訳から導き出されたものであり、それゆえ宗教の思想表現としての言葉に対する関心はことのほか強いものがあります。その研究成果が日本語で出版された『親鸞―宗教言語の革命者』であります。さらに翻訳関係の著書としては *Tannisho, No Abode: The Record of Ippen, Plain Words on the Pure Land Way: Sayings of the Wandering Monks of Medieval Japan. A Translation of Ichigon hodan, Wind in the Pines: Classic Writings of the Way of Tea as a Buddhist Path* がありますが、何と言っても先生の研究業績として特記されるのは *The Collected Works of Shinran,* Volume I: The Writings の翻訳主任、ならびに Volume II: Introductions, Glossaries, and Reading Aids、の共同執筆を務められたことです。この翻訳によって親鸞思想が海外でも学術的意味において本

格的な研究が可能になったと言うことができます。気の遠くなるような翻訳という地道な研究を一途に勤められたことに深い敬意を表するものであります。

改めて三先生のご業績、ご活動を想起するとき、艱難辛苦のご苦労と恩情あふれるご指導に深い敬意と感謝の意を表するものであります。ここに深甚なる学恩に対してお礼の意味を込め学会誌『真宗学』特集号―親鸞仏教の研究―を三先生に奉呈致します。

最後に、親鸞聖人の著述のもっとも円熟した時代は七〇歳から八〇歳前半であろうと思います。三先生におかれましては、今後とも真宗学の発展にご尽力くださいますようお願い申しあげますとともに、これからの一層のご活躍を念じて題言と致します。

平成二十五年十二月九日

真宗学会代表　川　添　泰　信

林　智康教授略歴並主要論文著述目録

略　歴

昭和三六年　四月　福岡県立田川高等学校入学
昭和三九年　三月　福岡県立田川高等学校卒業
昭和三九年　四月　龍谷大学文学部仏教学科真宗学専攻入学
昭和四三年　三月　龍谷大学文学部仏教学科真宗学専攻卒業
昭和四三年　四月　龍谷大学大学院文学研究科修士課程真宗学専攻入学
昭和四五年　三月　龍谷大学大学院文学研究科修士課程真宗学専攻修了
昭和四五年　四月　龍谷大学大学院文学研究科博士課程真宗学専攻入学
昭和四八年　三月　龍谷大学大学院文学研究科博士課程真宗学専攻単位取得満期退学
昭和四八年　四月　浄土真宗本願寺派宗学院入学
昭和四八年　四月　平安高等学校非常勤講師　英語担当（昭和四九年三月まで）
昭和四九年　四月　平安高等学校教諭　宗教・英語担当（昭和五七年三月まで）
昭和五一年　四月　浄土真宗本願寺派宗学院卒業
昭和五四年　四月　中央仏教学院講師（昭和五六年三月まで）
昭和五五年　四月　龍谷大学短期大学部仏教科非常勤講師（昭和五七年三月まで）
昭和五七年　四月　九州（佐賀）龍谷短期大学仏教科専任講師（昭和五八年三月まで）
昭和五八年　四月　九州（佐賀）龍谷短期大学仏教科助教授（昭和六二年三月まで）
昭和六二年　四月　龍谷大学文学部助教授（平成二年三月まで）

平成　二年　四月　龍谷大学法学部助教授（平成四年三月まで）
平成　二年　九月　布教講会　掌議
平成　四年　四月　龍谷大学法学部教授（平成一二年三月まで）
平成　四年　四月　中央仏教学院学校教育部講師（平成二〇年三月まで）
平成　五年　四月　中央仏教学院通信教育部講師（現在に至る）
平成　七年　四月　浄土真宗教学研究所教授（平成一二年三月まで）
平成　九年　三月　ＩＢＳ（米国仏教大学院）龍谷セミナーの講義
平成　九年　九月　布教講会　掌議
平成一二年　四月　龍谷大学文学部教授（現在に至る）
平成一三年　七月　安居　副講（『歎異抄講讃』）
平成一四年　九月　布教講会　副講（『真宗和語聖教―一念多念文意・唯信鈔文意・尊号真像銘文―』）
平成一六年　七月　安居　副講（『愚禿鈔講讃』）
平成一七年　三月　ＢＳＣ（ハワイ仏教研究所）講義
平成一八年　四月　武蔵野大学非常勤講師（集中講義）
平成一九年　四月　龍谷大学学生部長（平成二一年三月まで）
平成一九年　四月　龍谷教学会議監査委員（現在に至る）
平成一九年　四月　龍谷総合学園教育専門委員会委員長（現在に至る）
平成一九年　七月　安居　典議
平成一九年　九月　韓国東国大学校講義
平成二一年　四月　大学院文学研究科論文審査委員（現在に至る）

平成二一年一二月　九州龍谷短期大学非常勤講師（集中講義）
平成二二年　四月　龍谷大学人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター　ユニット三代表（平成二五年三月まで）
平成二二年　六月　真宗連合学会理事（平成二四年六月まで）
平成二二年一一月　真宗学会会長（平成二四年一一月まで）
平成二三年　四月　大学院文学研究科入試運営委員（平成二五年三月まで）
平成二三年　四月　日本印度学仏教学会理事（平成二五年一一月まで）
平成二三年　七月　安居　本講（『顕浄土真実信文類（本）講讃』）
平成二四年　四月　龍谷大学宗教部長（平成二六年三月まで）

講演・シンポジウム・パネル

平成　六年　六月二九日　龍谷教学会議第三〇回大会「蓮如上人と浄土異流」司会（龍谷大学）
平成一〇年一〇月二三日　龍谷大学宗教部主催「蓮如上人と現代」司会（龍谷大学）
平成一四年　六月一二日　龍谷教学会議第三八回大会「宗教の社会的使命」パネリスト（龍谷大学）
平成二〇年　七月　六日　第一五回真宗大谷派教学大会「真宗教学と仏事―『歎異抄』・『親鸞伝絵』・『御文章』―」（大谷大学）
平成二〇年　九月一四日　日本宗教学会第六七回学術大会「仏教と心理学の接点とその意義」コメンテーター・司会（筑波大学）
平成二一年　六月一四日　国際真宗学会「『歎異抄』翻訳の諸問題」コーディネーター（龍谷大学）
平成二三年一一月二九日　龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター主催「親鸞聖人における死生観と超越」パネリスト（龍谷大学）

平成二五年　九月　七日　日本宗教学会第七二回学術大会「浄土真宗と妙好人―無対辞思想との関わり―」パネリスト（國學院大学）

平成二五年　九月一三日　日本仏教学会二〇一三年度学術大会（第八三回大会）（早稲田大学）
田中ケネス氏「如来蔵思想の信解（adhimukti）と親鸞思想の信心の展開と実践」コメンテーター
田代俊孝氏「念仏信仰の展開と実践―ビハーラ活動を通して―」コメンテーター

著書の部

書名	単著／共著	発行	発行年月日
『蓮如上人に学ぶ』	単著	百華苑	平成　七年一一月
『蓮如のすべて』	共著	新人物往来社	平成　七年一一月
『まことの道』	単著	探究社	平成　九年　五月
『真宗―問と答―』	単著	百華苑	平成　九年一一月
『蓮如教学の研究』	単著	永田文昌堂	平成一〇年　二月
『仏の願い』	単著	探究社	平成一二年　五月
『親鸞聖人と念仏の教え』	単著	永田文昌堂	平成一二年　六月
『教学研究所ブックレットNo.3　真宗における伝道』	共著	本願寺出版社	平成一三年　三月
『歎異抄講讃』	単著	永田文昌堂	平成一三年　七月
『愚禿鈔講讃』	単著	永田文昌堂	平成一六年　七月
『浄土真宗の教え―蓮如上人を中心として―』	単著	探究社	平成一七年　一月

『真宗和語聖教―一念多念文意・唯信鈔文意・尊号真像銘文―』	単著	百華苑	平成一七年　八月
『浄土和讃』①―⑭（『季刊せいてん』七二―八五「聖典セミナーII」）	単著	本願寺出版社	平成一七年九月―平成二〇年一二月
『親鸞聖人の歩まれた道』（一）（二）（三）	単著	百華苑	平成一八年六月―平成二〇年一二月
『歎異抄の教学史的研究（龍谷大学仏教文化研究叢書一七）』	共著	龍谷大学仏教文化研究所	平成一九年　三月
『仏法ひろまれ』	単著	探究社	平成一九年　八月
『月々のことば』（平成二〇年度 真宗教団連合カレンダー標語）	共著	本願寺出版社	平成一九年　九月
『親鸞聖人と建学の精神』	単著	永田文昌堂	平成二一年一〇月
『仏恩を報ずる』	単著	探究社	平成二三年　三月
『顕浄土真実信文類（本）講讃』	単著	永田文昌堂	平成二三年　七月
『道の手帖　親鸞』「キーワードで読みとく親鸞」	共著	河出書房新社	平成二三年一二月
『東アジア思想における死生観と超越（龍谷大学人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター研究叢書）』	編著	方丈堂出版	平成二五年　三月
『浄土和讃　信を勧め疑いを誡める』	単著	探究社	平成二五年　四月

学術論文の部

論文名	備考	発行年月
真宗学方法論―一私案―	真宗研究会紀要　第一号	昭和四四年　七月
親鸞聖人の宿業思想	真宗研究会紀要　第二号	昭和四五年　九月
真宗往生義―時の問題と関連して―	印度学仏教学研究　第二〇巻第二号	昭和四七年　三月
親鸞の涅槃経観	印度学仏教学研究　第二一巻第二号	昭和四八年　三月
親鸞と涅槃経―肉食妻帯に関連して―	印度学仏教学研究　第二二巻第二号	昭和四九年　三月
善導における行と信について	宗学院論集　第四四号	昭和五一年　三月
『教行信証』における『論註』の引用について	宗学院論集　第四五号	昭和五一年一一月
真宗における他力義について	印度学仏教学研究　第二五巻第一号	昭和五一年一二月
真宗における往生義	真宗学　第五六号	昭和五二年　二月
往生浄土観―その現実的意義―	宗学院論集　第四六号	昭和五二年　七月
『教行信証』と『大無量寿経』	印度学仏教学研究　第二七巻第二号	昭和五四年　三月
『選択集』と『教行信証』	平安学園研究論集　第二四号	昭和五五年　六月
妙好人の研究	印度学仏教学研究　第二九巻第二号	昭和五六年　三月
真宗における真実義	石田充之博士古希記念論文集『浄土教の研究』	昭和五七年　九月
親鸞と華厳経	佐賀龍谷短期大学紀要　第二九号	昭和五八年　二月
親鸞と法語「自然法爾」	印度学仏教学研究　第三二巻第二号	昭和五九年　三月
親鸞聖人における時機観	日本仏教学会年報　第四九号	昭和五九年　七月
親鸞の神祇観	九州龍谷短期大学紀要　第三二号	昭和六一年　三月

親鸞聖人における現世利益観	仏教文化　第二号	昭和六一年	三月
真宗における神祇観	真宗学　第七八号	昭和六三年	三月
親鸞における善導著述の引用文	龍谷大学論集　第四三三号	平成　元年	二月
聖徳太子と親鸞聖人	龍谷大学論集　第四三四・四三五合併号	平成　元年	一一月
親鸞聖人の書簡（消息）と『末灯鈔』	龍谷紀要　第一二巻第二号	平成　三年	三月
親鸞書簡と異義	印度学仏教学研究　第四〇巻第二号	平成　四年	三月
真宗本尊義について	日本仏教学会年報　第五七号	平成　四年	五月
蓮如上人と御文章	真宗学　第八六号	平成　四年	三月
蓮如上人と異義	龍谷教学　第二八号	平成　五年	六月
真宗の信心と二種深信	龍谷紀要　第一五巻第二号	平成　六年	二月
蓮如上人と浄土異流	真宗研究　第三九号	平成　七年	一月
『蓮如上人御一代聞書』について	真宗学　第九一・九二合併号	平成　七年	三月
『歎異抄』の研究―江戸期における写本・刊本等をめぐって―	宗教研究　第六八巻第四輯（三〇三）	平成　七年	三月
蓮如上人に学ぶ―『歎異抄』と『御文章』―	教学研究所紀要　第四号	平成　七年	九月
蓮如上人と御詠歌	真宗学　第九三号	平成　八年	一月
親鸞と『大集経』	印度学仏教学研究　第四四巻第二号	平成　八年	三月
『教行信証』と『弁正論』	印度学仏教学研究　第四五巻第二号	平成　九年	三月
『教行信証』における引用文の研究―『弁正論』について―	龍谷紀要　第一八巻第二号	平成　九年	三月
「正信念仏偈」と「念仏正信偈」	村上速水喜寿記念論集『親鸞教学論叢』	平成　九年	五月

真実と方便の関係―『教行信証』の「化身土巻」を中心に―	渡邊隆生教授還暦記念論集『仏教思想文化史論叢』	平成九年六月
真宗の死生観―往生思想と関連して―	中央仏教学院紀要　第一一号	平成九年八月
蓮如上人と「正信偈」	『蓮如上人研究―教義篇』	平成一〇年二月
『教行信証』と『一念多念文意』	真宗学　第九七・九八合併号	平成一〇年三月
『教行信証』と『一念多念文意』	印度学仏教学研究　第四六巻第二号	平成一〇年三月
『歎異抄』と異義	宗教研究　第七一巻第四輯（三一四）	平成一〇年三月
『教行信証』と『唯信鈔文意』	真宗学　第九九・一〇〇合併号	平成一一年三月
『教行信証』と『尊号真像銘文』（一）	龍谷紀要　第二一巻第一号	平成一一年八月
『教行信証』と『浄土三経往生文類』	印度学仏教学研究　第四八巻第二号	平成一二年三月
『教行信証』と『愚禿鈔』	印度学仏教学研究　第四九巻第二号	平成一三年三月
覚如教学の研究	宗教研究　第七四巻第四輯（三二七）	平成一三年三月
存覚教学の研究	宗教研究　第七五巻第四輯（三三一）	平成一四年三月
『教行信証』と『尊号真像銘文』（二）	真宗学　第一〇五・一〇六合併号	平成一四年三月
『歎異抄』の異義について	龍谷大学論集　第四六三号	平成一六年一月
『愚禿鈔』と『観経疏』三心釈	真宗学　第一〇九・一一〇合併号	平成一六年三月
「三帖和讃」の撰述	真宗学　第一一一・一一二合併号	平成一七年三月
『歎異抄』における念仏の意義	矢田了章・林智康編『歎異抄の教学史的研究』	平成一九年三月
『歎異抄』と覚如教学	真宗研究　第五四輯	平成二〇年三月
真宗における信心と救済	宗教研究　第八二巻第四輯（三五九）	平成二一年三月

龍樹菩薩と親鸞聖人―『十住毘婆沙論』を中心として―	真宗学　第一一九・一二〇合併号	平成二一年　三月
真宗教学と仏事―『歎異抄』・『親鸞伝絵』・『御文章』―	真宗教学研究　第三〇号	平成二一年　六月
宗教心理と浄土真宗	宗教研究　第八三巻第四輯（三六三）	平成二二年　三月
道綽禅師と親鸞聖人	真宗学　第一二三・一二四合併号	平成二三年　三月
浄土真宗と現代社会	宗教研究　第八五巻第四輯（三七一）	平成二四年　三月
『教行信証』における阿闍世の救済と逆謗除取	宗教研究　第八六巻第四輯（三七五）	平成二五年　三月
浄土真宗と妙好人	印度学仏教学研究　第六二巻第二号	平成二六年　三月
浄土真宗と妙好人―無対辞思想との関わり―	宗教研究　第八七巻第四輯（三七九）	平成二六年　三月
浄土真宗における信心と救い	友久久雄先生退職記念論集	平成二六年　三月
源信和尚と親鸞聖人	真宗学　第一二九・一三〇合併号	平成二六年　三月
セッションNo.8の発表に対するコメント	日本仏教学会年報　第七九号	平成二六年六～七月予定

辞書類の部

書名	単著／共著	発行	発行年月日
『仏教大事典（BUDDHICA）』	共著	小学館	昭和六三年　七月
『逆引仏教語辞典』	共著	柏書房	平成　七年　二月
『歎異抄事典』	編著	柏書房	平成　四年　三月
『親鸞読み解き事典』	編著	柏書房	平成一八年　五月

内藤知康教授略歴並主要論文著述目録

略　歴

昭和三六年　四月　大阪府立市岡高等学校　入学
昭和三九年　三月　大阪府立市岡高等学校　卒業
昭和三九年　四月　大阪大学理学部高分子学科　入学
昭和四五年　九月　大阪大学理学部高分子学科　中退
昭和四六年　四月　龍谷大学文学部仏教学科真宗学専攻　入学
昭和　五年　三月　龍谷大学文学部仏教学科真宗学専攻　卒業
昭和　五年　四月　龍谷大学大学院文学研究科修士課程真宗学専攻　入学
昭和五二年　三月　龍谷大学大学院文学研究科修士課程真宗学専攻　修了
昭和五二年　四月　龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程真宗学専攻　入学
昭和五五年　三月　龍谷大学大学院文学研究科博士後期課程真宗学専攻　単位取得による依願退学
昭和五五年　十月　福井教区若狭組覺成寺に衆徒転換（鷲原から内藤へ改姓）
昭和五五年　四月　本願寺派宗学院　入学
昭和五六年　四月　龍谷大学兼任講師（昭和五十九年三月まで）
昭和五七年　四月　浄土真宗聖典編纂委員会専門委員（平成四年三月まで）
昭和五八年　三月　本願寺派宗学院　卒業
昭和五八年　四月　浄土真宗聖典編纂委員会編纂主任補佐（昭和六十年五月まで）
昭和五九年　四月　中央仏教学院・学校教育部講師（平成四年三月まで）

昭和六〇年　五月　本願寺派勧学寮主事（平成元年三月まで）
昭和六〇年　六月　龍谷教学会議常任委員（平成六年三月まで）
昭和六〇年　九月　中央仏教学院通信教育部講師（現在に至る）
昭和六二年　四月　龍谷大学兼任講師（平成四年三月まで）
平成　元年　四月　本願寺派勧学寮賛事（平成二年八月まで）
平成　二年　八月　本願寺派勧学寮部長（平成四年三月まで）
平成　四年　四月　龍谷大学助教授（平成十二年三月まで）
平成　四年　四月　浄土真宗聖典編纂委員会編纂委員（平成十六年三月まで）
平成　四年　四月　浄土真宗本願寺派教学研究所助教授（平成十二年三月まで）
平成　四年一一月　龍谷大学真宗学会評議員（平成十二年十一月まで）
平成　六年　四月　中央仏教学院・学校教育部講師（平成十三年三月まで）
平成　九年　一月　学階司教を授けられる
平成一一年　七月　安居副講者として『安楽集』を講義する
平成一一年　四月　龍谷教学会議常任委員・事務局長（平成十八年十一月まで）
平成一二年　四月　龍谷大学教授（現在に至る）
平成一二年　七月　安居典議として会読を指導する
平成一二年一一月　龍谷大学真宗学会理事（現在に至る）
平成一三年　四月　龍谷大学教学部長（平成十五年三月まで）
平成一五年　四月　龍谷大学文学部選出評議員（平成二十年三月まで）
平成一五年　七月　安居典議として会読を指導する

平成一六年　四月　中央仏教学院・学校教育部講師（平成二十年三月まで）
平成一六年　四月　本願寺派宗務所・教学伝道研究センター顧問（平成二十三年三月まで）
平成一七年三月・四月　米国仏教大学院（IBS）に出講
平成一七年　四月　学階勧学を授けられる
平成一八年十一月　龍谷教学会議常任委員（現在に至る）
平成一九年八月・九月　ハワイ仏教研究所（BSC）に出講
平成二〇年　四月　龍谷大学宗教部長（平成二十二年三月まで）
平成二一年　四月　龍谷大学大学院実践真宗学研究科長（平成二十三年三月まで）
平成二一年　四月　真宗学研究財団評議員（平成二十五年三月まで）
平成二一年　四月　東京仏教学院講師（現在に至る）
平成二一年　四月　日本印度学仏教学会評議員（平成二十五年一一月まで）
平成二一年　七月　安居本講師として「顕浄土真実行文類」を講義する
平成二一年　九月　韓国東国大学校に出講
平成二二年　一月　改悔批判を与奪される
平成二三年　四月　日本仏教学会理事（平成二十五年三月まで）
平成二四年　四月　本願寺派勧学寮員（現在に至る）
平成二四年　四月　中央仏教学院・学校教育部講師（現在に至る）
平成二五年　四月　真宗学研究財団理事（現在に至る）

著書の部

書名	単著／共著	発行	発行年月日
親鸞聖人のことば	共著（共著者：村上速水）	法蔵館	平成　元年　七月
御文章を聞く	単著	本願寺出版社	平成　一年一一月
安楽集講読	単著	永田文昌堂	平成一一年　七月
新編安心論題綱要	共著	本願寺出版社	平成一四年　十月
安心論題を学ぶ	単著	本願寺出版社	平成一六年　一月
往生と還浄	単著	永田文昌堂	平成一六年　二月
やわらかな眼	単著	本願寺出版社	平成一七年　九月
浄土三部経と七祖の教え	共著	本願寺出版社	平成二〇年　八月
顕浄土真実行文類講読	単著	永田文昌堂	平成二一年　七月
今、浄土を考える	共著	本願寺出版社	平成二二年　三月
真宗保育の歴史	共著	真宗保育学会	平成二三年　十月
顕浄土真実教行証文類（コロタイプ版）解説	共著	浄土真宗本願寺派宗務所	平成二四年　一月
顕浄土真実教行証文類（解説論集）	共著	浄土真宗本願寺派宗務所	平成二四年　八月

学術論文の部

論文名	備考	発行年月
一念覚知説の検討	真宗研究会紀要　第八号	昭和五一年　二月
信心の智慧に対する一考察	真宗研究会紀要　第一〇号	昭和五三年　六月

共同研究『安楽集』における引用文の研究（一）	真宗研究会紀要　第一二号	昭和五四年　三月
共同研究『安楽集』における引用文の研究（二）	真宗研究会紀要　第一三号	昭和五五年　三月
親鸞教義に於ける信心の智慧に対する一試論	印度学仏教学研究　第二八巻第二号	昭和五五年　三月
親鸞教義に於ける信心の智慧（二）	印度学仏教学研究　第二九巻第一号	昭和五五年一二月
親鸞教義に於ける信心の智慧（三）	印度学仏教学研究　第三〇巻第二号	昭和五七年　三月
真宗教学の論理構造―江戸宗学の基本姿勢―	印度学仏教学研究　第三一巻第二号	昭和五八年　三月
真宗教学の論理構造―衆生の論理と仏の論理―	真宗学　第六八号	昭和五八年　三月
江戸宗学の宗体論	宗学院論集　第五四号	昭和五八年一〇月
真宗教学に於ける実相の取り扱い	印度学仏教学研究　第三二巻第二号	昭和五九年　三月
他方世界としての浄土	龍谷教学　第二〇号	昭和六〇年　一月
『安楽集』における道綽禅師の浄土観	桐溪順忍和上追悼論文集	昭和六一年一二月
親鸞における実践の論理構造	真宗学　第七五・七六合併号	昭和六二年　三月
親鸞における「本願」の用語例―特に『教行信証』において―	北畠典生教授還暦記念『日本の仏教と文化』	平成　二年　七月
宗祖教義における往生と成仏―『岩波仏教辞典』の記述を縁として―	中央仏教学院紀要　第七号	平成　二年一二月
真宗教学における称名報恩の意義	真宗学　第八七号	平成　四年一二月
親鸞の神祇観についての一考察	龍谷紀要　第一五巻一号	平成　五年　八月
宗祖の往生観	真宗研究　第三八輯	平成　六年　一月
親鸞聖人における往生と成仏―松野純孝博士の『親鸞聖人における往生と成仏』に就いての疑問―	中西智海先生還暦記念論文集『親鸞の仏教』真宗学　第九一・九二合併号	平成　六年一二月
「方便化身土文類」の意義	論註研究会編『曇鸞の世界』	平成　七年　三月
曇鸞の往生思想―『往生論註』を中心として―	日本仏教学会年報　第六一号	平成　八年　一月
		平成　八年　五月

真宗教学と和平（仏教における和平）	真宗学　第九五号	平成　九年　一月
『歎異抄』第三章についての一考察（一）	村上速水先生喜寿記念『親鸞教学論叢』	平成　九年　五月
「化身土文類」の隠顕釈についての諸説	龍谷紀要　第一九巻一号	平成　九年　八月
『歎異抄』第三章についての一考察（二）蓮如上人の神祇に関する教化	浄土真宗教学研究所編『蓮如上人研究教義篇Ⅰ』	平成　　年　二月
善譲師の行信論（一）―『行巻両一念猶存録』の検討―	教学研究所紀要　第六号	平成一〇年　三月
親鸞の和語聖教に於ける本願成就文釈―特に「即得往生」の解釈について―	真宗学　第九七・九八合併号	平成一〇年　三月
『歎異抄』第三章についての一考察（三）	真宗学　第九九・一〇〇合併号	平成一一年　三月
親鸞聖人における往生	真宗研究　第四五輯	平成一三年　一月
善譲師の行信論（二）―『行巻両一念猶存録』の検討―	教学研究所紀要　第九号	平成一三年　七月
「信文類」逆謗除取釈についての一考察	真宗学　第一〇五・一〇六合併号	平成一四年　三月
真宗教学における五逆・謗法・一闡提の位置づけ	真宗学　第一〇八号	平成一五年　三月
浄土三部経における往生思想	真宗学　第一〇九・一一〇合併号	平成一六年　三月
「一つところへまゐりあふ」と日本的心情―芥川龍之介の『おぎん』を題材として―	真宗学　第一一一・一一二合併号	平成一七年　三月
善導の往生思想	龍谷大学論集　第四六七号	平成一八年　三月
宗祖の証果論	龍谷教学　第四一号	平成一八年　三月
現世往生説の検討―上田義文博士の「親鸞の往生思想」について―	真宗学　第一一五号	平成一八年　三月
Shinran's Thought Regarding Birth in the Pure Land	Buddhism and Psychotherapy	平成一八年
How to Express/Explain Amida Buddha in the Contemporary World Clues from Shinran's understanding of Amida Buddha	Pure Land (New Series 24)	平成二〇年一二月

親鸞の阿弥陀仏観	真宗学　第一一九・一二〇合併号	平成二一年　三月
実践真宗学研究科設立の意義	龍谷大学論集　第四七六号	平成二二年一〇月
「真仏土文類」における『論註』性功徳釈引意に対する一考察	真宗学　第一二三・一二四合併号	平成二三年　三月
「行文類」称名破満釈の解釈について	龍谷大学論集　第四七九号	平成二四年　三月
親鸞の往生観	福原隆善先生古希記念論集　仏法僧論集	平成二五年　二月
『教行信証』「証文類」引用文の所顕―願文と成就文―	真宗学　第一二七号	平成二五年　三月
親鸞における不可思議の意義	真宗学　第一二九・一三〇合併号	平成二六年　三月

講演録の部

講演題	備考	発行年月日
往生浄土の教え	高田学報　第九七輯	平成二一年　三月
現代における浄土の意義	龍谷教学　第四十四号	平成二一年　三月
親鸞聖人の阿弥陀仏観	山口真宗教学　第二四号	平成二五年　四月

辞書類の部

書名	単著／共著	発行	発行年月日
真宗人名辞典	共著	法蔵館	平成一一年　七月
仏典入門事典	共著	永田文昌堂	平成一三年　六月

廣田デニス教授略歴並主要論文著述目録

Dennis Hirota

略歴

1967年6月	B.A., University of California, Berkeley.
1969年1月	M.A., San Francisco State University.
1974年4月-1999年1月	Head Translator, *The Collected Works of Shinran*, 本願寺国際センター.
1978年4月-2005年3月	*The Eastern Buddhist* 仏教学術雑誌、編集委員（イースタンブデイスト協会).
1980年4月-1996年3月	*Chanoyu Quarterly*, (Kyoto: Urasenke), Consulting Editor.
1987年1月	Colgate University, New York, 招聘客員教授.
1992年9月-1993年1月	Harvard University, 招聘客員研究員.
1995年7月-1996年9月	Institute of Buddhist Studies, Adjunct Professor.
1996年3月	文学博士、名古屋大学大学院（東洋哲学).
1996年10月-1997年4月	国際日本文化研究センター、客員教授.
1999年1月-1999年5月	Harvard University, 招聘客員教授.
1999年5月-2003年3月	筑紫女学園大学、教授.
2000年9月	Prince Franz-Josef and Princess Gina Memorial Lectures, International Academy of Philosophy, Liechtenstein.
2003年2-3月	St. Andrews University, Scotland, 客員研究員.
2003年4月-	龍谷大学、教授.
2008年9月-2009年1月	Harvard University, 招聘客員教授.
2012年8月-2013年2月	Harvard University Center for the Study of World Religions, 客員研究員.

著書（日本語）

『親鸞—宗教言語の革命者』法蔵館、1998年8月、266頁.

Winds of Virtue: The Japanese Buddhist Thinker Shinran in the Light of Heidegger. Albany, N. Y.: State University of New York Press. Forthcoming.

論文（日本語）

「親鸞の言語観」.『思想』（岩波書店）871 号、54-80 頁、1997 年 1 月.

「日本浄土思想と言葉：なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」『日文研フォーラム 』国際日本文化研究センター編, 第 96 回、1998 年. 36 pp.

「親鸞思想と解釈」.『日本研究』（国際日本文化研究センター／角川書店）第 17 号、47-86 頁、1998 年.

「中世浄土思想と和歌　――一遍・親鸞の一考察―」.『日本思想史』（ぺりかん社）52 号、19-43 頁、1998 年.

「茶の湯の意義をどう理解するか」『茶道学』、「別巻」. 淡交社、2000 年.

「親鸞思想における病・治療・健全」. 立川武蔵編、『癒しと救い　―アジアの宗教的伝統に学ぶ―』玉川大学出版部、186-206 頁、2001 年.

「英語圏における親鸞思想　―現代的理解と表現を求めて―」『現代と親鸞』（親鸞仏教センター）、第 12 号、141-177 頁、2007 年.

「親鸞のホーリズムとその意義　―ハイデガーとの比較的観点からの考察―」.『人間文化研究所年報』（筑紫女学園大学）、第 21 号、 1 -13 頁、2010 年.

「親鸞の時間性および自然思想の一考察　―ハイデガーとの比較観点から―」『真宗学』第 123・124 号、85-103 頁、2011 年.

「親鸞は法然から何を学んだか？ ―「転入」としての解釈学―」. 仏教大学編、『法然仏教とその可能性』法蔵館、493-523 頁、2012 年.

Articles（英語）

Response to Prof. Luis O. Gomez. With Ueda Yoshifumi. *Monumenta Nipponica* 38 (4): 413-417, 1983.

“On Translating Shinran.” Presented at “Symposium on Shin Buddhism and

著書（英語）

Tannishō: A Primer. Kyoto: Ryukoku University, 1982. 135 pp.（『歎異抄』原文・英語の対訳）.

No Abode: The Record of Ippen. Kyoto: Ryukoku University, 1986. 251 pp. Revised and expanded edition: Honolulu: University of Hawai'i Press, 1997. lxxxviii + 182 pp.（一遍の思想研究及び『一遍上人語録』の英訳と注釈）.

Shinran: An Introduction to His Thought. With Yoshifumi Ueda. Kyoto: Hongwanji International Center, 1989. 372 pp.（親鸞仏教の思想入門）.

Plain Words on the Pure Land Way: Sayings of the Wandering Monks of Medieval Japan. A Translation of Ichigon hōdan. Kyoto: Ryukoku University, 1989. 120 pp.（念仏聖の研究及び『一言芳談』の英訳と注釈）.

Wind in the Pines: Classic Writings of the Way of Tea as a Buddhist Path. Fremont: Asian Humanities Press, 1995. 384 pp.（連歌・茶道における日本芸道思想と仏教の研究・関連資料の英訳と注釈）.

The Collected Works of Shinran. Translated, with Introductions, Glossaries, and Reading Aids, by Dennis Hirota (Head Translator), Hisao Inagaki, Michio Tokunaga, and Ryushin Uryuzu. Kyoto: Jōdo Shinshū Hongwanji-ha, 1997.

Volume I: The Writings, 704 pp. 親鸞著作全訳（as Head Translator 翻訳主任）.

Volume II: Introductions, Glossaries, and Reading Aids, 368 pp.（親鸞著作解説〔共著〕）.

Toward a Contemporary Understanding of Pure Land Buddhism. Edited by Dennis Hirota. Articles by Musashi Tachikawa, Dennis Hirota (Introduction [pp. 1-31]；Chapter 1 [33-72]；Chapter 6 [163-198], Afterword [241-247]), John Yokota, Gordon D. Kaufman, and John B. Cobb, Jr. Albany, N. Y.: State University of New York Press, 2000. 257 pp.

Asura's Harp: Engagement with Language as Buddhist Path. Heidelberg: Universitätsverlag Winter, 2006. 156 pp.

Japan in Practice. Princeton University Press, 1999. 268-279.

"Reflections on the Notion of the Inward Quest in the Japanese Buddhist Experience." In John Ross Carter, ed., *The Religious Heritage of Japan: Foundations for Cross-Cultural Understanding in a Religiously Plural World*. Portland, OR: Book East, 1999. 169-195.

Review of *Hōnen's Senchakushū: Passages on the Selection of the Nembutsu in the Original Vow, Senchakushū* English Translation Project. *Monumenta Nipponica*, 55 : 1 (Spring 2000), 139-142.

"Reading the *Collected Works of Shinran." Eastern Buddhist*, 33 : 2 (Spring 2001), 1-4.

"On Recent Readings of Shinran." *Eastern Buddhist*, 33 : 2 (Spring 2001), 38-55.

"The Lamentation and Self-Reflection of Gutoku Shinran" [*Tannishō and Gutoku hitan jikkai wasan*]. In Theodore DeBary and George Tanabe, eds., *Sources of the Japanese Tradition*. Volume One. Columbia University, 2001. 226-228.

"Murata Shukō: Letter on the Heart" and "The Spiritual Basis of the Tea Ceremony" [*Nanpōroku*]. In Theodore DeBary and George Tanabe, eds., *Sources of the Japanese Tradition*. Volume One. Columbia University, 2001. 395-398.

"Shinran, Barth, and Religion: Engagement with Religious Language as an Issue of Comparative Theology." In『仏教から真宗へ』永田文昌堂、119-135 頁、2003 年.

Review of *The Origins and Development of Pure Land Buddhism: A Study and Translation of Gyōnen's Jōdo Hōmon Genrushō*, Mark L. Blum. *Japanese Journal of Religious Studies*, 30/1-2 (2003), 162-166.

"Hick's Religious Pluralism from the Perspective of Japanese Buddhist Traditions."『西日本宗教学雑誌』(西日本宗教学会) 第 25 号、70-79 頁、2003 年.

"Religious Transformation and Language in Shinran." In Alfred Bloom, ed.,

Christianity," Center for the Study of World Religions, Harvard University, April 30, 1984. In Takeda Ryusei, ed., 『親鸞浄土教とキリスト教』 *Shinran Joōdokyō to Kirisutokyō*. Kyoto: Ryukoku University, 1996.

"Religious Transformation in Shinran and Shōkū," *Pure Land*, No. 3 (Kyoto, December 1987), 57-69.

Review of *Young Man Shinran: A Reappraisal of Shinran's Life*, Takamichi Takahatake. *Monumenta Nipponica* 43 (1): 117-120, 1988.

"Higan: The Japanese Observance of the Equinox." *Chanoyu Quarterly* No. 57: 7-17. 1989.

Review of *Jōdo Shinshū: Shin Buddhism in Medieval Japan*, James C. Dobbins. *Buddhist-Christian Studies* 10: 287-290, 1990.

"On Attaining the Settled Mind: An annotated translation of *Anjin ketsujō shō,*" *Eastern Buddhist*, 23 (2): 106-121, 1990, and 24 (1): 81-96, 1991. Portions reprinted in George J. Tanabe, Jr., ed., *Religions of Japan in Practice*. Princeton University Press, 1999, 257-267.

"Breaking the Darkness: Images of Reality in the Shin Buddhist Path," *Japanese Religions*, 16 : 3 (January 1991), 17-45.

"Shinran's View of Language: A Buddhist Hermeneutics of Faith." *Eastern Buddhist*, 24 : 1 (Spring 1993), 50-93 and xxvi: 2 (Autumn 1993), 91-130.

"The Illustrated Biography of Ippen," in Donald S. Lopez, Jr., ed., *Buddhism in Practice*. Princeton University Press, 1995, 563-577.

"Shinran." In Ian P. McGreal, ed., *Great Thinkers of the Eastern World*. HarperCollins, 1995. 315-321.

"Nishida's Gutoku Shinran," *Eastern Buddhist*, 28 : 2 (Autumn 1995), 231-244.

"Kamo no Chomei" and "Issa." In Ian P. McGreal, ed., *Great Literature of the Eastern World*. HarperCollins, 1996.

"Plain Words on the Pure Land Way." In George J. Tanabe, Jr., ed., *Religions of*

History: The Art of Tea. Fowler Museum at UCLA, 2009, 74-89.

"Shinran in the Light of Heidegger: Rethinking the Concept of *Shinjin*." In James Heisig and Rein Raud, eds., *Classical Japanese Philosophy*, Frontiers of Japanese Philosophy 7 (Nagoya: Nanzan Institute for Religion and Culture), 2010, 207-231.

"The Holistic Apprehension of Religious Life in Shinran and Heidegger: An Experiment in Comparative Shin Buddhist Thought"〔親鸞とハイデガーにおける宗教的存在の把握 ： 現代真宗思想の観点からの比較研究の試み〕.『龍谷大學論集』第 474/475 號、25-57 頁、2010 年.

"The Awareness of the Natural World in *Shinjin*." *Buddhist-Christian Studies*, 31 (2011), 189-200.

"Okakura Tenshin's Conception of 'Being in the World'"〔岡倉天心における「処世術」(*In-der-Welt-Sein*)〕.『龍谷大學論集』第 478 號、10-32 頁、2011 年.

"Japanese Pure Land Buddhist Philosophy." In *The Stanford Encyclopedia of Philosophy*, 2012. http://plato.stanford.edu/archives/win2012/entries/japanese-pure-land/.

"Shinran's Hermeneutics of Entry into Religious Awareness." In 今井雅晴先生古稀記念論文集編集委員会編, 『中世文化と浄土真宗』. 思文閣, 2012. 1-28 (642-615).

"The Way of Shinran." In M. Darrol Bryant, ed. *Ways of the Spirit: Celebrating Dialogue, Diversity, & Spirituality*. Kitchener, ONT: Pandora Press, 2013, 36-44.

"Freedom and Safe-guardedness in Shinran and Heidegger"〔親鸞とハイデガーにおける「自由」と「護念」の思想〕.『真宗学』第 128 号、1-20 頁. 2013 年.

"Christian Tradition in the Eyes of Asian Buddhists: The Case of Japan." In *The Handbook of Christianity in Asia*. Oxford University Press. 2014.

"Shinran and Heidegger on Dwelling: Reading Shinran as a Phenomenology of Shinjin." *Contemporary Buddhism: An Interdisciplinary Journal* (Routledge),

Living in Amida's Universal Vow. Bloomington: World Wisdom, 2004. 87-102.

"Reciting the Name of the Buddha" [Hōnen: *On the Nembutsu Selected in the Primal Vow*] and "The Gift of Faith" [Shinran: *The True Teaching, Practice, and Realization*] in Donald Lopez, Jr., ed., *Buddhist Scriptures*. Penguin Classics, 2004. 379-387 and 522-530.

"Engaging Religious Language in the Pure Land Path: Repositioning Shin Buddhist Tradition in the Field of Buddhist Studies." In Shoun Hino and Toshihiro Wada, eds., *Three Mountains and Seven Rivers*. Motilal Banarsidass, 2004. 169-186.

"The Pure Land, the Finitude of Human Existence, and Dialogical Engagement." 『真宗学』第 111・112 号、25-38 頁、2005 年.

Review of *Letters of the Nun Eshinni: Images of Pure Land Buddhism in Medieval Japan*, James C. Dobbins. *Monumenta Nipponica*, 60 : 4 (2005), 542-546.

"Karman: Buddhist Concepts." In Lindsey Jones, ed., *The Encyclopedia of Religion*. 2nd Edition. Macmillan Reference, 2005. Volume 8 : 5097-5101.

"Truth as Dialogic Event and Authentic Life in Shinran." 『真宗学』113 号、1-30 頁. 2006 年.

"Revelation as Sacrament in Shinran and Barth." In *Love across the Pacific: Leroy Seat Commemorative Book*. Fukuoka: Touka Shobo, 2006, 137-154.

"Shinran and Heidegger on Truth." In Paul Numrich, ed., *Boundaries of Knowledge in Buddhism, Christianity, and the Natural Sciences*. Göttingen: Vandenhoeck and Ruprecht, 2008. 59-79.

"Shinran and Heidegger on the Phenomenology of Religious Life" 〔親鸞とハイデガーにおける宗教的存在の現象学的考察〕. 『真宗学』第 119・120 号、1-30 頁. 2009 年.

"Buddhist Thought and the Way of Tea." In Beatrice Hohenegger, ed. *Steeped in*

2014.

"How to Read Shinran." In Gereon Kopf, ed., *Dao Companion to Japanese Buddhist Philosophy*. Springer, 2014.

"The Philosophical Dimensions of Shinran's Shin Buddhist Path." In *The Oxford Handbook of Japanese Philosophy*. Oxford University Press. Forthcoming.

目　次

口　絵　林　智康教授近影
内藤知康教授近影
廣田デニス教授近影

題　言……（一）
林智康教授略歴並主要論文著述目録……（七）
内藤知康教授略歴並主要論文著述目録……（一六）
廣田デニス教授略歴並主要論文著述目録……（二三）

源信和尚と親鸞聖人……林　智康（一）
親鸞における不可思議の意義……内藤知康（三一）
「真宗」はどう学問するか？……廣田デニス（四九）
親鸞浄土教における善知識の問題（一）……川添泰信（八一）

生きることの意味、物語をどう伝えるか……田畑正久（一〇一）
東陽円月研究序説
——青年期修学時代を中心とする伝記考証——……龍溪章雄（一三五）
真宗伝道における自信教人信の意義……貴島信行（一四九）
妙好人と智慧
——柳宗悦「無対辞文化」が投げかけるもの——……藤能成（一六七）
親鸞における生死の出離（上）
——「生死いづべきみち」の意義——……鍋島直樹（一八九）
実践真宗学における研究方法の研究……葛野洋明（二一一）
真宗他者論（一）
——実践真宗学の原理としての〈他者〉——……杉岡孝紀（二三三）
親鸞の菩提心理解の一背景……武田晋（二五一）
『浄土三経往生文類』についての一考察
——広略二本の相違を通して——……殿内恒（二七一）
往生一定と往生不定……玉木興慈（二九一）

「如来とひとし」という表現をめぐって……井上善幸（三〇九）
法然『往生要集』釈書の研究……高田文英（三二九）
――『料簡』・『略料簡』を中心に――
三業帰命説の伝統に関する一考察……井上見淳（三四九）
――「たすけたまへ」の発語と「改悔」――
戦後における親鸞論と森龍吉の「真宗思想史」構想……岩田真美（三六九）
二河白道の譬喩の物語性……山本浩信（三八九）
『正像末法和讃』「国宝本」と「顕智本」の比較研究……稲田英真（四〇三）
――『法事讃』との関連に注目して――
『十住毘婆沙論』の難易二道思想についての一考察……和　隆道（四二三）
真宗学会第六十七回大会研究発表要旨……（四四三）
平成二十五年度真宗学講義題目……（四五六）
平成二十四年度　真宗学修士論文・卒業論文題目一覧……（四六二）
真宗学会消息……（四六八）
平成二十四年度　真宗学関係研究論文目録……（37）

Jōdo Shinshū's Doctrinal Reflection on The Possibility of Children
Attaining Birth in the Pure Land (*shōmi ōjō*) ……Eisho Nasu（23）
脳死臓器移植再考 ……早　島　　理（1）
——イスタンブール宣言をめぐって——

唱導家としての聖覚像について

龍谷大学大学院　西河　唯

『明義進行集』に、「上人ツネニノタマヒケルハ吾ガ後ニ念仏往生ノ義スクニイハムスル人ハ聖覚ト隆寛トナリト云々（『明義進行集　影印・翻刻』一五八頁）」と評されていることや、『四十八巻伝』巻十七に、「聖覚法印わが心をしれり（『法然上人伝全集』八〇頁）」とあるように、聖覚が、専修念仏教団にとって、法然の教えに帰依した人物であると捉えられていたことは間違いない。親鸞も、「消息」の中で、聖覚の『唯信鈔』の熟読を勧め、幾度も書写して門弟に与えている。「他方」聖覚は当時の国家的法会に証義として度々出仕している他、『天台座主記』や『華頂要略』によると、晩年に至るまで比叡山において活躍していたという記録が散見される。さらに、『金綱集』には、嘉禄の法難時、聖覚らが朝廷に念仏宗の停廃を要請したという記事が存在する。また、『選択集』の印版焼却の奏聞も含まれていたとされる。

聖覚の著した『唯信鈔』は、聖覚が法然の『選択集』の肝要を抽出した書であるといえる。そうした法然教学に傾倒した書を著す一方で、聖覚は天台僧としてその生涯を全うし、嘉禄の法難の折、専修念仏弾圧に深く関わったとされる。この問題は、専修念仏教団側と顕密仏教界側共に、嘉禄の法難という念仏弾圧事件を主軸に置いて、各々の立場より聖覚像を検討している。しかし、その点のみを強調して聖覚像を構築することは、果たして妥当といえるであろうか。

聖覚は、父であり師でもあった澄憲と共に、後に安居院流として隆盛を極める一大唱導家であった。安居院流には種々の唱導資料が残されており、当時の貴族の日記、或いは説話集にも、澄憲・聖覚の名は頻出する。従来の専修念仏教団と顕密仏教界の対立構造からの視点ではなく、聖覚の唱導家としての側面を窺っていくことで、そもそも聖覚像の上に、矛盾点は存在しないのではないかということを明らかにしていく。

唱導とは『高僧伝』に、

唱導者、蓋以宣唱法理、開導衆心也

（『大正蔵』五〇、四一七頁c）

とある通り、仏法の教えを唱え、衆生を導くことである。説教には大きく分けて、

①宗教的法義・法門講談・法話の系列

②譬喩因縁談を中心とする口演

という二つの系列があるとされ、平安末期から鎌倉にかけては、

この第二系列の説教が台頭した。また、「吉水大懺法院条々起請事」第四条「供僧器事」に、

右、末代近用二僧徒一有二四種一、一者顕宗、二者密宗、三者験者、四者説経師也。顕者已成業、密者已灌頂也。験者属レ密、説法属レ顕　（『大正蔵（図像）』一二、九頁）

とあるように、当時説経師は顕宗とは別のものとして興隆していたことが分かる。虎関師錬『元亨釈書』巻二十九「音芸志」にも、安居院流の隆盛であったことが示されている（『日仏全』一〇一、三五六頁）。

安居院流の法会唱導に関する資料としては、『言泉集』、『転法輪鈔』、『讃仏乗鈔』等を挙げることができるが、その内容は、公家社会において催された法会の願文・表白が殆どである。承久の乱に際しては聖覚が後鳥羽院の戦勝祈願を行っており、『吾妻鏡』によれば、乱後に鎌倉に下向し、北条政子の追善のための寺院落慶法要の導師を勤めている。公家社会に限定した場合でも、その行動範囲は広いといえる。

一方、民衆社会との関係については、説話集の中に聖覚の説法について取り上げたものが多く確認される。『沙石集』巻六の、六角堂再建勧進のための説法の際、聴衆の放屁に対して当意即妙に切り返したという聖覚の説法の巧みさが窺える説話や、『古今著聞集』巻十六の、聖覚の説法を職人のような人々までが聞いていたということを示す説話である。これらの説話は、安居院唱導が民衆にも認知されていたことを意味している。説話集の中に見られる聖覚像は、貴族社会の中で優美な唱導をなした高僧としての姿より、広く庶民の讃仰を得ていた姿を示しているといえる。

また、『唯信鈔』の中にも、巧みな譬喩表現が多く見られる。これは聴衆を前提とした唱導的表現ということができる。『唯信鈔』は、内容的には『選択集』の肝要を抽出した書であるが、従来からの指摘の通り、談義本の祖、或いは唱導の原稿としての評価は、当時の安居院流の活動範囲や、『唯信鈔』に用いられている巧みな譬喩表現からも、妥当であるといえる。

聖覚が『選択集』の肝要を抽出した『唯信鈔』を著した事実と、嘉禄の法難時において弾圧の主導的役割を果たした事実は、それぞれの立場に立った場合、矛盾する二面性が生じていると捉えることができよう。しかし、当時唱導家という存在は、宗派の枠や道俗貴賤を超えて認知されていたのである。それ故、専修念仏教団側から、或いは顕密仏教界側からといった対立構造ではなく、「唱導家」としての聖覚を基盤として、立体的に聖覚という人物を捉えた時、そこに上述のような矛盾は存在しえないのではないかと考えられるのである。

ヨーロッパにおける浄土真宗の伝道

――特に『歎異抄』を用いた伝道について――

禿　定心

ヨーロッパにおける浄土真宗の伝道は、一九五四年にドイツ人のハリー・ピーパー氏（一九〇七～一九七八）が、当時の西本願寺大谷光照門主より帰敬式を受けて、ヨーロッパで初の浄土真宗信徒となり、二年後、ベルリンで「浄土真宗仏教協会（Buddhistische Gemeinschaft Jōdo Shinshū）」を発足させ、ヨーロッパで初の浄土真宗の伝道拠点を設立したところから、実際的な活動が始まる。それ以来ピーパー氏は、日本の学識者や、ハワイの信徒が組織した「ドイツ念仏友の会」の支援を受け、ドイツはもとよりヨーロッパ各地の人々に手紙などを通して浄土真宗の教法を伝えた。そのことにより、オーストリアのフリードリッヒ・フェンツル氏やスイスのジャン・エラクル氏などが信徒となり、それぞれの国で浄土真宗協会を設立させている。キリスト教圏のヨーロッパの地において、このように浄土真宗の礎を築かれたピーパー氏が、浄土真宗に帰依していくきっかけとなったのが、一九五四年に、当時ベルリンに留学していた山田宰工学博士（一九二三～一九八七）を通じて手にした、池山榮吉の独訳『歎異抄』であった。そこで本発表では、ピーパー氏を中心にヨーロッパの信徒が『歎異抄』からどのような影響を受けているのかを考察し、『歎異抄』を用いた浄土真宗の伝道がヨーロッパにおいてどのような意義をもつのかを検討したい。

一九五四年五月、ピーパー氏はベルリン工科大学物理工学研究所に留学していた山田宰氏と、フローナウの仏教寺院の行事で出遇う。以来、山田氏はピーパー氏の所属する仏教研究グループの集会において、定期的に池山榮吉の独訳『歎異抄』についての講義をもち、浄土真宗の教法をピーパー氏方々に紹介することになる。山田氏の記述した「ピーパー師と歎異抄」（『ヨーロッパの妙好人 ハリー・ピーパー師』三四頁）には、ピーパー氏が浄土真宗に対して初めて強い関心を示したのは、『歎異抄』第十三条の「またあるとき、唯圓房はわがいふことをば信ずるかと（中略）これにてしるべし、なにごともこゝろにまかせたることならば、往生のために千人ころせといはんに、すなはちころすべし」（真聖全二・七八二）の一節に出遇った時であると述べられている。この親鸞と唯円の問答では、善と悪とを判断する人間の心を揺さぶり、人間の善悪を超越したところにある本願の他力救済があかされている。これほどまでに悪の問題を掘り下げ、人間の本性に迫る親鸞と唯円の問答は、ピーパー氏がこれまで歩んできた求道の中で大きな驚きと転換をもたらしたのではないだろうか。

ピーパー氏が山田氏宛に送った手紙（一九六七年四月二十一日付）には「今でも、私は『歎異抄』を毎日読んでおります。そして私の人生の終わるまでにこの小冊子を完全に読み終える

ことはできないものと信じています。なぜなら私はその中にいつも新しいものを発見するからです」（『ヨーロッパの妙好人ハリー・ピーパー師』四二頁）と生涯をかけて『歎異抄』に聞いていく生き方が述べられている。

ピーパー氏に『歎異抄』を伝えた山田氏は、名古屋一道会の花田正夫氏に師事し、ドイツへ留学する前、花田氏より池山榮吉の独訳『歎異抄』を手渡される。花田氏の師は池山氏である。池山氏は求道の始めに、『歎異抄』を通じて親鸞の心に触れている。師から弟子へと『歎異抄』を通して親鸞の教法が語り伝えられ、その結果、ピーパー氏も『歎異抄』に出遇い、浄土真宗へと導かれていったのである。その『歎異抄』の連なりは、現在もピーパー氏に感化された他のヨーロッパの信徒やその弟子たちにも及んでいると言えるのではないだろうか。

もともとカトリックの司祭であったジャン・エラクル氏は、ピーパー氏との出遇いから浄土真宗に帰依し、スイスに信楽寺を開創している。現在はエラクル氏の弟子であるジェローム・デュコール氏がその信楽寺の住職である。そのデュコール氏もまた、山田宰の仏訳『歎異抄』を読み、第十六条の一節「すべてよろづのことにつけて、往生にはかしこきおもひを具せずして（中略）わがはからはざるを、自然とまふすなり。これすなはち他力にてまします」（真聖全二・七八八）に強い感銘を受け、親鸞の教えの核心に触れている。

ピーパー氏から始まったヨーロッパにおける浄土真宗の伝道は、氏が『歎異抄』によって浄土真宗に帰依し、生涯をかけて『歎異抄』に聞いていく生き方を貫いたことによって、そのことが現在でも、氏に感化された他のヨーロッパの信徒やその弟子たちに影響を及ぼし続けているのである。そうであるからこそ、ヨーロッパにおいては、『歎異抄』を通じて浄土真宗へと導く伝道が適していると言えるのではないだろうか。ただし、『歎異抄』一辺倒ではなく、『歎異抄』から「浄土三部経」や親鸞の著作へ繋げていく伝道が必要であることは論を待たない。

島地大等と時代思潮

龍谷大学大学院　川　元　惠　史

島地大等（一八七五-一九二七）は主に明治後半期から大正期を通じて活躍した浄土真宗本願寺派の僧侶であり、仏教学者である。従来の仏教学研究、あるいは思想史研究において、島地は天台本覚思想を日本思想史の場に引き出した人物として積極的な評価を受けている。しかしそれらは本覚思想に言及する著述だけを対象とし分析しているため、島地大等の研究としては必ずしも十分なものとはいえない。実際島地の著作からは本覚思想に限らず社会への提言など多面的な関心が見られ、それぞれ個別の研究は若干存在するが、島地思想の全体構造に対する考察はほとんど皆無といってよい。

島地大等の研究を進めるにあたっては、同時代の仏教界の動

向に注意するとともに、当時の時代的な思潮にも目を向ける必要がある。もちろんこれはどのような人物を取り上げる際にも不可欠な作業ではあるが、殊に大正期は、様々な分野が渾然一体となって展開するところにその時代的特徴がある。そういった意味で島地研究において時代背景の検討は、より重要性が高まってくるだろう。

本発表では主に二つの視点から「島地大等と時代思潮」ということについて、検討を加えた。前半部では、島地の内から見た、つまり島地の目にどのように大正期が映っていたかを確認した。後半部では、島地を外から見て、島地が時代思潮とどのように関係していたかを考察した。

前者に関して、島地は明治期を彩る政治的・軍国的色彩の反動として大正期の思潮を捉えている。島地が分析する自我を中心とする傾向や分野を超えて一如の理想に向かおうとする傾向、これらは現代の大正期研究でもおおむね支持されるところであり、時代の当事者でありながら、冷静に自らが生きる時代を観察していたことが窺える。

また後者に関して、結論を先に述べれば、島地の時代思潮との関係は、「生命」と三世因果思想との結びつきとして特徴的に表れていた。

鈴木貞美は「「大正生命主義」とは何か」（『大正生命主義と現代』河出書房、一九九五年）において、主に大正期の日本において「生命」の語が氾濫し、「生命」がスーパー・コンセプトとなっていた現象を「大正生命主義」と名づける。本発表では鈴木の「大正生命主義を時代の観察装置にする」という提言に触発されて考察を進めた。

島地はしばしば「永遠の生命」「永久の生命」という表現を使用するが、これらの言葉は、過去世・現在世・未来世とそれを貫く業という仏教的な三世因果の思想とつながっていることが確認できる。

云ふ迄もなく吾々の人格は不滅である。極く通俗の言葉で云へば、所謂霊魂は不滅である。もう少し洗煉して云へば、生命の不滅である。此の不滅の生命、即ち悠久なる過去と永遠の将来とを有する所の此の生命と云ふ問題を真面目に考へた時に、其処に現れるのは此の流転の自我と云ふ事である。（島地大等「信仰はなぜ人間に必要でせうか」（『真宗婦人』二巻一号、一九二三年、『思想と信仰』所収）四七一-四七二頁）

島地において、この三世因果の概念は非常に重要な地位を占める。なぜなら、三世因果の自覚を徹底することが信仰に入るための根本的な前提と捉えられているからである。このことは著述の中でもたびたび言及されている。

流転の自我と云ふ事を、能く能く泌々と深く広く想ひ浮べた時に、其処に現実に現れて居る此の人類生活の凡ゆる変化・差別・浮沈み・苦しみ・悲しみ・嘆き・喜び・楽しみの種々相が、皆我が流転の一相であることが十分に見詰められる。〈中略〉此の自覚に立つた時始めて、此の信仰の

必要と云ふものが適切に実感されるものである。（島地大等前掲書、四七二頁）

業力の反省自覚は慚愧であり懺悔であり対自悔恨である。この深き内観から奮ひ起つ力は聖者の願力である。〈中略〉業力の凝視諦観から自からなる願力の憧憬、而して聖者菩薩の願力から如来の―阿弥陀仏陀世尊の―大願業力に乗ぜずに居れない。（島地大等『大願業力と国土建立』京都本派本願寺臨時救災事務所、一九二三年（『思想と信仰 続編』所収）二二一頁）

業力に引きずられる自我、三世のただ中にいる自我が徹底的に自覚されたとき、おのずから信仰に入ることになるというのである。島地が熱心な真宗者であったことを考慮するならば、島地にとって重要な局面で「生命」が関係したことになる。本発表は、大正生命主義の仏教的展開の一事例としても、有効なサンプルとなるであろう。

さらに私見では、この「三世因果の自覚から信仰へ」という構図は、冒頭で言及した「島地思想の全体構造に対する考察」においても効力を発揮する。これについては稿を改めて論じたいが、この構図をもってすれば、島地大等の様々な活動をある程度は統一的な視点でもって把握することができるのではないかと考えている。

親鸞の一乗思想における叡山教学の受容

――源信『一乗要決』との関連を中心に――

四夷法顕

はじめに

最澄と徳一の「一三権実論争」を受け、一乗真実の道理を開顕したのが源信の『一乗要決』（以下『要決』）であり、親鸞教学においても『要決』からの影響はこれまでに指摘されている。中でも一乗海釈における「言二一乗海一者」から「唯是誓願一仏乗也」の私釈については、開華院法住師が『要決』所引の『勝鬘経』を元にした文章であるとの指摘を行っている。[1]

本論では、先行研究を踏まえた上で、私釈において『勝鬘経』依用以外に『要決』の影響を受けたと思われる箇所を指摘する。そしてその箇所と『要決』との文脈の相違点を検討し、親鸞が明示する一乗思想の独自性を明らかにする。さらに『要決』からの影響が認められる場合、親鸞は何故自身の著述に『要決』の書名を出さないのか、その態度についても検討を加えていく。

一、一乗海釈の構造と『一乗要決』

一乗海釈の私釈は『要決』所引の『勝鬘経』と乃至の略称形

態と末尾が一致しており、『要決』をベースに造文されているのは間違いない。この他にも「一乗」の名目が類似している。本来「一乗」は二乗・三乗、「大乗」は小乗、「仏乗」は声聞乗・縁覚乗・菩薩乗に対する名目であるが、『要決』では「一乗」は仏乗であり、大乗であると示される。私釈においても、「言二一乗海一者、一乗者大乗」の語を挿入し、直後の「大乗者仏乗」と連結させることによって、『要決』と同様に一乗・大乗・仏乗が同一の名目で示されている。(2)

さらに、「大乗」の概念が類似している。(3) 親鸞は私釈の後、『涅槃経』「聖行品」と『要決』にも引かれる「徳王品」を引用することで、『要決』と同様に「大乗」が「一道」と規定する。この「一道」の説示は、後に引用される『華厳経』の説示に繋がり、誓願一仏乗が論成される為のキーワードとなる。

二、親鸞の一乗思想の独自性

親鸞は『要決』の「究竟一乗」という文を「究二竟一乗一」と動的訓点を施すことによって、周遍法界の悟りを得しめるのは一乗の力用であるという文脈に変換している。さらに、私釈では『要決』にはない「三乗」の語が加えられている。これは『勝鬘経』の「無有二乗」の文に、『法華経』方便品の「無二亦無三」の文意を合わせることによって出された語である。そして二乗三乗に天台一乗を含む全仏教をおさめ、それらを一乗への方便法とすることで、二乗三乗が開かれるのは「入二於一乗一」の為であり、用きとしての「一乗」という文脈になる。

三、何故『一乗要決』の書名を出さないのか

親鸞が『要決』から影響を受けているのは間違いないが、親鸞の著述には一度も『要決』の書名が明示されない。これは『本典』に『法華経』が一度も引用されない事と関連していると思われる。以下、これまでの『法華経』不引に関する諸説を挙げる。

① 捨聖帰浄説。(真宗学を中心とする説)
② 『法華経』の精神が『教行信証』の助顕の作用をなしている。(佐々木憲徳氏)
③ 『法華経』が『大無量寿経』の中へ吸収されている。(横超慧日氏)
④ 偶然説。(日下大癡氏)
⑤ 『涅槃経』の引用はそのまま『法華経』引用に通ずる。(山田龍城・福原亮厳両氏)
⑥ 『法華経』至上主義の天台教判を『大無量寿経』至上主義の教判へと昇華させた。(淺田正博氏)

これらの諸説を踏まえた上で、以下に親鸞の『法華経』に対する態度を挙げる。

- 親鸞の一乗思想は天台法華一乗が基盤となっている。
- 『法華経』が引用されない一方で、天台五時判で同時同味の経とされる『涅槃経』は多く引用される。
- 多数の天台教判用語が依用されている。
- 多くの天台典籍を引用するが『法華経』の文言を註釈する『法華玄義』、『法華文句』は一度も引用されない。

・一乗海釈の私釈において『法華経』方便品の「無二亦無三」の文意を加えている。

これらを考慮すると、⑥の淺田説が適切であろう。この事を『要決』が明示されない理由に合わせれば、『一乗要決』の「一乗」とは「法華一乗」を意味する為、「本願一乗」を掲げる著述に『要決』を明示すれば、どちらが一乗なのか混乱をきたす為に敢えて取り上げなかったのであろう。

小　結

一乗海釈の私釈には『勝鬘経』依用以外に、「一乗」の名目や「大乗」を「一道」と規定するところに『要決』との類似点が見られる。さらに、親鸞の一乗思想は『要決』の文脈を変換することで、天台一乗を含む全仏教を本願に帰一せしめるような絶対的教義体系へと昇華させているところにその独自性が存する。また、『要決』から影響を受けつつも、著述中にその書名を出さないのは、「本願一乗」を掲げる著述に「法華一乗」を証する書を明示するのは相応しくないとされたからであろう。

註

（1）『続真宗大系』第七巻『教行信証金剛録』（上）三〇二～三〇三頁。

（2）藤村潔「親鸞における悉皆成仏論」（『同朋仏教』第四六・四七合併号）。

（3）同右。

親鸞における自力に関して

杉　田　了

一

親鸞は本願他力により救われる道を示し、その他力に帰した場において衆生の自力は否定されている。また他力の信心を得たからといって衆生の煩悩性は臨終の一念まで消えることがなく、晩年においてもその内省が窺えるものである。これに関して『恵信尼消息』第五通に信後自力心を起こしたかの様にみられるものがあるが、親鸞においてそのようなものをどのようにみるべきであろうか。

二

『末灯鈔』第二通「まづ自力とまふすことは、行者のをのをのの縁にしたがひて、余の仏号を称念し、余の善根を修行して、わが身をたのみ、わがはからひのこゝろをもて身口意のみだれごゝろをつくろひ、めでたうしなして浄土へ往生せんとおもふを自力とまふすなり」等、自力について親鸞の説示をみると、自らの善によって往生成仏を目指すものとみられる。そして自力は、自力心、信罪福心、疑心等さまざまな表現で示されており、これらは他力に対して否定されるものである。他力の

信心は無疑心とされ、自力心は疑心ともみられることから、他力の信心の場において往生への自力心も否定される。

三

自力心が疑心と同義であり、信後においてそれが認められないことに関して、疑心往生の異義への批判を窺う。疑心往生の異義については、善意『白絲篇』、盛田曇雄『安心三十計評決』、藤澤教聲『現代真宗異安心批判』、中井玄道『異安心の種々相』、大原性實「疑心往生の異義について」等に批判されている。疑心往生に対する諸先学の説を窺うと、信心と仏智疑惑は反対の概念であり、仏智疑惑と煩悩としての疑惑を区別し、信後において往生を疑う仏智疑惑の心は一切起こることがないとみられる。ならば同様に往生への自力心も起こらないであろう。

四

疑心往生説への批判から考えると、他力の信心を得たところに往生への自力心は起こらないとみられる。これに関して『恵信尼消息』第五通の三部経千部読誦の出来事を取りあげたい。これは親鸞の獲信時期に関連して扱われることがある。そして、そこにみられる三部経読誦等を自力の行として、親鸞はこの時点で他力に帰していないとみるものがある。これに対して親鸞の「建仁辛酉暦棄雑行兮帰本願」等から獲信は建仁元年であり、三部経読誦はすでに他力に帰していたとするものがある。『教行信証』において本願が第十八願を指し、雑行に対して正行とせず本願とすること等からもこの解釈が妥当であろう。すると信後行われたこの読誦が「自力のしん」と内省されることが問題となる。浅野教信「親鸞聖人の弘願転入についての一・二の問題」では他力に帰していた上で「時と場合によっては、煩悩性たる自力心が頭をもたげてきて、弘願の救いに反する行動に走るのではないか」と、この読誦は衆生利益のために煩悩性としての自力心から行われたものとされる。この読誦を煩悩による自力心からの行為とみられるものは、信後に往生への自力心が起こらないことから区別されるべきものであろう。

五

親鸞が問題とする自力は、『教行信証』の「自力他力対」や竪超、竪出等を自力とし横超を他力とするもの等のように、他力の法に対するものである。また『一念多念文意』に「「凡夫」といふは、無明煩悩われらがみにみちみちて…臨終の一念にいたるまで、とゞまらず、きえず、たえずと」等とあるように、信後も衆生の煩悩は臨終まで残り続ける。この煩悩性を自力心とされるならば、信後に起こりえない仏智疑惑と同義の本願に対しいわれる自力心とは区別されるものとなる。『恵信尼消息』の読誦が「自力のしん」等と内省され、それが煩悩性としての自力心から為されたとみられるならば、[1]他力に対し問題とされる意味の自力心ではないとなる。このように『恵信尼消息』の読誦をみる場合、親鸞が問題としている自力との関係に注意す

る必要があるだろう。この煩悩性を自力心とするならば、煩悩性の自力心と本願に対する自力心の区別は、本願に対するかそれ以外に対するかの違いであろう。

六

親鸞において他力に対し自力は否定されるものであり、その自力は往生成仏へ自らの力をたのむものであった。そして信後は往生に対する自力心も起こらないと考えられる。そのため他力に帰した後の三部経読誦は往生に対する心から行われたものではなく、煩悩により為されたと考えられる。しかし親鸞が問題とする自力は往生に対する自力であり、信後起こらない心はそれを往生に役立てようとする心とみられる。『恵信尼消息』の読誦を煩悩としての自力心とみるならば、それは親鸞が他の著述で問題としている自力と区別してみる必要があり、その両者の関係には注意すべきものがあるだろう。

註

（1）親鸞の著述上には煩悩性を指して自力と表現する例は見られず、『恵信尼消息』が親鸞の直接の著述ではないことから、煩悩性を自力心として、親鸞における自力を区別することには課題もあると思われる。

善導における韋提希得忍について

岡崎秀麿

中国浄土教の大成者とも評される善導大師の主著『観経四帖疏』（以下、『観経疏』）は、「奇異な」「特異な」解釈を用いたと評されることがある。このような善導の『観無量寿経』（以下『観経』）に対する註釈は、『観経』の構造を理解した上で、『大経』の法門より『観経』の救済を根拠づけるという意図の下になされたことを、韋提希の得忍に関わらせて論じる。

善導は、『観経』利益分と華座観とを同一内容と解釈することで、韋提希の得忍が光台現国ではなく、華座観であることを『観経疏』「玄義分」において、

韋提得忍出在二第七観初一。経曰。「仏告二韋提一。仏当レ為レ汝分二別解一説除二苦悩一法一。説二是語一時。無量寿仏住二立空中一。観音勢至侍二立左右一。時韋提応レ時得レ見。接足作礼。歓喜讃歎即得二無生法忍一。何以得レ知。如二下利益分中説言一。「得レ見二仏身及二菩薩一。心生二歓喜一。歎二未曾有一。廓然大悟得二無生忍一」。非二是光台中見レ国時得一也。（『聖典全』678頁）

と述べる。こうした善導の解釈には、韋提希の見仏得忍が十六観ではなく、釈尊と無量寿仏との力によって成立したのであり、韋提希と同じく「凡夫」である「仏滅後の衆生」に対して救済の法を説き示すのが『観経』である、という善導の『観経』観

が背景に存在する。

しかしながら、韋提希と「仏滅後の衆生」には「釈尊」が存在するかどうかという決定的な差異を有し、そうした衆生が韋提希と同じく得忍する方法として提示されたのが、華座観に続く像観・真身観、下々品で説示される「念仏（称南無阿弥陀仏）」である。

ここで、韋提希が見仏した仏である「無量寿仏」と「称南無阿弥陀仏」との仏名の相違に注意したい。『観経』序分では、往生する国土として「阿弥陀仏の極楽世界」などと説かれるが、続く十六観中の前半十三観（定善）では見仏の対象として「光明熾盛不可具見」といわれるような光のはたらきを有する仏として「無量寿仏」が説かれる。その後、第十三観・雑想観において「無量寿仏」と「阿弥陀仏」との併用が見られるが、ここで、

無量寿仏身量無辺、非二是凡夫心力所一及。然彼如来宿願力故、有二憶想一者必得二成就。（『聖典全』91頁）

と述べられ、凡夫における「見（無量寿）仏」の根拠として「阿弥陀仏」の本願力が提示される。これを受けて、十六観中の後三観（散善）では、定善と異なり「阿弥陀仏」の名が用いられ、下々品に至って「応レ称二無量寿仏一。如レ是至レ心、令二声不一絶、具二足十念一称二南無阿弥陀仏一、称二仏名一故、於二念念中一除二八十億劫生死之罪一」（『聖典全』97頁）と説示され、明確に「無量寿仏＝阿弥陀仏」が示される。

従って、『観経』は、主題である「観（見）無量寿仏」の観法をつぶさに説示し、第十三観・雑想観においてその「見仏」の根拠を「阿弥陀仏の本願」に求め、続く散善において、「仏滅後」の衆生である凡夫に焦点を当てながら、それまで「無量寿仏」に対して説かれていた光明のはたらきや来迎を「阿弥陀仏」のはたらきとして説き、その中で「称南無阿弥陀仏」を凡夫救済の法として明示するという構造を有しているといえる。

『観経』序分に説かれた韋提希の目的である往生浄土、すなわち「我今楽レ生二極楽世界阿弥陀仏所一。唯願世尊、教二我思惟一、教二我正受一」（『聖典全』80頁）という言葉から『観経』の法門は展開しているのであり、明確に「観（見）無量寿仏」を本願力を根拠とするものとして易行化しつつ、「阿弥陀仏」の法門へと結びつけるのが『観経』の経説なのである。

『観経』を註釈する善導は、こうした経説を理解したため「五明二智者転レ教称二念弥陀之号一。六明下以レ称二弥陀名一故、除レ罪五百万劫上」（『聖典全』784頁）などといい、また『観経』に、

遇下善知識以二大慈悲一為説二阿弥陀仏十力威徳一、広説二彼仏光明神力一、亦讃二戒定慧解脱解脱智見一。此人聞已除二八十億劫生死之罪一（『聖典全』97頁）

と説かれるのに対して、「四明二善人為説二弥陀功徳一。五明下罪人既聞二弥陀名号一、即除レ罪多劫上」（『聖典全』786頁）と釈し、阿弥陀仏の十力威徳・光明神力・五分法身などあらゆる功徳が「弥陀名号」に摂められているという独自な解釈をしていると考えられる。

韋提希の見仏・得忍は、「仏滅後の衆生」の救済を提示する

契機であり、その救済を「阿弥陀仏」の法門に結びつけ説き示すのが『観経』である。この経説を読み取ったからこそ善導は、師の道綽、さらには曇鸞の教説に基づき「阿弥陀仏」の法門を『大経』第十八願（本願）として解し、本願に基づく「持無量寿仏＝称南無阿弥陀仏」こそが「仏滅後」の衆生を救済する法（除苦悩法）であり、釈尊の本意はこの法を説き示すことにあると主張しえたのである。

存覚『女人往生聞書』の成立
――所引経論の検討――

龍口恭子

存覚は元亨四年（一三二四）、了源の請いによって『女人往生聞書』を執筆した。存覚はこの時期、真宗の教化活動の上で、真宗の基本的理念の確立は勿論であるが、日蓮宗徒への対応・神祇思想への対応等、様々な問題を抱えていたが、女人教化もそのひとつであったと考えられる。

『女人往生聞書』は大経の第三十五願を取り上げ、あらゆる衆生の救いを誓った第十八願があるにもかかわらず、女人救済の第三十五願が建てられた趣意は何処にあるのかという問いに答えたその聞書という体裁を取ったものである。

本書の内容について言えば、「障り多く罪深い」女人のために、「疑いを為すがゆえに、殊更にこの願を起こし給う」とする。その証として、女人の罪障を明かす八つの文を経論から引証し、三従五障を述べ、我が国においても、女人を忌む霊地の例を挙げる。親鸞の思想に帰する善導・源空の三十五願の理解は、『大経』『観経』『阿弥陀経』の上に明らかであるとするのである。

さてこの論理は宗祖親鸞の思想を宣布することを試みたものであるが、その例証について言えば、存覚の例証の仕方は、すこぶる厳密で、典拠を挙げ、引用も一字一句揺るがせにしないという態度を取り、殊に三経七祖においてはこの姿勢を貫いていることは明らかである。存覚の引用典籍を著作全体に亘って調べたのは、江戸後期の宗学者琢成であり、これを補足したのが大正期の大須賀秀道である。

存覚は諸経論の中より「女人のさはり多く、罪深き」として「経論の内にその証これ多し」とし、八文を引用するが、これについて琢成は、『女人往生聞書壬辰記』の中で、『優塡王経』中の一文は確かに経典中に存在するが、『法華玄讃』に「『智度論』にいはく」として掲げられている一文は、実際には『智度論』中に存在せず、また、他の六文についても、経典中に同文がなく、存覚が経典中から取意したもの、或いは日蓮の『女人成仏抄』等からの引用とする。また大須賀秀道は、『女人往生聞書講話』において琢成の説を補い、さらに数点の引用文献を追加している。

本発表では、この二書に挙げられた「存覚所引経論を有する

文献」（「女人の罪障を現す文言」を掲載した書）を再検討し、さらに、今回新たに見つけ得た同様な文献も含めて検討することによって、存覚が実際にはどのような文献を使ったかを推測してみたい。

慶安四年石黒庄太夫刊の『類雑集』に「嫌女人諸文事」との項目で引かれるこれら一連の「女人罪障の文」ともいえる文は、それらをあげている典籍を宗派ごとに分類してみると、様々な宗派でそれぞれ異なる目的を持って引用していることがわかる。

天台宗系の『宝物集』・『渓嵐拾葉集』では、法華経の解釈をする上での資となるものとして、『金玉集』では「本書は同法のため」と跋で述べ、厳しい行に堪える僧侶を読み手としているのが伺える。浄土宗系の『捨子問答』・『四十八願釈』では、法然の女人救済の教えを強調するためであり、浄土真宗系の『女人往生聞書』・『女人教化集』・『四十八願諸解折衷述記』においては、女人教化を大経・観経・阿弥陀経の立場から捉えて、本願の念仏に遭い、名号を称えることにより、浄土に往生できると説く。また、日蓮は『女人成仏鈔』『法華初心成仏鈔』で、法華経の信奉のみが女人の救済の唯一の法と述べ、禅宗の『禅戒鈔』では女人が禅の修行の妨げとなることを、女人罪障の文を数々あげて説示する。

以上、所引の典籍の著作年代が不明であったり、書写・刊行年代が江戸時代まで下るものもあり、また今後も新たに発見される可能性もあるなど、断定することが難しいが、女人罪障の文によって、各宗の僧が自己の主張を強調してきた経緯を辿ると、これらの文が、仏教の全般に亘って享受され、一般化されたものではなかったかと推考できるのである。

本論であげた典籍で成立の明確なものの中で最も年代の古いものは平康頼編の『宝物集』であり、存覚がこの書より孫引きしたとの説もあるが、このような広範囲な流布を考える時、『宝物集』より以前、即ち平安中期に、既にこれらの文が流布していた可能性があると考えられるのである。

平成二十五年度真宗学講義題目

文学研究真宗学専攻

○浄土教理史演習
『教行証文類』の研究（続講）　川添　泰信

○真宗学演習
・『教行信証』の研究　林　智康
・真宗教学の諸問題
—真宗百論題の研究—　内藤　知康
・「親鸞浄土教と現代思想」　廣田デニス
・『教行証文類』の基礎的研究　那須　英勝
・親鸞思想における真実の救済観の解明　鍋島　直樹

○真宗教学史演習
・大正デモクラシーと近代真宗学の形成
—「真宗学」成立期のダイナミズム—　龍溪　章雄

○真宗伝道学演習
真宗伝道の総合的研究　深川　宣暢

○真宗学特殊研究
・真宗伝道学の基礎的研究とアメリカ伝道の実践的研究　川添　泰信

○真宗学特殊研究
A親鸞思想の普遍性再考
—多元主義的宗教理解に学ぶ—
B親鸞思想の普遍性再考
—多元主義的宗教理解に学ぶ—　那須　英勝
A生命を考える　野村　伸夫
B生命を考える　野村　伸夫
A浄土思想における信心と言葉の問題　廣田デニス
B浄土思想における信心と言葉の問題　廣田デニス

○真宗学文献研究
A親鸞の消息を読む　井上　善幸
B親鸞の消息を読み取る　井上　善幸
A続『六要鈔』の研究（上）　武田　晋
B続『六要鈔』の研究（下）　武田　晋
A「行文類」の読解（続講）　殿内　恒
B「正信偈」の読解
—「文類偈」との対比—　殿内　恒
A親鸞著作を英訳とともに読む　廣田デニス
B親鸞著作を英訳とともに読む　廣田デニス
A親鸞の手紙と『教行信証』の思想　藤　能成
B親鸞の手紙と『教行信証』の思想　藤　能成

○真宗教学史特殊研究
A「信文類」の諸問題（1）　内藤　知康
B「信文類」の諸問題（2）　内藤　知康

○浄土教理史特殊研究
A観念から称名念仏へ

―仏身の功徳から名号の功徳へ　福原　隆善
B観念から称名念仏へ
―法然浄土教の特色　福原　隆善
○伝道学特殊研究
B医療における生命の尊厳と親鸞の生命観の対話　鍋島　直樹

実践真宗学研究科

《基礎研究科目》
○現代社会論研究
現代社会と宗教　亀山　佳明
○現代宗教論研究
「宗教と科学」論
―西谷啓治・シュライエルマッハ―に学ぶ　高田　信良
○宗教教育学研究
宗教と人間形成　海谷　則之
○宗教心理学研究
「罪・悪と、徳」
―カント・ジェイムズ・親鸞に学ぶ　高田　信良
○真宗教義学研究
真宗教義　内藤　知康
○真宗教団論研究
真宗教団の存在意義　龍溪　章雄
○真宗伝道史研究
浄土真宗と伝道　林　智康
○実践真宗学研究
実践真宗学の基本的理解　深川　宣暢
○実践真宗学総合演習Ⅰ
(ア)実践真宗学の分野と方法
鍋島直樹・葛野洋明・貴島信行・田畑正久・早島理
(イ)実践真宗学の分野と方法
田畑正久・葛野洋明・貴島信行・鍋島直樹・早島理
○実践真宗学総合演習Ⅱ
(ア)実践真宗学の分野と方法
鍋島直樹・葛野洋明・貴島信行・田畑正久・早島理
(イ)実践真宗学の分野と方法
田畑正久・葛野洋明・貴島信行・鍋島直樹・早島理
○浄土教思想論研究
浄土教の生因思想の展開　杉岡　孝紀
○大乗仏教論研究
大乗仏教はいかにして成立したか　桂　紹隆
○仏教伝道史研究
アジア仏教の近現代史の学びから伝道の課題　藤本　信隆
○倫理学研究
生命と環境の哲学・倫理学　丸山　徳次

《専門研究科目（宗教実践活動分野）》
○宗教実践演習Ⅰ

・国内外の布教伝道の実践的側面に関する課題とその研究　葛野　洋明
・真宗伝道の基礎的研究と実践　貴島　信行
・宗教（仏教・真宗）における教義と伝道およびその実際　深川　宣暢

○宗教実践演習Ⅱ
・国内外の布教伝道の実践的側面を通した、各自の宗教実践的課題の研究　葛野　洋明
・法座伝道における実践方法　貴島　信行
・真宗伝道の種類と方法　深川　宣暢

○宗教実践演習Ⅲ
・国内外の宗教実践の課題を通した研究の結実　葛野　洋明
・浄土真宗における宗教実践の課題と方途　貴島　信行
・真宗伝道の実践的研究　鍋島　直樹

○宗教実践実習
・宗教的実践課題に則した実習　葛野　洋明
・真宗における布教伝道と寺院活動　貴島　信行
・真宗伝道の実際　鍋島　直樹

○宗教実践特殊研究
A真宗と西洋の出会い　廣田デニス
Bマスコミにおける宗教情報の研究
―新聞情報を中心に―　深川　宣暢
C国際伝道から窺う現代における伝道の研究
―理論と方法―　葛野　洋明
E仏教の教育と教化を考える　川村　覚昭
D本願寺教団の近代化と教団改革論　中西　直樹
F音声表現スキルの獲得　仲山　豊秋

○宗教法人運営論研究
Ⅰ現代社会における宗教法人運営の基礎研究　山口　卓
Ⅱ寺院の適正なる管理運営について　林　春男

○寺院活動論研究　善井　信明

○情報メディア論研究
宗教と情報メディア　宮本　義宣

○組織活動論研究
寺院活動の基本。　三上　章道

○布教伝道論研究
真宗伝道における基本的理解と実践　貴島　信行

○仏教音楽論研究
宗教における音楽の意味と意義　小野　真

○文書活動論研究
作文と添削　西　義人

《専門研究科目（社会実践活動分野）》

○カウンセリング論研究
宗教とカウンセリング援助技術　友久　久雄

○環境論研究
環境問題と人類の役割　北川　秀樹

○更生保護論研究　浜井　浩一
○社会実践演習Ⅰ
・社会実践について　田畑　正久
・生命倫理・倫理・宗教　早島　理
○社会実践演習
・実習に向けて　田畑　正久
・生老病死と終末期医療　早島　理
○社会実践演習
・修士論文及び報告書の作成　田畑　正久
・修士論文及び報告書の作成　早島　理
○社会実践実習
実習に向けての検討・討議　田畑　正久
○社会実践実習
学外実習の基礎　早島　理
○社会実践特殊研究
A真宗と倫理―西洋との比較の観点から考える　廣田デニス
B生老病死と終末期医療　早島　理
C浄土真宗を基調としたカウンセリングを考える　吾勝　常行
D日本人の宗教性と真宗の信仰　金児　曉嗣
E社会の諸問題と仏教の現代的意義　田中　教照
F現代社会に対応する寺院および僧職の実践活動　高橋　卓志
G福祉実践のための理論研究　長崎　陽子
○社会福祉論研究
社会福祉の現状理解と社会福祉論の検討　清水　教恵
○生涯学習論研究
寺院活動と生涯学習実践　持田　良和
○真宗人間論研究
真宗における人間論　深川　宣暢
○心理療法学研究
心理療法との接点　吉川　悟
○精神保健学研究
精神障がいとその予防および治療・援助　武田　俊信
○生命倫理論研究
生命倫理・倫理・宗教　早島　理
○地域活動論研究
地域の生活文化を地域活動に活かす　窪田　和美
○ビハーラ活動論研究
親鸞思想を基盤としたビハーラ活動　鍋島　直樹
○老年心理学研究
「老年期心性　友久　久雄
○諸課程科目　真宗教団活動論
布教使資格に関する諸講義　義本　弘導

文学部真宗学科

○教理史演習Ⅰ

・『高僧和讃』に学ぶ　井上　見淳
・浄土教理史の基礎的研究　高田　文英
○教義学演習Ⅰ
・『浄土文類聚鈔』を読む
―真宗の基本的枠組―　殿内　恒
・親鸞思想に基づく救済の探求　鍋島　直樹
○教学史演習Ⅰ
・蓮如の言葉　井上　善幸
・親鸞教義解釈史の研究
―『口伝鈔』の教学史的研究を中心に―　深川　宣暢
○伝道学演習Ⅰ
・伝道学の諸問題
―真宗伝道の理念と歴史と方法をめぐる課題探究―　龍溪　章雄
・現代人の苦悩に応える真宗のあり方　藤　能成
○教学史講読
A『口伝鈔』を読む。　佐々木覚爾
B『改邪鈔』を読む　岡崎　秀麿
○教学史特殊講義
A近代の真宗思想入門　岩田　真美
B覚如の教義理解の特色を学ぶ　能美　潤史
○教義学講読
A『教行信証』上、「教巻・行巻・信巻」　林　智康
B『教行信証』の後半、特に証巻を中心に講読する。
C『一念多念文意』を読む　普賢　保之
D尊号真像銘文講読　高田　文英
E唯信鈔文意を読む　龍口　恭子
○教義学特殊講義　武田　一真
A親鸞にみる人間像の探求　鍋島　直樹
B親鸞における善導教義の影響と展開　岡崎　秀麿
C異義から見えてくる親鸞教義　三浦　真証
○教理史講読
A『往生論註』を読む　原田　哲了
B『選択本願念仏集』を読む　藤丸　智雄
C『仏説無量寿経』講読　田中　無量
○教理史特殊講義
A『愚禿鈔』概論　佐々木義英
B東アジアの浄土教信仰の多様性　グランバック　リサ　アン
○真宗学概論
A真宗教義　内藤　知康
B真宗を学問として学ぶ　玉木　興慈
○真宗学基礎演習Ⅰ（真宗入門）
那須英勝、高田文英、井上見淳、武田晋、岩田真美
○真宗学基礎演習Ⅱ（正信念仏偈を学ぶ）
杉岡孝紀、長岡岳澄、高田文英、井上見淳、藤能成
○真宗教学史

（親鸞思想真宗教義）解釈史の批判的概説　龍溪　章雄
○真宗教団史　浄土真宗の歴史を学ぶ　溪　英俊
○真宗学講読A　『選択本願念仏集』を読む　藤丸　智雄
○真宗聖典学概論
・親鸞・覚如・存覚・蓮如の説き示した教え　貫名　譲
・著作の性格と表されたこと　原田　哲了
○真宗伝道学
浄土真宗は、現代人の苦悩と問いにどう応えるのか？　藤　能成
○浄土教概論
法然門下の浄土教を中心として　武田　晋
○浄土教理史
親鸞浄土教への道　林　智康
○浄土教聖典学概論
浄土教聖典の成立と展開　河智　義邦
○卒業論文（教学史演習II）
・覚如教学の研究　武田　晋
・真宗教学史の諸問題　内藤　知康
○卒業論文（教義学演習II）
・親鸞教義の普遍性と特殊性　那須　英勝
・『浄土和讃』に学ぶ　林　智康
○卒業論文（教理史演習II）
・真宗学の諸問題　杉岡　孝紀
・真宗学の諸問題　龍溪　章雄
○卒業論文（伝道学演習II）
・卒業論文執筆を通して、現代を考える　玉木　興慈
・現代における真宗伝道の課題と可能性　嵩　満也
・卒業論文研究（真宗伝道学の研究II）　深川　宣暢
○伝道学講読
A存覚『浄土真要鈔』を読む　北岑　大至
B「三帖和讃」を読む　金信　昌樹
C蓮如上人の『御文章』を読む　溪　英俊
○伝道学特殊講義
A現実社会の生老病死の四苦に直面する現場で仏教の救いはどう実現するか　田畑　正久
B仏教とカウンセリング　打本　未来
○比較思想論　「人間はどう生きるべきか？」　廣田デニス
○布教伝道論
I浄土真宗における布教伝道の理論と実際　貴島　信行
II浄土真宗における布教伝道の基礎と実践的側面からの考察　葛野　洋明

平成二十四年度　真宗学修士論文・卒業論文題目一覧

論文題目	姓名
大学院修士論文	
現生正定聚についての一考察	菊池　正信
小児往生について	東光真法香
「方便化身土分類」末の研究 ―経論の引用意図についての考察―	四茂野大樹
『唯信鈔文意』にみる親鸞の名号観 ―『唯信鈔』と比較して―	岩田　香
懐感浄土教の研究 ―善導浄土教と比較して―	榎屋　達也
真宗伝道の方法論的考察 ―国語科の授業法に関連して―	正親　智隆
浄土真宗における伝道とその展開	奥田　桂寛
横超断四流釈の利益の位置づけ ―現當二益を通しての見解―	小野　真世
真宗仏性義再考 ―親鸞の仏性観の独自性―	河邊　大文
法然から親鸞への展開 ―特に生因願を中心に―	芝田　法之
隆寛律師の浄土教思想	禿　了真
親鸞聖人の五念門観 ―法然門下との対比を中心として―	西村　慶哉
親鸞における往生	馬場　正光
親鸞の疑心観の研究 ―法然の疑心理解との比較を通して―	宮地　崇
実践真宗学修士論文	
真宗伝道の実践的研究 ―真宗における慈悲と伝道―	南條　了瑛
浄土真宗における自己と救い ―現代社会の「生きづらさ」を考える―	瓜生　智子
真宗寺院における高齢者介護についての一考察	荻野　龍裕
真宗と現代社会の死生観	清基　秀史
伝道における儀礼の意義 ―末信者の儀礼参加の考察―	小林　賢五
真宗僧侶が自死に関わる意義 ―遺族との関わりの視点より―	霜尾　吏澄
浄土真宗の公益性の研究 ―伝道拠点の変遷を中心として―	末武　寛行
現代伝道の可能性	竹林　景潤

―御文章の流れを受けて―　巽　一仁
真宗における社会福祉活動の一考察
―真宗の地域社会的実践について―　霍野　廣由
伝統的寺院活動の再考
―特に月忌の重要性に着目して―　長尾　光雲
寺院活動の可能性
真宗儀礼の研究　成澤　一行
―葬儀の現状を中心として―
地域コミュニティにおける寺院活動の研究　藤雄　好華
浄土真宗における青少年への伝道の可能性　藤田　圭子
―伝道のためのネットワーク構築の必要性について―
現代社会の宗教情勢における真宗伝道の研究　不二見慈朗
仏教儀礼の研究　藤本　弘信
―特に読経の意義をめぐって―
宗教者の社会実践活動の可能性　丸隈　説子
―人と人を繋ぐ　よりあいの場を求めて―
現代における葬儀の可能性　三ヶ本義唯
緩和ケアにおける浄土真宗の課題と可能性　宮本　祐慈
―スピリチュアルケアをてがかりに―
浄土真宗における聴聞の考察　森下　広大
現代社会における視覚伝道の可能性　山本　成美
―寺報・フリーペーパーを中心として―
鈴木大拙と浄土真宗　佐々木大介
―大拙における真宗とキリスト教―
浄土真宗の信心と伝道　髙松　典正
―稲垣瑞劍師に学ぶ―
仏教が担う看取りの文化と地域再生　中村　陽子

文学部真宗学科卒業論文

近代以降における「悪人正機」解釈について　朝枝　遊心
覚如の人間観　朝倉あすか
親鸞の神祇観　朝倉　顕昌
善導の三心釈をめぐる一考察　渥美　光
法然と親鸞の一考察　姉嵜　恵
現代人にとっての幸せと親鸞聖人の教え　阿部智加子
阿闍世と韋提希の救いと現代社会　天辰　祥平
現代人と真宗の一考察　天谷　恵
『阿弥陀経』が言いたいこと　安藤　慈美
真宗における『歎異抄』の意義　井尾　弘樹
親鸞の生死観　石田　慶子
―死の受容段階説を手がかりにして―
関東における親鸞の一考察　板敷　裕
親鸞における生死観　井筒　智隆
親鸞における「自然法爾」の展開　伊藤　淳史
仏教と医療の関係　伊藤　慎介
ビハーラ活動と親鸞思想　乾　多恵
―これからの寺院の在り方―
葬儀の現状と課題　犬飼　杏菜

現代社会における真宗伝道の課題　岩﨑　教大
戦時教学の諸問題　内山　桂志
真宗と社会福祉　裏野　将広
六字釈の考察　大熊　唯景
「他力本願」の誤用について　大森　一輝
ハンセン病差別と真宗　岡田　恒平
親鸞教義から見た自死問題についての一考察　岡田　空子
―日本社会を取り巻く自死問題とどう向き合うか―
法然聖人と親鸞聖人の悪人正機説　岡部　顕慈
親鸞の念仏観について　岡本　辰彦
悪人正機について現代の身近な事件を通して考える　荻野　翔太
真宗と自死　奥田　正弘
現代社会における浄土真宗の存在意義　織田　心海
真宗の伝道　小野　真司
―蓮如と現代―
自死への理解と親鸞の救いの理解　小宅　裕
親鸞思想の真実性　甲斐　知史
―科学と宗教のあり方を求めて―
蓮如上人の教学と現代について　梶井　弘人
親鸞の往生観　春日部秀慈
浄土真宗における慈善活動　加藤奈菜美
―九條武子と被災地支援―
日本仏教における地獄の思想　鎌田　一真
―親鸞聖人を中心に―

親鸞の教義を支える曇鸞の教理　神谷　征男
浄土真宗の救済観　川﨑　麻衣
―キリスト教と比較して―
犯罪からの社会復帰　河田　美緒
―親鸞の救済観に学ぶ―
『歎異抄』に学ぶ親鸞思想　神辺　淳
親鸞聖人の生死観についての一考察　木代　早紀
自死問題と真宗　木下　祥悟
現代の浄土真宗教義に生かされている蓮如上人の教学　桐原　俊哉
親鸞における浄土の意義　楠　芳之
現代社会と真宗　口羽　亜微
―子供たちにおける「いのち」の問題―
浄土真宗と現代社会の新しい関係　黒岡　寛大
浄土真宗における現代の一考察　小池　英貴
蓮如における伝道の特色の一考察　古孝　法祥
浄土真宗の社会的役割の一考察　酒井　海斗
―特に現代の問題を中心として―
浄土真宗における葬送観と愛別離苦への姿勢　佐々木　歩
真宗伝道の一考察　佐々木正哉
―国際伝道を通して―
親鸞の人間観　佐藤　陽
現代人と真宗の生死観についての一考察　佐藤　弘大
真宗の往生理解の特色と変遷　佐藤　思水

仏教民俗学からみた浄土真宗信仰　佐藤　美幸
真宗教義の受容とその背景　紫藤　好堅
仏教と現代文化の関わり　篠原そわか
現代社会と真宗の一考察　芝田　直哉
親鸞における現世利益観　柴山　尚也
浄土真宗における人間観の一考察　嶋崎　阿美
信心の一考察　釋　大智
法然と皇円の一考察　小岱　紫朗
親鸞思想における提婆達多と阿闍世の考察　白櫨　友子
真宗におけるターミナルケア　新庄　昭
蓮如における仏凡一体論の意義とその背景　淨謙　恵照
蓮如上人の伝道について　杉山　雲翔
現代における真宗伝道のあり方　角　証願
親鸞教義における「思議」の位置づけ　曾我　憲真
―獲得名号自然法爾章を中心に―
歎異抄から学ぶ親鸞思想の特徴　髙倉　信慈
現代における宗教の一考察　髙橋　里栄
―浄土真宗の視座から―
蓮如と真慧　多賀　善彦
―蓮如と真慧の様々な比較―
親鸞の浄土観　竹林　尚顕
法然と親鸞の比較研究　多ヶ江良俊
親鸞の死生観の現代的意義　田中　量
現代社会における日本人の宗教心　谷口　雄治
―特に浄土真宗について―　田畑　亮
真宗における死生観の考察　辻元　静羅
―キリスト教との対比を通して―
浄土真宗における信心の一考察　経谷　玲
現代の死と死者供養　津山　一平
―浄土真宗の観点から―
現代における真宗伝道の課題　霍野　廣大
浄土真宗の躍進にみられる蓮如の力　遠山　信証
浄土真宗の救いと現代社会　中澤　結華
親鸞の思想と現代社会　中重　克介
親鸞における信心の一考察　中田　基介
真宗における生死観　中村穂奈美
現代における生死の問題　長尾　叡
化身土巻についての一考察　長濵　千尋
親鸞と中村久子の人生観
―生きる支援を考える―
蓮如上人の生涯と教学の特色　西　淳章
蓮如教学における親鸞教学の再解釈　西河　輝
真宗における神祇観　西住　真海
親鸞聖人における死生観　西田　智
沖縄における浄土真宗の歴史　西原　舞華
真宗から見る自死問題　新田　拓也
浄土往生の理解について　橋本　秀円
浄土真宗と内観　畑　綾花

親鸞とキルケゴール
—苦と絶望の形而上学—　羽野　龍樹
親鸞の人間観
—悪人正機説を中心に—　曳田　温史
真宗と戦国武将　日高　理恵
日本浄土教と地獄について　福岡　浩崇
現代における真宗伝道
—その諸問題—　藤井紗都子
親鸞の人間観　藤井　智子
親鸞の生涯と人生観　藤井　裟保
他力信心の世界　藤田　真海
法然と親鸞の思想と伝道　藤田　拯水
公立学校における宗教教育の可能性　藤森　大貴
親鸞在世時の異義について　舩元　義男
現代社会と浄土真宗
—いのちの一考察—　堀田　和俊
二種法身論の研究　馬嶋阿舞莉
現代社会と浄土真宗　松井　優二
現代と浄土真宗
—現代における真宗の教えと慣習—　松尾麻依加
蓮如上人と大阪　松田英利子
仏教における結婚観　丸谷　麻緒
真宗の教えと生活　三木　朋子
真宗信心についての教理史的一考察　三島　晃真
親鸞・蓮如と教育　三島　裕来
大谷光瑞と大谷探検隊　水内　大悟
蓮如の六字釈について　水野　卓
浄土真宗における小児往生についての一考察　光應　智詔
五逆・謗法・一闡提について　水戸　信晃
海外における真宗伝道　水口　美紀
親鸞の往生観　南　真理
倫理基盤としての仏教
—環境倫理と恩思想—　源　一道
組織としての「浄土真宗」の考察
—親鸞上人と蓮如上人から学ぶ組織マネージメント—　村井　拓磨
浄土真宗における「いのち」の問題　森川　大
親鸞の人間観
—煩悩を中心に—　森山　直樹
現代社会と真宗　山本　知佳
顕如上人の一考察
—石山戦争と浄土真宗—　吉井　法樹
親鸞と一遍　吉川　祐樹
本願寺の歴史と教学について　吉見　知代
浄土真宗における悪人の救済　和田　省吾
覚如の『口伝鈔』について　和田　紘樹
親鸞の大乗菩薩道精神　古和田百合子
真宗と女人往生　牧野　新一
真宗と科学の関係　入江　楽

浄土真宗の救い
—親鸞の現生正定聚とは—　春日　眞人
浄土真宗における宗教教育について　加藤真由子
真宗の教えは本当に人の心を豊かに出来るのか　小泉　智彦
ビハーラ活動について　下野　敏之
親鸞思想における死と大悲　西脇　大成
—ビハーラ活動を中心に—
海外開教に求められるもの　藤田　裕豪
—開教使の人間像を中心に—
主体的仏道としての浄土真宗　藤實　乗教
ビハーラのこれまでとこれから　南出　朱里
現代社会における苦悩　壬生　泰文
—浄土真宗はいかに対応するのか—
親鸞の往生思想について　大原　洸融
法然聖人と親鸞聖人の信心と念仏の比較　岡野　悠樹
薩摩の真宗禁制についての一考察　岡野　悠一
善鸞義絶について　河本　麻由
仏教と生命倫理　熊倉　大希
真宗における女人往生について　斉藤万里絵
親鸞聖人における救済思想　作田　尚恵
真慧上人の念佛観　塩崎　脩平
大町如導の研究　平　仁
—越前真宗史の一断面—
「他力本願」について　髙城　了悟
真宗における現代社会の一考察　田中　基裕
真宗と医療　徳留真由美
—穏やかな死を迎えるために—
四諦・八正道と真宗カウンセリング　中谷　太
真宗教義とキリスト教　西　唯顕
—ルターとの比較を中心として—
親鸞における人間観　長谷川向真
現代資本主義社会と親鸞の教え　伴　建太朗
真宗用語からみる親鸞思想　藤野　幸真
仏教と自死　藤本　将英
顕如上人と石山戦争　堀内　康平
死後観についての一考察　村上　順之
真宗学と現代社会の一考察　山下　和樹
真宗寺院の現状と課題　大塚　真慈
三業惑乱について　田原　清泉
浄土教理史における他力思想の展開　武田　崇
親鸞聖人と蓮如上人　仁木　雅代
—浄土真宗の魅力の原点を探る—

真宗学会消息

平成二十五年度　真宗学会理事会・運営協議会

第一回龍谷大学真宗学会運営協議会

平成二十五年五月二十八日(火)　十六時四十五分より

西黌二階大会議室にて

一、学会長挨拶　内藤　知康先生

一、議長団選出

議　長　長宗　博之（博士二回）

副議長　武末　直也（博士三回）

副議長　榎屋　達也（博士一回）

書　紀　岩田　光　（学部四回）

書　紀　寺本　志織（学部四回）

一、自己紹介

一、役員の変更について（高田文英先生）

一、平成二十四年度決算（高田文英先生）

一、平成二十五年度予算（高田文英先生）

一、各委員会活動予定について

（一）庶務委員会（神崎修生）

・学会費の徴収・管理・運営について

（二）研究委員会（遠山信証）

・真宗学会研究発表会について

・卒業論文中間発表について

・第六十七回真宗学会大会について

（三）親睦委員会（松谷慧光）

・学会研修の予定について

（四）編集委員会（嵩　宣也）

・『真宗学科学生論文集』に関して

・『真宗学一二九・真宗学一三〇』発行について

（五）ホームページ委員会（西村慶哉）

・真宗学会ホームページについて

一、その他

理事会

平成二十五年十一月五日(火)　十二時十五分より

清和館三階ホールにて

一、平成二十四年度決算（高田文英先生）

一、平成二十五年度予算（高田文英先生）

一、役員の変更について（高田文英先生）

・理事の退任

林　智康氏　龍谷大学

内藤　知康氏　龍谷大学

デニス廣田氏　龍谷大学

・評議員の退任

玉木　興慈氏　龍谷大学

・理事の就任

玉木　興慈氏　龍谷大学

一、真宗学会長の交代
　・内藤　知康先生→川添　泰信先生
一、来年度の学会大会について
一、その他

以上の議案が、真宗学会運営協議会並びに評議会における審議にて議決されました。また、平成二十五度真宗学会年間行事に関する詳細な報告は各委員長に譲りますが、いずれも滞りなく開催されましたことを併せてご報告いたします。今年度、ご協力を賜りました諸先生方、及び各ゼミ委員の皆様に厚く御礼申し上げます。　（報告　運営協議会議長　長宗　博之）

庶務委員会報告

平成二十五年度
・四月　新入生への入会案内
　会計の引継ぎ
・五月　新入会員の名簿作成・その他会員の名簿整理
　予算案の作成と決算報告の確認
・六月　学会費納入依頼状の作成と発送（併せて真宗学会大会の日程をお知らせ）
　学生会員への会費納入の督促
・十月　真宗学会大会案内状の発送
　今年度の学会費納入状況の整理
・十一月　真宗学会大会における学会費の納入受付ならびに記念写真申込み受付
　学生会員への会費納入の督促（卒業予定者へ）
・一月　卒業式・学位授与式にて会費納入督促ならびに一般会員としての入会案内
・三月　会計を締めて決算報告を作成

真宗学会費・会計について、何かご不明な点・お気付きの点などがございましたらご連絡ください。（報告　神崎　修生）

研究委員会報告

◇第一回真宗学科卒業論文説明会
期日　平成二十五年六月六日(木)
会場　龍谷大学大宮学舎　清和館三階大ホール
卒業論文説明　那須　英勝（龍谷大学教授）
体験談　遠山　信証（大学院・M1）
　三島　晃真（大学院・M1）

◇真宗学会研究発表会
期日　平成二十五年七月十一日(木)
会場　龍谷大学大宮学舎　東黌一〇四教室
発表者および発表題目
①西本願寺本『教行信証』における註記の特徴について
　―坂東本との比較から―
　冨島　信海（博士後期課程3回生）
②親鸞の年代における表現変遷の理由

③島地大等の神道観　玉木　興隆（博士後期課程2回生）

④親鸞における諸行廃捨の構造
―「廃立」の語を用いない理由について―　川元　惠史（博士後期課程3回生）

⑤親鸞における宿業観の一考察　四夷　法顕（博士後期課程3回生）

⑥『見聞集』に関する一考察
―『般舟讃』抄出文について―　長宗　博之（博士後期課程2回生）

⑦ハワイ真宗念仏者マツダ・ハルの機の立場　西河　唯（博士後期課程2回生）

◇真宗学科卒業論文中間発表会

期日　平成二十五年十月二十四日(木)

会場　龍谷大学大宮学舎　清和館三階大ホール

発表者および発表題目

①荒川　季紗　浄土真宗の観点から見る自死問題

②安藤　千珠　中村久子と浄土真宗

③鎌倉　義雄　真宗における人間の問題

④小夏　裕顕　少子高齢化社会における浄土真宗
―現代の寺院と僧侶の在り方―

⑤杉本　優樹　「行巻」における大行の研究

⑥瀧　唯香　苗木藩による廃仏毀釈

⑦寺本　志織　現代と浄土真宗
―人間にとって宗教とは―

⑧吉井　直道　曇鸞と道教

⑨村松　直紀　真俗二諦の研究

⑩田中　好三　『唯信鈔』について

◇龍谷大学真宗学会第六十七回大会

期日　平成二十五年十一月五日(火)

会場　龍谷大学大宮学舎　清和館三階大ホール

日程

一、研究発表　清和館三階大ホール

①研究発表唱導家としての聖覚像について　西河　唯（大学院・D2）

②ヨーロッパにおける浄土真宗の伝道
―特に『歎異抄』を用いた伝道について―　禿　定心（大学院・D3）

③島地大等と時代思潮　川元　惠史（大学院・D3）

④親鸞の一乗思想における叡山教学の受容
―源信『一乗要決』との関連を中心に―　四夷　法顕（大学院・D3）

⑤親鸞における自力に関して　杉田　了（大学院・D3）

⑥善導における韋提希得忍について　岡崎　秀麿（龍谷大学講師）
⑦存覚『女人往生聞書』の成立
―所引経論の検討―　龍口　恭子（龍谷大学講師）
⑧「如来とひとし」という表現をめぐって
井上　善幸（龍谷大学准教授）

二、評議員・理事会　清和館三階大ホール
三、記念講演　清和館三階大ホール
「親鸞聖人の漢字音に見られる諸相」
講師　広島大学教授　佐々木　勇　氏
四、記念撮影　大宮学舎本館前
五、総会　清和館三階大ホール
①学会長挨拶
②六角仏教会奨学金の伝達式
③議長選出
④総会

◇第二回卒業論文説明会
期日　平成二十五年十二月三日(火)
会場　龍谷大学大宮学舎　東黌一〇一教室
卒業論文の説明　那須　英勝（龍谷大学教授）
体験談　板敷　慧（大学院・M1）
入江　楽（大学院・M1）

以上が、本年度の研究委員の活動となります。皆様の御協力により、本年度も全日程を成功の内に終えさせていただきました。この場を借りて、感謝の言葉を述べさせていただきます。

今後も反省点を改善し、またこれまでのいい面を残しつつ、より充実した運営の実現に努めてまいります。どうぞ宜しくお願いいたします。

（報告　遠山　信証）

親睦委員会報告

平成二十五年度
東北被災地現地視察と真宗ゆかりの寺院参拝

【日程】
九月九日(月)
仙台空港→（昼食）→専能寺→仙台別院→宿泊地（鳴子温泉）
九月十日(火)
宿泊地（鳴子温泉）→中尊寺・金色堂・（昼食）→願教寺→本誓寺→宿泊地（渡り温泉）
九月十一日(水)
宿泊地（渡り温泉）→宮沢賢治記念館→松島（昼食）・五大堂・瑞巌寺→仙台空港→JR仙台駅

〈九月九日〉
仙台空港一階ロビーに十一時四十分集合。残念ながら当日キャンセルとなった二名を除く、計十八名の参加となった。今回の旅行でお世話になる添乗員の方やガイドの方と合流し、バスに乗り込む。移動の車中では学会長の内藤先生よりご挨拶をいただいた。バスが高速に乗ったあたりで、ガイドの方から東日

本大震災についてのお話があった。この高さ八メートルに及ぶ高速・仙台東部道路に登れるかどうかが明暗を分けたほど、この名取市閑上地区が甚大な津波被害を受けたという。十二時二十分には昼食会場に到着し、仙台名物の笹かまぼこを頂いた。食後には、隣接するミュージアムにて「仙台七夕まつり」に使われた竹飾りを見学。その大きさに圧倒されつつも、会場を後にする。バスに揺られてほどなく、最初の拝観場所である専能寺に到着。林先生を調声として讃仏偈をお勤めした後、ご住職の方から震災体験について以下のようなお話を頂戴した。地震直後は真っ先に避難したため、テレビで放送されたような津波は見ていなかった。被害は時を経るごとに明らかになり、遺体安置所に運ばれる遺体は日増しに増えていった。百人、二百人単位で並んでいる遺体の元で枕経を上げる。宗派の垣根なしに、後ろで遺族の方々が手を合わせる。また、連絡が入るたびに葬儀会館や火葬場を奔走する。そのような日々が約一ヶ月続いたそうだ。専能寺本堂への被害も甚大で、畳も全て流され、堂内は泥と瓦礫まみれだった。復興へのきっかけとなったのは、北海道教区にいた友人の「俺らが何とかする」という言葉だった。交通機関が麻痺していたにもかかわらず、京都の若林仏具製作所の方々、そして北海道教区の方々が駆けつけ、本堂の修復作業にあたった。三月二十八日から始まったこの作業は、ボランティアやご門徒の方々の協力もあり、四月十三日に常例法座を本堂にて行えるまでの成果を収めた。百か日の六月十九日には、合同葬儀も催された。しかし、百日たった当時でも行方不明者の家族の方々には、心の整理がつかず、参列できない方もいた。現在でも七十五名中五名の方は遺体が発見されていない。お墓ごと再度津波に流されるかもしれないとの理由で納骨できない方々もいる。そのような方々が前を向くことができるようになるまで、専能寺は津波で泥をかぶった阿弥陀仏をご本尊とし、何年かかっても共に歩む姿勢でありたい。このようなお話の後、会館にてお茶を頂きながら、復興までの道のりを描いたビデオを鑑賞した。また、境内も拝見し、専能寺を後にした。次に、仙台別院を訪問した。まず、林先生を調声として重誓偈をお勤めした。その後、輪番の方から仙台別院のボランティアや東北教区についてのお話をいただいた。ここ仙台別院では、二年前の三月十七日より、併設されている幼稚園をボランティアセンターとし、被災地支援活動の拠点としている。現在までの活動者は二万人を超えており、鍋島先生も今回が震災後十六回目の訪問となるという。活動内容としては、震災後一ヵ月は主に物資支援をしていたが、その後は避難所でのお茶会運動（被災者の話を聞き、コミュニティづくりに協力する運動）や避難所に出て来られない方への居室訪問を中心としている。七月二十日には陸前高田市にも拠点を構え、このような活動に力を入れている。また、東北教区の寺院については、福島原発周辺で長く立ち入り禁止となっていたところも存在しており、被災地の復興はまだまだ道半ばだという。お話の後は、ボランティアセンターを見学した。この日は武蔵野大学の方々が活動していた。何冊にもわたるノートには、ボランティアに関する引き継ぎ事

項や感想が書かれており、被災地を通した人々の絆を感じることができた。仙台別院を後にし、バスで移動。途中、道の駅でのトイレ休憩をはさみつつ、宿泊地である鳴子温泉に到着する。まずは温泉に入り、一日の疲れを癒した。浴衣に着替え、夕食は内藤先生の乾杯の音頭のもと、大宴会となった。宴会では、各先生方のご挨拶や学生の自己紹介の時間を設け、互いに親睦を深めた。また、プロのマジシャンのマジックショーや学生によるブレイクダンスなどもあり大いに盛り上がった。宴会後も、その勢いのまま二次会が催され、夜遅くまでお酒の席は続いた。

〈九月十日〉

朝七時起床。朝食をすませ、鳴子温泉を後にする。道中に位置する鳴子峡は紅葉の名所だそうだ。十時三十分に中尊寺に到着し、専門ガイドの方の案内の下、拝観する。世界遺産というだけあって、観光客が多かった。金色堂は天治元年（一一二四）奥州藤原氏の祖である藤原清衡の発願によって建立された。阿弥陀堂は、単層宝玉造りで木瓦葺きであり、内外四壁金箔が押されている。堂内には、三基の須弥壇を構え、それぞれ阿弥陀如来を本尊とし、観音・勢至の二菩薩、六体の地蔵尊、持国・増長の二天を安置している。また、壇の中には藤原氏父子四代のご遺体が納められているそうだ。金色堂の他には、経蔵や旧覆堂などを拝観した。中尊寺参拝の後、那須先生と鍋島先生がお仕事の都合により帰洛された。昼食を済ませ、次の目的地の願教寺へと向かった。願教寺に到着すると、はじめに、ご住職の方を調声として讃仏偈をお勤めした。その後、ご住職の方よりお話をいただいた。願教寺は、是信房の末裔の浄信房が開基とされる。当初は川上に建立していたため、災害も多く、本堂建立のために南部藩藩主から土地の提供を受けた。明治二十五年には、山口県周防郡和田村出身の島地黙雷和上が、盛岡願教寺の住職となる。また、黙雷和上は明治三八年には東北開教総監の命を受け、教化・伝道にあたった。夏期仏教講座では、明治四十一年以降、県外から聴聞に来られるほどに盛況であった。また、黙雷和上は、女子文芸学舎の他、様々な大学の創立に関わっているとされる。続いて、島地大等和上についてであるが、明治三五年には願教寺に入ったとされる。東京の高輪仏教大学における大等和上の講義は、他大学、他学科の教授も聴講に来るほど盛況であったという。夏期仏教講座には、東京から数多くの教授方が駆けつけ、また、宮沢賢治も参加していたとされている。ご住職の方のお話を聞いた後、大広間にてお茶を頂き、境内をご案内して頂いた。親鸞聖人行脚像や、黙雷・大等和上のお墓、九條武子女史お手植えの楓など、歴史を感じさせる素晴らしい境内であった。庭園の景観も美しく、盛岡市より「都市景観緑賞」を受賞したという。山門前で記念撮影をした後、願教寺を後にした。またバスに戻る際に、ご厚意でお酒も頂戴した。願教寺を出発すること数分で本誓寺に到着した。本誓寺の開基は、二十四輩の第十番目に数えられる是信である。是信の俗名は吉田信朗といい、藤原氏一門の公家であったとされるが、讒言にあい越前に流罪となった。赦免された後、稲田の草庵で親鸞聖人と出会い、帰依して法名を是信とした。その

後是信は奥州教化に力を入れ、紫波郡紫波町彦部石ヶ森に本誓寺を建立した。現在の盛岡に移転したのは、第十六世賢勝のときであるとされる。本誓寺では、はじめに、藤先生を調声として重誓偈をお勤めした。その後、関係者の方のご案内により、内陣や境内を拝観した。また、本堂前では参加者の皆さんと記念撮影をした。本誓寺を後にすると、宿泊地である渡り温泉へと向かった。途中、盛岡駅で内藤先生がお仕事の都合によりバスを降りられた。

花巻市にある渡り温泉に到着すると、まずは温泉にて本日の疲れを癒した。渡り温泉には本館と別館の二箇所ともに温泉があるそうだ。今回入浴したのは別館の方だったが、露天からの景色は絶景だった。夕食では、林先生に乾杯の音頭を取っていただき、願教寺さんから頂いたお酒を参加者で飲んだ。食事中に、一人一人に旅の感想を述べてもらった。夕食後は、売店でお酒を購入し、部屋に移動して二次会が行われた。参加者のご当地話など、様々な話題に花が咲いた。宴が終わるころには、頂戴したお酒が二升とも空となっていた。

〈九月十一日〉

朝七時に起床。バイキング形式の朝食を済ませ、八時半に宿を後にする。花巻市の坂道を登っていくと、宮沢賢治記念館に到着した。記念館は、時代・信仰・科学・芸術・農村・総合などの部門に分かれた展示からなっており、様々な顔を持つ宮沢賢治に触れることができた。中でも、「銀河鉄道の夜」の草稿原稿や「雨ニモマケズ」の手帳などが展示されており、作家・芸術家としての宮沢賢治にまつわる貴重な資料を見ることができた。宮沢賢治記念館を後にし、数時間の移動を経て、松島に到着した。まずは土産物屋の二階の食堂で昼食を頂く。食後は、専門ガイドの方の案内の元、五大堂・瑞巌寺の順に拝観した。松島は覚如上人・蓮如上人訪問の地と伝えられており、五大堂参道にある覚祖高蹤碑には「真宗法要」などといった文字を読み取ることができた。参道の端は「すかし橋」といって、橋をつなぐ板と板の間に隙間がある。これは参詣の際に、身も心も乱れないよう、足元をよく照顧して気を引き締めさせるための配慮ではないかとされている。五大堂は、平安時代初期の八〇七年、坂上田村麻呂がこの島に毘沙門堂を建てたことが起源とされる。八二八年、慈覚大師が瑞巌寺の前身、松島寺を建てて、ここに五大明王を祀ったことから、五大堂と呼ぶようになったという。五大堂参詣の後は、瑞巌寺へと向かった。瑞巌寺は十三世紀中ごろに臨済宗の青竜山円福寺になったと伝えられている。慶長十年（一六〇五）、伊達政宗は、円福寺の再建に着手して、四年の歳月をかけて大伽藍を完成させた。本堂・庫裏・回廊は、国宝に指定されている。残念ながら本堂は修理中のため入ることができなかったが、庫裏には入ることができ、聖観世音菩薩や、開山像、殿位稗などの展示物を見ることができた。瑞巌寺を後にすると、解散場所である仙台空港へと向かった。車中では、林先生より旅行を総括するお言葉を頂き、続いて添乗員やバスガイドの方々から別れの挨拶を頂いた。仙台空港において飛行機で帰る参加者の方々とお別れし、希望者はＪＲ仙

台駅まで行き解散となった。

この三日間は天候にも恵まれ、大きなトラブルもなく、無事に旅行を終えることができた。震災後数年が経った被災地の現状を、現地の方々から聞くことができたのはこの旅行を通して何よりも貴重な体験だったように思う。

最後に、この学会旅行に参加していただいた岩田先生、内藤先生、那須先生、鍋島先生、林先生、藤先生、堀先生（五十音順）、大学院・学部生のみなさん、そして旅行先でお世話になった全ての方々に感謝の意を表したいと思います。また親睦委員の飯田さん、織田さん、曽我さんの広報のおかげで多くの人数を募ることが出来たこと、重ねて御礼申し上げます。来年度以降もこの真宗学会旅行に沢山の方々が参加されることを願っております。皆様のおかげで、大変有意義な研修旅行となりました。本当にありがとうございました。（報告　松谷　慧光）

編集委員会報告

平成二十五年度

・四月十二日　真宗学資料室・整理、『真宗学』の残部集計
・四月三十日　『真宗学科学生論集』原稿校正
・五月十六日　第一回編集委員会議
・五月三十日　『真宗学』第一二七・一二八号配布開始
・七月六日　『真宗学科学生論集』配布開始（ＰＤＦ）
・十一月五日　第六十六回真宗学会大会記念講演収録
・十一月二十日　真宗学資料室・整理、『真宗学』の棚整理
・二月上旬　『真宗学』第一二九・一三〇合併号、永田文昌堂へ原稿提出開始
・二月上旬　『真宗学』第一三一号　原稿執筆依頼
・二月上旬　『真宗学科学生論集』論文提出依頼
・三月下旬　『真宗学』第一二九・一三〇合併号、納入（予定）

平成二十五年度の編集委員会は、例年の活動（『真宗学』・『真宗学科学生論集』の刊行）に加え、『真宗学』の寄贈・販売にも精力的に取り組みました。今年も昨年に引き続き、海外への寄贈を積極的に行い、海外の大学や研究機関との交流を持つことに努めました。また、新しい取り組みとしてホームページ委員に『真宗学科学生論集』をＰＤＦ化し、ホームページ上に掲載して頂きました。さらに、インターネットの真宗学会のホームページには『真宗学』の広告を掲載させていただき、それによって、多数のお問い合わせを頂くことができました。これも、インターネット販売に大きくご尽力くださいました諸先生方、並びにホームページ委員、庶務委員の皆様のお蔭であります。

なお、各誌の執筆・配布等につきましては、諸先生方、大学院生の方々のご協力をいただきました。重ねて、厚く御礼申し上げます。（報告　嵩　宣也）

ホームページ委員会報告

平成二十五年度

四月

・平成二十五年度行事カレンダー更新

五月

・教員紹介更新

・真宗学科学生論文を掲載

六月

・第六十七回真宗学会大会研究発表申込要領を掲載

七月

・卒業論文評価基準・卒業論文提出チェックシート・卒業論文作成マニュアルを平成二十五年度版に更新

・入門ガイドを平成二十五年度版に更新

十月

・「雑誌『真宗学』バックナンバー」の残部数を更新

・平成二十五年度真宗学会研修の報告を掲載

・第六十七回真宗学会大会の告知

十一月

・第六十七回真宗学会大会の報告を掲載

（報告　西村　慶哉）

龍谷大学真宗学会会計報告

a．平成24年度決算　　（単位：円）

収　入　の　部			
	決　算	予　算	差　額
① 平成23年度繰越金	3,428,672	3,428,672	0
② 学会費	4,777,000	6,324,000	−1,547,000
〔内訳〕			
・個人会員Ａ（正会員）			
一般会員			
5,000×301＝1,505,000			
ＬＭ１回生			
10,000×11＝110,000			
ＬＭ２回生			
10,000× 5 ＝50,000			
ＬＭ３回生以上			
5,000× 6 ＝30,000			
ＬＤ１回生			
15,000× 3 ＝45,000			
ＬＤ２回生以上			
15,000× 2 ＝30,000			
ＰＭ１回生			
15,000×24＝360,000			
ＰＭ２回生以上			
15,000×17＝255,000			
・個人会員Ｂ（学生会員）			
Ｌ１回生			
16,000×110＝1,760,000			
Ｌ２回生以上			
16,000×33＝528,000			
Ｌ５回生以上			
4,000× 2 ＝8,000			
Ｌ３・Ｌ４回生(編転入)			
8,000×12＝96,000			
③ 学会誌販売・寄付等	132,000	20,000	112,000
④ 龍谷学会出版助成金	300,000	300,000	0
⑤ 利息	387	328	59
計	8,638,059	10,073,000	−1,434,941

（単位：円）

支　出　の　部			
	決　算	予　算	差　額
① 編集委員会	3,347,320	3,775,000	−427,680
・真宗学（125,126編集,発送費） 1,115,320			
・真宗学（127,128編集,発送費） 1,446,410			
・真宗学編集費 5,630			
・真宗学科学生論集 749,960			
・学会講演編集費 30,000			
② 研究委員会	342,787	380,000	−37,213
・大会運営費 253,965			
1．講師謝礼（100,000）			
2．事務諸経費（53,965）			
3．アルバイト代（100,000）			
・深草例会費 30,000			
・卒論指導関連経費 9,582			
・大会案内状印刷・発送費 49,240			
③ 親睦委員会	600,362	710,000	−109,638
・教育補助・懇親費（大学院） 282,000			
・学会研修補助費 318,362			
④ 庶務委員会	376,343	470,000	−93,657
・通信事務費 22,009			
・納入依頼関係 39,752			
・アルバイト代 60,000			
・合同研究室運営費 42,717			
・インターネット管理費 211,865			
⑤ 反省会費	100,000	100,000	0
⑥ 予備費	0	200,000	−200,000
⑦ 次年度繰越金	3,871,247	4,438,000	−566,753
計	8,638,059	10,073,000	−1,434,941

b．学会事業基金決算　　（単位：円）

収　入　の　部		
①	平成23年度繰越金	3,226,575
②	利息	680
	計	3,227,255

以上の平成24年度決算報告について，相違ありません。

平成25年５月10日　　庶　　務　内藤　知康　高田　文英
梨本　雄哉

以上の平成24年度決算報告について，監査の結果，相違ありません。

平成25年５月15日　　会計監査　緒方　義英
佐々木隆晃

以上の平成24年度決算報告について、平成25年度第１回学内評議員・理事会及び運営協議会において承認されました。

平成25年６月１日　　学会長　内藤　知康
議　長　長宗　博之

a．平成25年度予算案　　（単位：円）

収　入　の　部			
	25年度予算	24年度予算	差　額
① 平成24年度繰越金	3,871,247	3,428,672	442,575
② 学会費	6,057,000	6,324,000	−267,000
〔内訳〕			
・個人会員Ａ（正会員）			
一般会員			
5,000×270＝1,350,000			
ＬＭ１回生			
10,000×17＝170,000			
ＬＭ２回生以上			
10,000× 7 ＝70,000			
ＬＤ１回生			
15,000× 6 ＝90,000			
ＬＤ２回生以上			
15,000× 5 ＝75,000			
ＰＭ１回生			
15,000×20＝300,000			
ＰＭ２回生以上			
15,000×14＝210,000			
・個人会員Ｂ（学生会員）			
Ｌ１回生			
16,000×146＝2,336,000			
Ｌ２回生以上			
16,000×85＝1,360,000			
編転入Ｌ３回生以上			
8,000×12＝96,000			
③ 学会誌販売・寄付等	40,000	20,000	20,000
④ 龍谷学会出版助成金	0	300,000	−300,000
⑤ 利息	753	328	425
計	9,969,000	10,073,000	−104,000

（単位：円）

支　出　の　部			
	25年度予算	24年度予算	差　額
① 編集委員会	2,645,000	3,775,000	−1,130,000
・真宗学（129,130合併号編集,発送費）　2,600,000			
・真宗学編集費　15,000			
・学会講演編集費　30,000			
② 研究委員会	380,000	380,000	0
・大会運営費　280,000			
1．講師謝礼（100,000）			
2．事務諸経費（80,000）			
3．アルバイト代（100,000）			
・深草例会費　30,000			
・卒論指導関連経費　10,000			
・大会案内状印刷・発送費　60,000			
③ 親睦委員会	550,000	710,000	−160,000
・教育補助費（大学院）　270,000			
・学会研修補助費　280,000			
④ 庶務委員会	440,000	470,000	−30,000
・通信事務費　20,000			
・納入依頼関係　60,000			
・アルバイト代　60,000			
・合同研究室運営費　50,000			
・インターネット管理費　250,000			
⑤ 反省会費	100,000	100,000	0
⑥ 予備費	200,000	200,000	0
⑦ 次年度繰越金	5,654,000	4,438,000	1,216,000
計	9,969,000	10,073,000	−104,000

龍谷大学真宗学会会則

第一条（名称及び事務所）　本会は龍谷大学真宗学会（Research Association of Shin Buddhism）と称し、事務所を龍谷大学真宗学研究室におく。

第二条（目的）　本会は真宗学の研究教育の発展及び会員相互の親睦をはかるをもって目的とする。

第三条（事業）　本会は前条の目的を達成するために下の事業を行う。

一、学術大会

二、機関誌「真宗学」（Journal of Studies in Shin Buddhism）の発行

三、その他必要な事業

第四条（会員）　本会は下記の会員で組織する。

一、名誉会員　本会に功績のあった人の中から、理事会がこれを推薦し、総会で承認する。

二、個人会員A（普通会員）　龍谷大学真宗学担当の専任教員、文学研究科真宗学専攻並びに実践真宗学研究科実践真宗学専攻在籍の大学院生、及び本会の主旨に賛同するもの。

三、個人会員B（学生会員）　龍谷大学文学部の真宗学専攻の学生。

四、個人会員C（団体会員）　真宗研究を主目的とする大学、短期大学及びそれに準ずる学校、学術団体並びに本会の主旨に賛同する団体。

すべての会員は第三条に定める事業に参加し、本会の刊行物の配布を受けることができる。また、普通会員のうち大学院修士課程修了以上の学歴、もしくは同等の学識を有する研究者は、学術大会及び機関誌においてその研究を発表することができる。なお、研究発表・論文投稿に関しては、別にこれを定める。

第五条（役員）　本会には下記の役員をおく。

一、会長	一名	理事の中から互選し、本会を代表して会務を統理する
二、副会長	一名	理事の中から会長が指命する。副会長は会長不在の時、会長の職務を代行する。
三、理事	若干名	評議員の中から互選する。理事は理事会を組織し、会務を処理する。
四、評議員	若干名	会員の中から、総会において選出する。評議員会は評議員会を組織し、特に重要な会務を審議する。
五、監査委員	二名	会長が理事、評議員の中から委嘱し、会計の監査を行う。
六、編集委員	若干名	会長が理事、評議員の中から委嘱し、機関誌「真宗学」の編集を行う。

第六条（顧問・参与）　役員の任期は、二ケ年とする。但し重任を妨げたい。本会に顧問及び参与をおくことができる。

第七条（運営）　本会の事務的な運営のために、運営協議会を設ける。運営協議会の規定は別に定める。

第八条（総会）　会員の三分の一以上の要望及び理事会の召集により総会を開催することができる。審議決定は出席者の過半数以上の承認を要する。

第九条（経費）　本会の経費は会費及び寄付金、その他の収入による。

第十条（会費）　会員は本会維持のため個人会員Aは年額五千円その他は年額四千円の会費を納めるものとする。〈但し一九九九年（平成十一年）度より〉

第十一条（会則変更）　本会則の変更は、評議員の議を

経たのち、総会の決議を得なければならない。

第十二条（年度）　本会の年度は毎年四月一日に始まり、翌三月三十一日に終わる。

附則①　本会則は一九八八年（昭和六十三年）十一月二十二日の大会において改正承認されたものである。

②　会費の改定は一九八九年（平成元年）十一月二十一日の大会において改正承認されたものである。

③　本会則は二〇〇八年（平成二十年）十一月十一日の大会において改正承認され、二〇〇九年（平成二十一年）四月一日から施行される。ただし、第五条（役員）二項の副会長については、二〇〇八年（平成二十年）十一月十一日の大会終了をもって適用される。

龍谷大学真宗学会運営協議会規定

第一条　（名称）本会は龍谷大学真宗学会運営協議会と称する。

第二条　（目的）本会は龍谷大学真宗学会々則に基づき学会の運営に関する諸事項を審議・決定し、実務を担当する。

第三条　（構成員）本会の構成員は下記の通りとする。

(イ)　真宗学担当の専任教員

(ロ)　文学研究科真宗学専攻・実践真宗学研究科実践真宗学専攻の各演習より選出された幹事

(ハ)　文学部真宗学科の各演習より選出された幹事

(ニ)　議長より選出された幹事

第四条　（組織）

第一項　本会には審議・決定機関としての協議会と執行機関としての委員会を設ける。

第二項　協議会は原則として、前条の全構成員によって組織する。但し必要に応じて左のごとき分科協議会を設けることができる。

(イ)　大学院協議会

(ロ)　学部協議会

第三項　分科協議会の決定は協議会の承認を得なければ執行することができない。

第四項　委員会は研究・親睦・編集・庶務の四部門とし、それぞれ専任教員・大学院幹事・学部幹事各一名以上をもって組織する。

第五項　各委員会の委員長は大学院幹事より議長が下記の通り任命する。

(イ)　研究委員長　一名

(ロ)　親睦委員長　一名

(ハ)　編集委員長　一名

(ニ)　庶務委員長　一名

第五条　（委員会の業務内容）

(イ)　研究委員会……大会・例会等主として研究に関する事項

(ロ)　親睦委員会……旅行、歓送迎会等主として親睦に関する事項

(ハ)　編集委員会……学会誌の編集等主として編集に関する事項

(ニ)　庶務委員会……会計及び庶務全般に関する事項

第六条　（議長・副議長・書記）

第一項　協議会の議長一名・副議長二名以内は幹事の互選とする。

第二項　協議会の書記三名以内は議長より任命される。

第七条　（経費）本会の経費は真宗学会が負担する。

第八条　（年度）本会の年度は真宗学会の年度に準ずる。

第九条　（規定の変更）本規定は協議会が発議し、真宗学会大会の決議により変更することができる。

付　則

①　本規定は一九九二年（平成四年）十一月二十四日の大会において改正承認されたものである。

②　本規定は二〇〇八年（平成二十年）十一月十一日の大会において改正承認され、二〇〇九年（平成二十一年）四月一日から施行される。

仏教関係図書
割引購入券
＝龍谷大学
真宗学会会
員用＝
（永田文昌堂のみ有効）

編集後記

『真宗学』第一二九・一三〇合併号をお届けします。この合併号は、本年三月にそろって定年でご退職をお迎えする林智康先生、内藤知康先生、廣田デニス先生に対し、これまでのご教導への感謝の意を表するとともに、その学恩に報いるために企画された記念の一本です。諸先生にはご多用の中に計二十三篇の玉稿を頂戴いたしました。

三先生のこれまでの輝かしい業績は冒頭に掲載の略歴でご覧いただいた通りです。林先生と内藤先生は、本学の教授であると共に、本願寺派の勧学であります。両先生はこれまで蓄積された宗学の成果を踏まえることの大切さを説き、方法論として現代に受け継ぐべきものは何かを模索し、提唱され、伝え続けられた先生でした。聖教の文々句々と先行研究とを、実に広範に見渡しながら、研究者や学生に対して、時に主張の根拠を問い、時に鋭く論理の矛盾を突きつつも、温かくご指導くださるお姿は馨咳に接した者なら誰もが一度は目にしたことのあるところでしょう。真宗学という学問の楽しさと厳しさとの両方を教えていただきました。

廣田先生は、ともすれば内向きな学問になりがちな真宗学を、外に解放する大切さを説き続け、現代的、国際的な風を真宗学会に送り込み続けてくださった先生でした。何度も日米間を往復して、アメリカの親鸞および真宗の研究者と、日本の研究者との架け橋となってくださった先生でした。

この三人の先生は、学生の指導にも文字通り全力を注いでこられた先生であり、大変に学生に人気のある先生でもありました。こうして教育・研究をはじめとして、大きな存在感でこれまで真宗学会をお導き下さった先生方がご退職されるということで、真宗学会は新たな局面を迎えることになります。先生方がこれまで一生懸命に伝えてこられたことは何か。まずはこのことを静かに胸の内で確認し、これまでの先生方のご教導に深く感謝申し上げたいと思います。今後、ますますのご活躍を念じあげます。

末筆になりましたが、本誌編集にあたって論文のご執筆を頂いた先生方、また様々にご尽力頂いた学生諸君に、この場を借りて篤く感謝申し上げます。（龍溪章雄）

平成二十六年三月十日印刷
平成二十六年三月十三日発行

編集者　真宗学会編集委員
発行者　真宗学会長　川添泰信
（禁転載）
印刷所　㈱図書印刷　同朋舎

〒六〇〇-八二六六
京都市下京区七条大宮
発行所　龍谷大学真宗学会
電話　(代)〇七五-三四三-三三二一番
振替　〇一〇六〇-六-八七四六番

京都市下京区花屋町通西洞院西入
取次店　永田文昌堂
振替　〇一〇二〇-四-九三六番

平成二四年度　真宗学関係研究論文目録

（平成24年４月～平成25年３月）

〈仏教思想・文献〉

Phrapongsak Kongkarattanaruk	慧解脱者は四禅を必要としないのか	パーリ学仏教文化学	26
畑　昌利	パーリ仏典における阿闍世王	パーリ学仏教文化学	26
那須円照	『倶舎論』における言語観	パーリ学仏教文化学	26
Chaitongdi Phrachatpong	Lokappadipakasara のビルマ文字写本およびシンハラ文字写本の問題点 ―― Lokappadipakasara 第５章および第８章の源泉資料に関連して	パーリ学仏教文化学	26
亀山健志	チッタゴン丘陵地帯におけるパリッタ儀礼の報告	パーリ学仏教文化学	26
武田　龍	Tathagata の語義解釈の一視点	パーリ学仏教文化学	26
畝部俊也	パンニャーサ・ジャータカにおける捨身 ――北伝諸文献との関連をめぐって	パーリ学仏教文化学	26
蓑輪顕量	韓国における仏教と神信仰の関係 ――神仏の併存と分離について	パーリ学仏教文化学	26
田辺和子	覚王山日泰寺所蔵折本写本（日泰寺本）と水牛寺所蔵折本写本（水牛寺本）の比較研究	パーリ学仏教文化学	26
森部　一	タイのサンチ・アソーク仏教集団についての覚書 ―― Marja-Leena Heikkila-Horn（以下，M. H と略述）の研究に基づいて	パーリ学仏教文化学	26
釆睪　晃	廬山慧遠と二禅経	佛教学セミナー	95
新田智通	仏身の無漏性・有漏性について	佛教学セミナー	95

上野牧生	『釈軌論』における阿含経典の語義解釈法（1）	佛教学セミナー	95
大田蕗子	『入中論』の菩薩階梯における滅尽定	佛教学セミナー	96
上野牧生	『釈軌論』における阿含経典の語義解釈法（2）	佛教学セミナー	96
清水俊史	説一切有部における表（vijnapti）の構造	佛教大学大学院紀要（文学研究科篇）	41
佐伯慈海	常啼菩薩求法譚の成立時期について	佛教大学大学院紀要（文学研究科篇）	41
中西麻一子	カンガンハリ遺跡調査報告　――上段レリーフ石版に描かれた仏教説話の配列をめぐって	佛教大学大学院紀要（文学研究科篇）	41
Florian SAILE	An Assessment of the Role of Manuscripts in the Study of Japanese Hosso thought: The Example Of the Rongi "Daihi Sendai"	龍谷大学仏教文化研究所紀要	36
桂華淳祥	金代における宗室と佛教	大谷学報	92(2)
今西智久	隋仁寿舎利塔事業の基礎的考察――「勅使大徳」と起塔地をめぐって――	大谷学報	92(2)
武田龍	釈尊の最初の説法はどのように理解されたか	真宗教学研究	33
龍口明生	律蔵に規定される沙彌の教育	中央仏教学院紀要	24
松薗斉	『看聞日記』に見える尼と尼寺	人間文化―愛知学院大学人間文化研究所紀要	27
木村文輝	静岡県中・東部地方における曹洞宗の廃絶・転宗寺院の歴住世代（1）	人間文化―愛知学院大学人間文化研究所紀要	27
林淳	仏教と多神教をめぐる比較宗教学的研究・覚書	人間文化―愛知学院大学人間文化研究所紀要	27
大野榮人・伊藤光寿	『法華玄義』の研究(15)	人間文化―愛知学院大学人間文化研究所紀要	27

神山重彦	『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第55章への補注	人間文化 愛知学院大学人間文化研究所紀要	27
渡部正英	『正法眼蔵雑文』の「辨道話」と血脈	印仏研	61(1)
清野宏道	道元禅師の行持道環と天台の仏身論	印仏研	61(1)
古瀬珠水	『金綱集』における「見性成仏義」について	印仏研	61(1)
ミヒャエラムロス	瑩山昭瑾と『仏慈講式』 ——總持寺系と永光寺系の相違点について	印仏研	61(1)
赤塚祐道	覚鑁の『舎利供養式』をめぐって	印仏研	61(1)
寺本亮晋	持明禁戒について ——特に安然を中心に	印仏研	61(1)
大鹿眞央	中世東密教学における初法明道の変遷 ——第八住心との関係を中心に	印仏研	61(1)
胡建明	明恵における宗密の円覚教学への受容について	印仏研	61(1)
道津綾乃	湛睿著『随自意抄』について	印仏研	61(1)
関戸堯海	日蓮『注法華経』方便品における『法華文句』の注記について	印仏研	61(1)
土倉宏	日蓮における安然の問題	印仏研	61(1)
松岡正次	伝日蓮聖人撰「十王讃歎鈔」写本の伝来について	印仏研	61(1)
芹澤寛隆	『本尊聖教録』外典部所収の文献と日蓮遺文について	印仏研	61(1)
ジッリォ・エマヌエーレダヴィデ	『諸法実相抄』の研究 ——書誌学的な観点から	印仏研	61(1)
武田悟一	長松日扇筆曼荼羅本尊の一考察 ——讃文を視点として	印仏研	61(1)
堀部正円	『絵本日蓮大士御一代記』の書誌学的考察	印仏研	61(1)
長倉信祐	鎌倉鏡台寺の興廃をめぐって ——敬台院万姫と法華信仰	印仏研	61(1)
田戸大智	大乗義章三十講について	印仏研	61(1)
舘隆志	公暁の法名について	印仏研	61(1)
川本豊	〈奥〉の考察 ——貞慶『愚迷発心集』の心性	印仏研	61(1)
多田實道	内宮建国寺について	印仏研	61(1)

柴谷宗叔	澄禅『四国辺路日記』の検証	印仏研	61(1)
神達知純	天台教学における霊山同聴の意義	印仏研	61(1)
弓場苗生子	神智従義の三身解釈	印仏研	61(1)
篠田昌宜	智旭『教観綱宗』における「化儀四教」の解釈について	印仏研	61(1)
小野嶋祥雄	「真諦系一乗家の著作」としての『一乗仏性究竟論』	印仏研	61(1)
戸次顕彰	道宣の四種三宝説について　――住持三宝の存在意義を中心として	印仏研	61(1)
伊藤　真	「空・寂・浄に滞る」ということ　――李通玄における菩薩行と『般若経』	印仏研	61(1)
加藤弘孝	『念仏三昧宝王論』の撰述背景　――飛錫遺文を手がかりに	印仏研	61(1)
岸本正治	他人によって清浄とならないとは　―― Mahaviyuhasutta を中心に	印仏研	61(1)
内藤善之	仏像光背の変遷とその表現形式について　――焔肩の図像表現を中心に	印仏研	61(1)
大門浩子	キジル石窟涅槃図にみられる仏教的特質	印仏研	61(1)
生野昌範	Vinayavibhanga の新出梵文写本断簡	印仏研	61(1)
石田勝世	計量分析を利用した仏教説話のパラレル検出の試み　――『賢愚経』を中心として	印仏研	61(1)
佐々木閑	下田正弘とグレゴリー・ショペン　――大乗仏教の起源をめぐって	印仏研	61(1)
田中公明	大乗仏教在家起源説再考　――『般舟三昧経』の八菩薩と十六正士を中心に	印仏研	61(1)
岩松浅夫	梵文『十地経』の偈頌について　――特に韻律の問題を中心に	印仏研	61(1)
片山由美	『法華経』「方便品」と「譬喩品」　――大白牛車の解釈を巡って	印仏研	61(1)
冨田真浩	『法華経』におけるアスラ	印仏研	61(1)
壬生泰紀	〈無量寿経〉における阿弥陀仏国土観の変遷　――仏国土の名称を中心として	印仏研	61(1)

楠　宏生	『婆沙論』における得と非得との相関的規定	印　仏　研	61(1)
佐藤　晃	発趣心（prasthanacitta）の定義をめぐって　――カマラシーラ以降の修行論の展開に関する一考察	印　仏　研	61(1)
松下俊英	瑜伽行唯識学派が説く五明処の背景	印　仏　研	61(1)
佐々木宣祐	所知障の研究　――不染汚無知の内容	印　仏　研	61(1)
本村耐樹	『大乗荘厳経論』「述求品」に述べられる幻術の比喩における「存在するもの」	印　仏　研	61(1)
近藤伸介	『摂大乗論』における種子の六義について	印　仏　研	61(1)
苫米地等流	法天訳『最上大乗金剛大教寶王經』と『秘密集会タントラ』聖者流	印　仏　研	61(1)
静　春樹	金剛乗の比丘アティシャと秘密・般若智灌頂禁止の問題	印　仏　研	61(1)
大観慈聖	『成就法の花環』第221番～第224番について　――二種のチベット語訳をめぐる諸問題	印　仏　研	61(1)
片岡　啓	ディグナーガの意味論をめぐって　――有角性による推論の位置付け	印　仏　研	61(1)
岡田憲尚	言語協約・言語活動の点より見たアポーハ論	印　仏　研	61(1)
稲見正浩	二種の因果効力　――samanya sakti と pratiniyata sakti	印　仏　研	61(1)
西岡祖秀	『グルブム』にみられる断境説について	印　仏　研	61(1)
渡邊温子	カギュー派の源流　――マルパからミラレーパへ	印　仏　研	61(1)
原田　覺	敦煌本 Rigs pa drug「cu」pahi tshig lehur byas pa 考	印　仏　研	61(1)
安田章紀	ロンチェンパにおける３脈の理論	印　仏　研	61(1)
菅野博史	『大乗四論玄義記』「仏性義」の「第二釈名」の分析	印　仏　研	61(1)
定　源	敦煌写本に見られる道氤撰の「願文」について	印　仏　研	61(1)
金　炳坤	西域出土法華章疏について	印　仏　研	61(1)
齊藤隆信	上林園翻経館沙門彦琮の漢訳論	印　仏　研	61(1)

楊　　婷　婷	『四分比丘尼羯磨』の高麗初雕本テキストについて	印　仏　研	61(1)
渡　邊　幸　江	『摩訶止観』病患境　――「病」と「疾」	印　仏　研	61(1)
加　藤　龍　興	瑩山禅師の無明観	印　仏　研	61(1)
吉　崎　一　美	河口慧海に梵語文法を教授したクルマン博士	印　仏　研	61(1)
藤　森　晶　子	ネパール仏教のダシャカルマ・プラティシュターについて	印　仏　研	61(1)
高　本　康　子	日本人入蔵僧資料に見る戦時期「喇嘛教」工作と熱河承徳　――多田等観関連資料を中心に	印　仏　研	61(1)
蓑　輪　顕　量	良遍の『真心要決』と禅	印　仏　研	61(2)
真　野　新　也	栄西の『法華（経）入真言門決』についての検討	印　仏　研	61(2)
笠　井　　哲	沢庵『太阿記』における思想とその影響について	印　仏　研	61(2)
菅　原　研　州	乙堂喚丑『正法眼蔵続絃講義』の研究	印　仏　研	61(2)
龍　谷　孝　道	瑩山紹瑾と『宏智録』――永光寺開堂法語をふまえて	印　仏　研	61(2)
広　瀬　良　文	近世前期の禅宗と『三賢一致書』	印　仏　研	61(2)
上　野　徳　親	『続扶桑禅林僧宝伝』に見る源翁心昭	印　仏　研	61(2)
永　井　賢　隆	道元禅師における疑団の再検討――思想形成という視点から	印　仏　研	61(2)
有　働　智　奘	伝上宮太子撰『維摩経義疏』「百行云」の再検討	印　仏　研	61(2)
前　川　健　一	『叡山大師伝』の成立と仁忠	印　仏　研	61(2)
松　本　知　己	『法華文句』所説の五種声聞について	印　仏　研	61(2)
鍵和田　聖　子	東密における両部不二思想に関する一考察	印　仏　研	61(2)
木　村　中　一	『高祖遺文録』の書誌学的考察	印　仏　研	61(2)
山　崎　斎　明	本覚思想の四分類　――日蓮遺文における本覚の位置	印　仏　研	61(2)
奥　野　本　勇	日蓮聖人における太田氏教化の一考察	印　仏　研	61(2)
中　村　宣　悠	日蓮真蹟遺文『断簡五五』における「智礼」について	印　仏　研	61(2)

寺尾英智	行学院日朝の法門相伝書について	印	仏	研	61(2)
米澤晋之助	慶林坊日隆教学の一研究　――衆生救済について	印	仏	研	61(2)
徳永前啓	近世の日蓮教団統制に関する一考察　――触頭制度を中心に	印	仏	研	61(2)
庵谷行遠	『祖書綱要刪略』における日蓮遺文引用の傾向　――『祖書綱要』巻一を中心に	印	仏	研	61(2)
西村玲	日本における須弥山論争の展開	印	仏	研	61(2)
真鍋俊照	東寺・西院曼荼羅胎蔵界の図像的特色	印	仏	研	61(2)
南宏信	『無量寿経』末疏における八相示現の解釈　――義寂撰『無量寿経述記』を中心に	印	仏	研	61(2)
柏倉明裕	智顗における『法華経』の意味	印	仏	研	61(2)
トランクォック・フオン	天台智顗における三諦三観思想の所依経論について　――『法華経』の方便品の一考察	印	仏	研	61(2)
朴昭映	四悉檀と五時八教	印	仏	研	61(2)
伊吹敦	道璿は天台教學に詳しかったか	印	仏	研	61(2)
金天鶴	法上撰『十地論義疏』についての一考察	印	仏	研	61(2)
吉村誠	地論学派の心識説と南北二道の形成　――法上『十地論義疏』を中心に	印	仏	研	61(2)
河由眞	『大般涅槃経集解』「如来性品」の仏性義について	印	仏	研	61(2)
石上壽應	袾宏における『水陸儀軌』重訂について	印	仏	研	61(2)
林香奈	基説・義令記『勝鬘経述記』について　――基の著作との関連性の検証	印	仏	研	61(2)
小早川浩大	『智証伝』の成立について	印	仏	研	61(2)
倉本尚徳	林慮山と白鹿山　――北朝時代の太行山脈一帯における僧の修行地の問題について	印	仏	研	61(2)
金沢篤	討論 svabhavapratibandha：ダルマキールティ論理学の根本問題（仏教学は何をめざすのか、第63回学術大会パネル発表報告）	印	仏	研	61(2)

城福雅伸	貞慶研究の新展開と可能性：解脱上人800年遠忌に際しての再評価（仏教学は何をめざすのか、第63回学術大会パネル発表報告）	印仏研	61(2)
林隆嗣	『無礙解道註』(Saddhammappakasini）の源泉資料について	印仏研	61(2)
CHAITONGDI Phramahachatpong	Lokappadipakasara の源泉資料に関する一考察 —— Saddhammopayana, Pancagatidipani の引用を中心として	印仏研	61(2)
阿理生	bodhisatta; bodhisattva（菩薩）の語源と変遷 ——語義・用語法のさらなる考察	印仏研	61(2)
下田正弘	大乗仏教起源論再考	印仏研	61(2)
DENIYAYE Pannaloka	『十万頌般若』第14天王品の、ラサ写本と九大写本を中心とする比較研究	印仏研	61(2)
オーダム	北元時代のモンゴル語訳『八千頌般若経』について ——コペンハーゲン写本を中心に	印仏研	61(2)
平岡聡	法華経所収のジャータカの帰属部派	印仏研	61(2)
堀内俊郎	『楞伽経』テキストの諸問題	印仏研	61(2)
奥村浩基	『過去現在因果經』について	印仏研	61(2)
楊暁華	Padya-Lalitavistara の第16章『夢品』の研究	印仏研	61(2)
伊久間洋光	『如来秘密経』の梵文写本について	印仏研	61(2)
飯岡祐保	dharma の固有性と変化「不善から善へ」 ——『倶舎論』および『アビダルマディーパ』では	印仏研	61(2)
桂紹隆	『中論頌』の構造	印仏研	61(2)
金建峻	『大乗掌珍論』における有為法の無自性性論証 ——主張命題に関する妥当性論証を中心として	印仏研	61(2)
鄭祥教	チャンドラキールティの無我論証 ——『入中論』を中心として	印仏研	61(2)
森山清徹	シャーンタラクシタ、カマラシーラの無自性論証とダルマキールティの刹那滅論証 —— Vadanyaya における反所証拒斥検証とその活用	印仏研	61(2)

李　泰昇	シャーンタラクシタにおける〝勝義に随順するもの〟としての不生の意味について	印仏研	61(2)
北野新太郎	『唯識三十頌』第28偈における Jnana と Vijnana ―― ab 句の校訂と訳語に関する「ねじれの関係」をめぐって	印仏研	61(2)
永藁知也	瑜伽行学派における入無相方便の実践――四善根位における修習内容	印仏研	61(2)
小野　基	pramanabhuta の意味の変遷	印仏研	61(2)
西沢史仁	直接知覚と対象確定作用に関する再検討 ――ダルマキールティの相反する記述及び註釈者達の解釈	印仏研	61(2)
木村　紫	smrti 再考	印仏研	61(2)
渡辺和樹	Prasannapada p.16.2における paksa-antara の解釈について	印仏研	61(2)
川﨑一洋	『理趣広経』に説かれるパタの儀礼について	印仏研	61(2)
徳重弘志	『理趣広経』における灌頂について	印仏研	61(2)
池田英司	マハーカーラの成就法とシャーキャシュリーバドラ	印仏研	61(2)
石部道明	『ガリム』における究竟次第について――六支ヨーガを中心に	印仏研	61(2)
福田洋一	kun rdzob bden pa'i ngo bo と don dam bden pa'i ngo bo	印仏研	61(2)
青原彰子	『サムスクチェンモ』における心依と道	印仏研	61(2)
肖　越	『大阿弥陀経』の本願文における「女人」と「淫泆之心」 ――本願文の成立を中心に	印仏研	61(2)
伊藤千賀子	『六度集経』の成立について ――康僧会の動機と目的	印仏研	61(2)
西本照真	三階教写本『人集録明諸経中対根浅深発菩提心法』一巻の基礎的研究	印仏研	61(2)
金　範松	心・意・識説における阿頼耶識と末那識との関係 ――所縁の問題を中心に	印仏研	61(2)
荘　穎芬	潙仰宗の円相について	印仏研	61(2)
林　敏	智昇撰『続古今訳経図紀』のテキスト変遷について	印仏研	61(2)

蕭　文真	『敦煌秘笈』羽-100号残巻の特性およびその真偽	印	仏	研	61(2)
朴　ボラム	華厳教学における如来一音について	印	仏	研	61(2)
福士慈稔	日本の三論宗と法相宗の海東仏教認識について	印	仏	研	61(2)
若江賢三	＜222＞辨殿御消息の系年について	印	仏	研	61(2)
KASAMATSU Sunao	devayana-, brahmayana-, mahayana-	印	仏	研	61(3)
YAO Fumi	A Brief Note on the Newly Found Sanskrit Fragments of the Bhaisajyavastu of the Mulasarvastivada-vinaya	印	仏	研	61(3)
YAMASAKI Kazuho	The Story of Upagupta's Victory over Mara in the Asokavadanamala	印	仏	研	61(3)
SUZUKI Takayasu	What the Preachers of the Suvarnaprabhasa Resolved in the Kamalakara-parivarta	印	仏	研	61(3)
James B. APPLE	The Influence of the Avaivartikacakra Mahayana Sutra in Indian Buddhism Based on Its Citation in Indian Buddhist Commentaries	印	仏	研	61(3)
SHIMIZU Toshifumi	The Creation of Karma among Arhats —— An Examination of Doctrine in Sarvastivada and Theravada	印	仏	研	61(3)
ISHIDA Kazuhiro	A Background of One Sautrantika's Theory in the Abhidharmakosa	印	仏	研	61(3)
YOKOYAMA Takeshi	The Real Existence of Pratisamkhyanirodha —— The Manusyakasutra as Scriptural Evidence in the Abhidharmavatara	印	仏	研	61(3)
SAITO Akira	Buddhapalita's Metaphorical Expression	印	仏	研	61(3)
AKAHANE Ritsu	On the Digressions of the Prajnapradipa, with a Reevaluation of Its Chinese Translation	印	仏	研	61(3)
MOCHIZUKI Kaie	References to Indian Buddhist Masters in the Commentary on the Sutrasamuccaya by Ratnakarasanti	印	仏	研	61(3)

TAKAHASHI Koichi	Observation of the Body in the Bodhisattvabhumi —— Significance of the kayanupasyana in the Early Yogacara Philosophy	印	仏	研	61(3)
OKADA Eisaku	Agotrastha in the Bodhisattvabhumi —— The Paripakapatala and the Bodhisattvagunapatala	印	仏	研	61(3)
KISHI Sayaka	On Feelings of Shame (Lajja) in the Eighteenth Chapter of the Mahayanasutralamkarabhasya	印	仏	研	61(3)
NASU Ensho	A Study of the Theory of "Consciousness-Only with No External Objects" Discussed in Dharmapala's Vijnaptimatratasiddhiratnasambhava	印	仏	研	61(3)
HIBI Yuka	A Study for the Germination of Alaya-vijnana Thought —— From the Perspective of Karmasiddhiprakarana	印	仏	研	61(3)
WATANABE Toshikazu	Dignaga on Avita and Prasanga	印	仏	研	61(3)
SASAKI Ryo	Nigrahasthana in the Vadanyaya —— Controversy between Dharmakirti and the Nyaya School	印	仏	研	61(3)
MATSUOKA Hiroko	Santaraksita in Defense of the Alambanapariksa v.2ab	印	仏	研	61(3)
HUNG Hunglung	A Retrospective Research on Text Formation in Early Buddhism —— From a Case on Benxiang yizhi jing T36, Translated by An Shigao	印	仏	研	61(3)
SATO Atsushi	On the Manuscript of the Ilseung beopgye do —— Property of Jorakuin Temple	印	仏	研	61(3)
WATANABE Hoyo	How Nichiren Understood the Buddha in His Kanjin honzon sho —— The Buddha Whom He Looked Up To and Who Was Observed in His Mind	印	仏	研	61(3)
中　谷　征　充	空海漢詩文研究「故贈僧正勤操大徳影讃并序」考	高野山大学密教文化研究所紀要			26

川田　薫	真言密教と科学の初歩的な比較論（その１）六大と科学	高野山大学密教文化研究所紀要	26
平賀　由美子	『十地経』における十地の構造 ——各地の結語部分を手がかりとして	高野山大学密教文化研究所紀要	26
石部　道明	『ガリム』第13章の研究 ——『カーラチャクラ・タントラ』に関する箇所の試訳	高野山大学密教文化研究所紀要	26
静春樹【和訳】	サキャ派祖師たち三人による金剛乗の決択 ——サキャパンディタ作『タントラ部概論建立とタントラの現観の要綱の科文』和訳(1)	高野山大学密教文化研究所紀要	26
渡瀬　淳子	諸仏念衆生、衆生不念仏 ——中世「擬」仏教語の一側面	国語と国文学	89(8)
永井　賢隆	道元禅師における懺悔滅罪について	駒沢大学大学院仏教学研究会年報	45
広瀬　良文	大乗寺本「百二十通切紙」の考察と翻刻(1)卍山道白編纂の禅宗相伝書	駒沢大学大学院仏教学研究会年報	45
大松　久規	『釈禅波羅蜜次第法門』における『大智度論』引用表	駒沢大学大学院仏教学研究会年報	45
渡辺　和樹	「サムイェーの宗論」思想的研究序説 ——『修習次第・後篇』を中心とする禅思想批判	駒沢大学大学院仏教学研究会年報	45
村上　明宏	説一切有部における命根(jivitendriya)の定義の変遷 ——寿(ayus)と寿行(ayus-samskarah)をめぐる研究ノート	駒沢大学大学院仏教学研究会年報	45
梶　龍輔	苗木藩における「廃仏毀釈」と神葬祭 ——岐阜県蛭川村の事例を中心に	駒沢大学大学院仏教学研究会年報	45
Yugen WADA	Sabda-alamkara in the Kavyadarsa of Dandin(3)Citra and Niyama	駒沢大学大学院仏教学研究会年報	45
永井　政之	東皐心越と関帝信仰 ——『覚世真経』と金印の将来	駒沢大学仏教学部研究紀要	71
石井　公成	物真似芸の系譜 ——仏教芸能との関係を中心にして(上)	駒沢大学仏教学部研究紀要	71
飯塚大展・土屋圭子	林下曹洞宗における相伝史料研究所説(7)正法寺関係史料篇(1)	駒沢大学仏教学部研究紀要	71
吉村　誠	中国唯識における聞熏習説の展開	駒沢大学仏教学部研究紀要	71

新井一光	ジュニャーナシユリーミトラと『宝性論』	駒沢大学仏教学部研究紀要	71
清野宏道	道元禅師における授記の概念	駒沢大学仏教学部研究紀要	71
渡邊幸江	『四分律』考　――病	駒沢大学仏教学部研究紀要	71
木村誠司	『倶舎論』にまつわる噂の真相	駒沢大学仏教学部研究紀要	71
金沢篤	レーリヒと河口慧海　――レーリヒ父子来日の事情を探る	駒沢大学仏教学部研究紀要	71
永井政之・程正・山本元隆【他】	『宋会要』道釈部訓注(7)	駒沢大学仏教学部論集	43
佐藤秀孝	明庵栄西の在宋中の動静について(上)第一次入宋と重源および阿育王山広利寺をめぐって	駒沢大学仏教学部論集	43
飯塚大展・土屋圭子	林下曹洞宗における相伝史料研究序説(6)永光寺関係史料篇（上之２）	駒沢大学仏教学部論集	43
高橋秀榮	『沙石集』の生蓮入道と舎利信仰	駒沢大学仏教学部論集	43
新井一光	Yuvarajaについて　――ジュニャーナシュリーミトラの仏教思想	駒沢大学仏教学部論集	43
清野宏道	道元禅師における仏身観　――修証論と重ねて	駒沢大学仏教学部論集	43
小栗隆博	虎伯大宣の行実について	駒沢大学仏教学部論集	43
佐藤英樹	南英謙宗とその語録　――「南英謙宗語録」を中心として	駒沢大学仏教学部論集	43
龍谷孝道	中世曹洞宗における『宏智録』の受容――通幻派の語録・抄物を中心として	駒沢大学仏教学部論集	43
永井賢隆	道元禅師と『大智度論』　――『正法眼蔵』における三昧について	駒沢大学仏教学部論集	43
広瀬良文	卍山道白の切紙編纂とその周辺――「高祖」顕彰と宗統復古	駒沢大学仏教学部論集	43
渡邊幸江	禅病　――『首楞厳經』に見る五蘊	駒沢大学仏教学部論集	43

古山健一	ラーン・ナー文字貝葉写本Kammavaca ——ローマナイズテキスト	駒沢大学仏教学部論集	43
木村誠司【訳】	アビダルマの二諦説 ——訳注研究・インド編I	駒沢大学仏教学部論集	43
田中良昭・程正	敦煌禪宗文獻分類目録(2)語録類(5)	駒沢大学仏教学部論集	43
佐藤成順	宋初期の首都開封の仏教と寺院	三康文化研究所年報	44
宇高良哲	増上寺中興観智国師源誉存応関連史料集	三康文化研究所年報	44
西村実則	サンスクリットと仏教	三康文化研究所年報	44
柴田泰山	竺法護訳『弥勒所問本願経』について	三康文化研究所年報	44
石田一裕	Sautrantikaと経部・軽量部	三康文化研究所年報	44
古宇田亮修	Abhisamacarika-Dharmaにおける副詞の用法	三康文化研究所年報	44
安田理深	衆生の自覚としての本願 ——願生論(5)	親鸞教学	100
安田理深	純粋なる有限なる自己 ——願生論(6)	親鸞教学	101
加藤高敏	『法華経』の供養形態の変化と慧思の『法華経』受容	曹洞宗研究員研究紀要	43
広瀬良文	中世前期禅宗と神祇・神人化度とその周辺	曹洞宗研究員研究紀要	43
龍谷孝道	仲翁守邦の語録と行状 ——伊予龍澤寺所蔵『仲翁和尚語録』『仲翁和尚行状記』翻刻	曹洞宗研究員研究紀要	43
佐藤英樹	越後種月寺蔵『南英謙宗語録』の訓註(3)	曹洞宗研究員研究紀要	43
大松久規	『釈禅波羅蜜次第法門』「覚魔事」について	曹洞宗研究員研究紀要	43
ミヒャエラムロス	能登總持寺と峨山講式について(2)『両尊征忌等差定帳』と「峨山講伽陀」を中心に	曹洞宗研究員研究紀要	43
Yugen WADA	Sabda-alamkara in the Kavyadarsa of Dandin(4) Praherika	曹洞宗研究員研究紀要	43

池田宗讓	「世諦の中に第一義諦有りや不や」発問の周囲(2)『婆沙論』と『涅槃経』において	大正大学大学院研究論集	36
秋田晃瑞	黒谷戒家にみられる信心受戒について	大正大学大学院研究論集	36
関悠倫	『釋摩訶衍論』における「四種法熏習」の一考察	大正大学大学院研究論集	36
関口中道	『天台教理の基礎的研究』概要	大正大学大学院研究論集	36
阿部旬	生動性の現象学　――フッサールにおける＜ヒュレー＞と初期唯識思想における＜阿陀那識＞との比較から	大正大学大学院研究論集	36
安井光洋	青目釈『中論』と Akutobhaya の異同について　――第１章「縁の考察」を中心として	大正大学大学院研究論集	36
金範松	心・意・識説に関する研究　――阿頼耶識と末那識との関係を中心に(1)所依の問題	大正大学大学院研究論集	36
淺野秀夫	『解深密経』における大乗のヨーガ	大正大学大学院研究論集	36
川瀬隆	最澄における菩薩戒について	東海仏教	58
加藤高敏	慧思における四事供養について	東海仏教	58
トラック・クォックフオン	天台智顗における三諦三観思想の所依経論について　――『中論』の二諦説から『仁王般若経』『菩薩瓔珞本業経』の三諦説へ	東海仏教	58
伊藤秀真	『義雲和尚語録』引用資料の分析――洞山良价の伝記・語録を事例として	東海仏教	58
Dao Trinh Chinh Nhan	中国の天台教学における五時教判の変遷　――智旭『教観綱宗』における転・接・同・会・借の五説について	東海仏教	58
大羽恵美	八大菩薩を伴う大日如来の作例に見られるマンダラ的配置に関する一試論――チベットの作例を中心に	東海仏教	58
齋藤滋	説一切有部における仏陀の八万の教説――法蘊と『法蘊足論』	東海仏教	58
岩崎日出男	五臺山・金閣寺の構造とその教理的背景について	東洋の思想と宗教	30

弓場　苗生子	後山外派の相即解釋における繼承と發展	東洋の思想と宗教	30
岩田　孝	『定説集成』(Sthitisamāsa) 和譯研究　無形相知識論瑜伽行派の定説(4)　無形相知識論瑜伽行派の唯識説と実践	東洋の思想と宗教	30
伊吹　敦	初期禪宗と日本佛教　――大安寺道璿の活動とその影響	東洋学論叢	38
George Coedes【校訂】・岩井昌悟【訳】	チュンダの施食　―― Pathamasambodhi 第14章 Parinibbanakatha 訳注研究(3)	東洋学論叢	38
渡辺章悟	般若経の三乗思想	東洋学論叢	38
鳥谷部輝彦	天台密教の安鎮法における奏舞奏楽	日本宗教文化史研究	16(1)
市岡　聡	『法華験記』序の寂法師と験記	日本歴史	778
藤本　誠	日本古代の「堂」と村落の仏教	日本歴史	777
上田純一	寺院の医療システム　――禅宗教団を例として	日本歴史	776
池田陽平	延暦寺における伝法灌頂の分離とその背景	日本歴史	775
朴澤直秀	いわゆる「宗門檀那請合之掟」と「諸寺院条目」	日本歴史	774
伊藤瑞叡	経典研究の観点と方法を考える	日本仏教学会年報	77
伊藤進傳	『文殊問経』の成立と受容	日本仏教学会年報	77
織田顕祐	涅槃経における無我と我の経説	日本仏教学会年報	77
水野荘平	南北朝時代における中国撰述経典の成立について　――『仁王般若経』の成立を中心にして	日本仏教学会年報	77
松田陽志	江戸期曹洞禅僧の経典・文字観　――独庵玄光と天桂伝尊を中心に	日本仏教学会年報	77
師　茂樹	占察経の成立と受容　――なぜ占いが必要とされるか	日本仏教学会年報	77
藤谷厚生	『金光明経』の成立と展開	日本仏教学会年報	77
落合俊典	日本仏教における疑経の受容と生成	日本仏教学会年報	77

蓑輪顕量	日本撰述の偽経典について　——経典の成立と展開事情	日本仏教学会年報	77
富田真理子	涅槃の諸相と初期仏教経典 —— abhinibbuta 複合語と parinibbuta を含む経典について	日本仏教学会年報	77
渡辺章悟	般若経の成立過程　——智の展開を中心として	日本仏教学会年報	77
片山由美	インド仏教における法華経の成立と展開	日本仏教学会年報	77
米澤嘉康	大乗仏典の呼称をめぐって —— sūtra の用例を中心に	日本仏教学会年報	77
佐久間留理子	『カーランダ・ヴューハ・スートラ』の展開とその宗教的背景	日本仏教学会年報	77
苅谷定彦	〈阿弥陀経〉と『大阿弥陀経』の成立	日本仏教学会年報	77
高橋審也	無量寿経の成立と展開	日本仏教学会年報	77
佐藤直実	大乗『大般涅槃経』重訳　——チベット語訳の有用性	日本仏教学会年報	77
菊谷竜太	インド密教における『秘密集会タントラ』の受容と展開	日本仏教学会年報	77
乾仁志	『初会金剛頂経』の仏典としての位置	日本仏教学会年報	77
野呂勉	普一国師志玉による『五教章』講説について	龍谷大学論集	480
能仁正顕	無量寿経における唯除（sthapayitva）の意趣	龍谷大学論集	481
松尾宣昭	「輪廻転生」考（四）　——和辻哲郎の輪廻批判(再説)	龍谷大学論集	481
大塚紀弘	中世仏教における融和と排除の論理 ——「宗」と宗論をめぐって	武蔵野大学仏教文化研究所紀要	29
賈智	『新訳華厳経音義私記』と『新華厳経音義』の「後紙」との関係について	訓点語と訓点資料	130
賈智	『新訳華厳経音義私記』所引の字様について(2)用例の考察と分析	訓点語と訓点資料	129
根井浄	近世熊野比丘尼の存在形態	仏教史研究	49
吉岡諒	叡尊・忍性の救済活動とその歴史的性格(上)	仏教史研究	49

吉田一彦	宗叡の白山入山をめぐって　――九世紀における神仏習合の進展(1)	仏教史研究	50
佐藤文子	臨時得度の政治思想	仏教史研究	50
中本由美	南都六宗における宗派意識の形成とその展開	仏教史研究	50
吉岡諒	叡尊・忍性の救済活動とその歴史的性格(下)	仏教史研究	50
中西麻一子	カンガンハリの「初転法輪」図について	真宗文化：真宗文化研究所年報	22
真置美徳	神々との対話　――「サンユッタ・ニカーヤI」より	教學院紀要	20
西村玲	慧命（えみょう）の回路：明末・雲棲袾宏の不殺生思想	宗教研究	86(3)
安永祖堂	宗教と言語　――禅体験に於ける言語の媒介性（2012年度チェーン・レクチャー概要テーマ「宗教と言語」）	京都・宗教論叢	7
兵藤一夫	仏教の言語観　――仮説(けせつ)ということ（2012年度チェーン・レクチャー概要テーマ「宗教と言語」）	京都・宗教論叢	7
北尾隆心	弘法大師空海の真言観（2012年度チェーン・レクチャー概要テーマ「宗教と言語」）	京都・宗教論叢	7
村上泰教	実賢造作の如意宝珠（2012年度　京都・宗教系大学院連合主催　大学院生論文発表会概要）	京都・宗教論叢	7
オズヴァルド メルクーリ	夢窓疎石と宗峰妙超の方便思想の比較（2012年度　京都・宗教系大学院連合主催　大学院生論文発表会概要）	京都・宗教論叢	7
野村卓美	近世の高僧伝類と明恵上人伝記　――『伝灯広録』後巻第二洛西栂尾日照高山寺開祖高弁伝	文芸論叢	79
野村卓美	我が国における疑経『清浄法行経』の受容　――三聖派遣説話と舎利信仰	文芸論叢	78
蜷川祥美	蔵俊著『唯識論菩提院鈔』中の論義「命與身一」について	岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要	13
早島慧	『中辺分別論』「真実品」における勝義解釈	岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要	13

村松　加奈子	聖徳太子絵伝の制作拠点に関する一考察　――四天王寺と法隆寺を中心に（中世宗教図像学の探求　――説話図像と象徴図像）	アジア遊学	154
藤原　崇人	草海の仏教王国　――石刻・仏塔文物に見る契丹の仏像	アジア遊学	160
阿南ヴァージニア史代	遼南京の仏教文化雑記	アジア遊学	160
増尾　伸一郎	ベトナムにおける偽経と善書の流伝　――仏道儒三教と民間信仰の交渉をめぐって（東アジア諸国の「偽」の世界）	アジア遊学	161
山口　眞琴	偽書生成の源泉　――『天台伝南岳心要』と多宝塔中釈迦直授をめぐって（日本における「偽」なるものの展開）	アジア遊学	161
伊藤　聡	「若凡若聖偈」の形成と享受（日本における「偽」なるものの展開）	アジア遊学	161
納冨　常天	總持寺五院の成立と展開(4)	鶴見大学仏教文化研究所紀要	18
尾﨑　正善	長林寺の世代と末寺の関係について(2)『永平寺住山記』の記録を通して	鶴見大学仏教文化研究所紀要	18
下室　覚道	道元禅師の仏性観	鶴見大学仏教文化研究所紀要	18
古瀬　珠水	再考　――大日房能忍と「達磨宗」	鶴見大学仏教文化研究所紀要	18
岩橋　春樹	「總持寺展」記録	鶴見大学仏教文化研究所紀要	18
池　麗梅	『続高僧伝』研究序説　――刊本大蔵経本を中心として	鶴見大学仏教文化研究所紀要	18
張　文良	霊弁『華厳経論』における戒律思想	東アジア仏教研究	10
崔　恩英・佐藤　厚【訳】	真諦の『金剛経』註釈書とその周辺	東アジア仏教研究	10
西本　照真	杏雨書屋所蔵三階教写本『人集録明諸経中対根浅深発菩提心法』一巻(羽411)翻刻	東アジア仏教研究	10
荘　崑木	『瑜伽論』と『倶舎論』・『摂大乗論釈』とにおける法蘊体系の相違とその背景	東アジア仏教研究	10

林　香奈	基に関する伝記的記述の変遷について	東アジア仏教研究	10
柳　幹康	禅者が見た心　――馬祖の『楞伽経』解釈の新しさ	東アジア仏教研究	10
橋本崇宣	自閉症についての一考察　――現象学と唯識思想による分析	仏教文化学会紀要	21
駒井信勝	『陀羅尼集経』第十二巻にみられる供養法をめぐって　――第三・八巻の軍荼利結界法・供養法にかかわって	仏教文化学会紀要	21
安井光洋	初期『中論』注釈書における涅槃について	仏教文化学会紀要	21
別所弘淳	『真言宗未決文』「即身成仏の疑」が初期日本天台へ与えた影響について	仏教文化学会紀要	21
森　覚	『絵本極楽』の研究	仏教文化学会紀要	21
石田一裕	経量部とガンダーラ有部の関係　――不律儀の考察を通して	仏教文化学会紀要	21
三浦　周	〝近代仏教学〟は洋学か　――近代梵語学研究史(序)	仏教文化学会紀要	21
牛　黎濤	日本による仏教文化導入の歴史の分析	仏教文化学会紀要	21
鈴木行賢	阿字本不生と実相の関係について	仏教文化学会紀要	21
金　永晃	梵唄の伝来と展開	仏教文化学会紀要	21
大谷正幸	富士行者・村上光清と食行身禄の新しい伝記　――『扶桑教祖年譜』における角行系富士信仰の伝承(3)	仏教文化学会紀要	21
師　茂樹	文字と仏教(9)世界は常にすでに分節されている　――倫理はどこにあるか	春秋	538
定方　晟	「去るものは去らず」の意味	春秋	539
師　茂樹	文字と仏教(10)テクストと阿頼耶識	春秋	540
師　茂樹	文字と仏教(11)文字と瞑想　――書物は記憶される	春秋	541
師　茂樹	文字と仏教(12)ゴーストの時代	春秋	542
西野　翠	英語世界に「維摩経」を伝えた人	春秋	543
高村　薫	道元がたちあらわれるところ	春秋	546

南　直哉	運動する『正法眼蔵』	春秋	546
角田泰隆	なぜ道元は多くの著作を残したのか	春秋	546
吉村昇洋	道元と食　——精進料理の世界	春秋	546
武田鏡村	特集論考平清盛の前に立ちはだかる宗教勢力戦う僧侶たち　——僧兵と改革者	歴史読本	57(5)
赤羽　律	『世俗不生論』と『世俗自性不生論』	仏教史学研究	55(1)
駒井　匠	宇多上皇の出家に関する政治史的考察	仏教史学研究	55(1)
小山貴子	中世後期の在地における修験道の展開と在地の「信仰圏」　——信濃国佐久郡大井法華堂の事例から	仏教史学研究	55(1)
西尾知己	中世後期の真言宗僧団における三宝院門跡　——東寺長者の検討を通じて	仏教史学研究	55(2)
高橋大樹	室町・戦国期二尊院の再興と「勧進」——法然廟・檀那・菩提所	仏教史学研究	55(2)
三浦雅彦	鈴木正三伝の史料批判　——「仏教治国論」の再検討	仏教史学研究	55(2)
坂井田夕起子	第二回世界仏教徒会議をめぐる東アジア仏教世界とその交流　——戦後復興と冷戦、内戦の狭間で	仏教史学研究	55(2)
山田雅教	顕密僧としての親鸞の弟　——善法房尋有	仏教史学研究	55(2)
田中実マルコス	黄檗僧念仏獨湛の著作	仏教大学総合研究所紀要	20
熊谷貴史	荘厳研究のための覚書　——思想と造形の相関をめぐる研究史および展望	仏教大学総合研究所紀要	20
長谷川智治	玉虫厨子絵の山岳表現について——霊鷲山図を中心に	仏教大学総合研究所紀要	20
藤仲孝司	カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究——往生の第二因、七支供養より廻向と、第三因、正覚への発心の段	仏教大学総合研究所紀要	20
中御門敬教	カルマ・チャクメーの極楽願文『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究——往生の第四因、廻向の段	仏教大学総合研究所紀要	20

〈浄土教〉

森本光慈	法本房行空上人と造悪無碍	龍谷教学	48
那須一雄	弁長・良忠における『十住毘婆沙論』理解 ――その共通点と相違について――	龍谷教学	48
峯崎賢亮	一向俊聖の念仏観に関する考察 ――一遍一向両祖の臨終の迎え方の差は何を意味するのか ――	時宗教学年報	41
三浦諒洸	旅と僧～旅する僧の登場と時衆における変化～	時宗教学年報	41
山崎真純	中国浄土教における「往生伝類」の研究 ――「後善導」と「善導後身」について――	真宗研究	57
藤丸　要	凝然の浄土教観	真宗研究	57
飯田真宏	貞慶の念仏と法然の念仏	真宗教学研究	33
那須英勝	聖覚法印の妹浄意尼の事跡について	印仏研	61(1)
山本博子	新出の法然上人二十五霊場巡拝の道中記	印仏研	61(1)
石川達也	上田藩主松平家の浄土宗信仰について	印仏研	61(1)
愛宕邦康	新羅浄土教における『観無量寿経』の位置付け ――恵谷隆戒説への疑問	印仏研	61(1)
工藤量導	迦才と吉蔵の浄土教思想について	印仏研	61(1)
髙井恭子	貞照院における『黄檗版』虫干し「百万遍」法要について	印仏研	61(2)
城福雅伸	『興福寺奏状』における国家と仏教の論理 ――貞慶は法然とその浄土教団を抹殺しようとしたのか	印仏研	61(2)
伊藤正順	仁空実導上人著『六巻本論義鈔』にみられる本山義の教学の特徴	印仏研	61(2)
成瀬隆順	珍海撰『安養知足相対抄』の一考察	印仏研	61(2)
沼倉雄人	良忠『観経疏伝通記』における仏土理解について	印仏研	61(2)
中御門敬教	伝ディグナーガ著〈普賢行願讃釈〉に説かれた極楽往生と釈迦菩薩行 ――還相廻向の前提	印仏研	61(2)

韓　普光	朝鮮・四溟大師惟政の浄土信仰について	印仏研	61(2)
小松庸祐	日本人の心のふるさと神と仏の物語（第16回）明恵上人と親鸞聖人	大法輪	79(7)
石川達也	『浄家進学日札』下紹介と翻刻	三康文化研究所年報	44
長尾隆寛	「十七条御法語」について　――第十五条法語に関する伝承と変遷	大正大学大学院研究論集	36
工藤量導	迦才と弘法寺	大正大学大学院研究論集	36
小山聡子	中世社会と法然門弟の信仰　――善慧房證空を事例として	日本宗教文化史研究	16(1)
大塚紀弘	城誉空念の廻国と髪繍図(上)無量光寺蔵新出資料の紹介を兼ねて	日本宗教文化史研究	16(1)
上野大輔	近世後期「捨世派」僧侶の布教と地域民衆　――大日比西円寺の法岸・法洲・法道に着目して	仏教史研究	49
那須一雄	幸西と証空における信	宗教研究	86(4)
沼倉雄人	良忠の本願観　――『観経疏伝通記』を通じて	宗教研究	86(4)
山口　唯	智光曼荼羅考　――軸装本を中心に	京都・宗教論叢	7
河智義邦	隆寛浄土教と天台本覚思想の関連	岐阜聖徳学園大学仏教文化研究所紀要	13
伊藤　真	李通玄における往生浄土思想批判	東アジア仏教研究	10
石川達也	明治時代以前における行誡の動向	仏教文化学会紀要	21
郡嶋昭示	九州における聖光の活動について――勧進と門弟教化を中心に	仏教文化学会紀要	21
坪井　剛	法然没後の専修念仏教団と「嘉禄の法難」事件	史林	95(4)
山本幸男	道璿・鑑真と淡海三船　――阿弥陀浄土信仰の内実をめぐって	仏教史学研究	55(1)

〈教理史〉

井上見淳	たすけたまへの浄土教	真宗学	127
青柳英司	善導の仏弟子観　――唯信仏語――	真宗研究	57
山﨑真純	『念仏鏡』の一考察　――善導教学との関連を中心に――	真宗研究会紀要	45
光川眞翔	「選択本願」開示の意義	大谷大学大学院研究紀要	29
桑原昭信	阿惟越致地論考　――龍樹教義と親鸞教義の交渉より	印仏研	61(1)
長谷川浩文	和泉阿闍梨源空	印仏研	61(1)
石川琢道	曇鸞の名号論の成立とその背景	印仏研	61(1)
内田准心	曇鸞における願生と菩提心　――八番問答の滅罪の思想	印仏研	61(1)
市野智行	善導の指方立相説について	印仏研	61(1)
藤村潔	『一乗要決』における『涅槃経』の受容	印仏研	61(2)
柴田泰山	善導『観経疏』所説の教判論について	印仏研	61(2)
田中無量	『往生論註』の「名即法」と「名異法」の名号論	印仏研	61(2)
米田順昭	『往生礼讃』における起行についての一考察	行信学報	25
弘中満雄	〈無量寿経〉重誓偈の内容構成に関する一考察	宗学院論集	85
相馬晃	『選択集』における菩提心廃捨の意義　――『摧邪輪』との比較を通して	親鸞教学	101
小川直人	畢竟成仏の道路　――『浄土論註』親鸞加点本に注目して	親鸞教学	101
亀崎真量	如来二種の回向　――『浄土論註』の回向論と親鸞の視座	親鸞教学	101
杉山裕俊	道綽『安楽集』所説の実践論について　――五念門を中心に	大正大学大学院研究論集	36
藤村潔	『一乗要決』における真如の問題　――真如所縁縁種子説をめぐって	東海仏教	58

田中無量	『往生論註』の「二種法身」と「広略」の関係再考	武蔵野大学仏教文化研究所紀要	29
溪　英俊	凡夫と大乗菩薩道	宗教研究	86(4)
本庄良文	法然の法語　――仏陀のことばとその解釈（2012年度チェーン・レクチャー概要テーマ「宗教と言語」）	京都・宗教論叢	7
長宗博之	曇鸞教学における空思想の研究　――特に僧肇の二諦論理の受容と展開	京都・宗教論叢	7
本多弘之	親鸞思想の解明浄土を求めさせたもの――『大無量寿経』を読む(11)	現代と親鸞	24
本多弘之	親鸞思想の解明浄土を求めさせたもの――『大無量寿経』を読む(12)	現代と親鸞	25
五島清隆	インド大乗仏教における偽書・擬託の問題　――とくに龍樹の著作を中心にして	アジア遊学	161
真名子晃征	『往生論註』における修行者	浄土真宗総合研究	7
尾畑文正	浄土荘厳の内景　――性功徳を中心にして	閲蔵：同朋大学大学院文学研究科研究紀要	8
市野智行	善導教学の研究『観経四帖疏』の思想構造	閲蔵：同朋大学大学院文学研究科研究紀要	8
杉浦道雄	法然における二修二土の判についての一考察	同朋仏教	48
市川定敬	法然浄土教の倫理研究　――これまでの動向と課題	仏教大学総合研究所紀要	20

〈真宗教義学〉

岡村謙英	誓願一仏乗における証果論	龍谷教学	48
若林眞人	「真実証」における成仏について	龍谷教学	48
山崎龍明	大乗仏教精神と還相回向	龍谷教学	48
宇野惠教	還相回向の諸問題	龍谷教学	48
内藤知康	『教行信証』「証文類」引用文の所顕――願文と成就文――	真宗学	127

塚本一真	『弥陀如来名号徳』の欠落箇所についての一考察	真宗学	127
藤能成	親鸞における「仏智不思議」——「はからひ」とは何か——	真宗学	128
玉木興慈	煩悩成就と不断煩悩得涅槃	真宗学	128
山元一志	涅槃の現働としての本願力回向の推求	真宗研究	57
大野択	真仮疑判を問い直す必要性について	真宗研究	57
三本彰円	親鸞の『阿弥陀経』観	真宗研究	57
本明義樹	親鸞における本願力廻向開顕の意義——坂東本『教行信証』を精読して——	真宗教学研究	33
松山智道	三願転入と二河譬	高田学報	101
青柳英司	真仏弟子　——本願の教説を信受し伝承する存在——	大谷大学大学院研究紀要	29
高田未明	親鸞における弥陀救済思想と倫理観——悪人正機説を手掛かりとして——	中央仏教学院紀要	24
岡宏	親鸞思想の死生観　——成立に関する探索的研究	印仏研	61(1)
青柳英司	親鸞の仏弟子観　——金剛心の行人	印仏研	61(1)
永原智行	信心仏性	印仏研	61(1)
川元惠史	親鸞の弥勒観とその背景	印仏研	61(2)
冨島信海	『教行信証』における割註について	印仏研	61(2)
山本攝叡	『歓喜』と『慶喜』	行信学報	25
藤澤信照	三願転入についての再考察	行信学報	25
中西昌弘	親鸞聖人の仏身仏土論の一考察	行信学報	25
森本光慈	親鸞聖人と安楽房遵西上人　——古田武彦氏への疑問	行信学報	25
山上正尊	絶対釈の考察	行信学報	25
武田一真	真宗教学における不二而二　——真言密教との対比を視座として	行信学報	25
藤井淳	慈信房善鸞上人義絶問題について	駒沢大学仏教学部研究紀要	71
岡崎秀麿	両重因縁釈の研究	宗学院論集	85
深川明暢	真宗に於ける菩提心とその背景について	宗学院論集	85

宇野恵教	「証文類還相回向釈」における他力回向義について	宗学院論集	85
一楽　真	浄土と現世	親鸞教学	100
木越　康	親鸞と末法(下)	親鸞教学	100
佐々木秀英	誓願一仏乗　――本願力によって実現する無上仏道	親鸞教学	100
金子大榮	普遍の法と必然の理　――『教行信証』の諸問題(8)	親鸞教学	100
延塚知道	親鸞と法然との出遇い(上)	親鸞教学	101
金子大榮	伝承と己証　――『教行信証』の諸問題(9)	親鸞教学	101
佐々木　勇	鎌倉時代における呉音声調の位相差――親鸞加点本を資料として	国語国文	82(1)
栗山俊之	消息にみられる親鸞晩年の教学的営為	筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要	8
佐々木　勇	親鸞使用の声点加点形式について――坂東本『教行信証』声点の位置づけ	訓点語と訓点資料	129
金見倫吾	親鸞の人間観　――特に「如来とひとし」について(上)	仏教史研究	49
福岡憲亮	いまに生きる聖人のみ教え	教學院紀要	20
松田信慶	「自然法爾」をめぐる一考察	教學院紀要	20
内記　洸	親鸞における聖徳太子像について	宗教研究	86(4)
杉田　了	親鸞における果遂の誓について	宗教研究	86(4)
永原智行	親鸞聖人の『華厳経』観	宗教研究	86(4)
安藤章仁	親鸞浄土教における光の形而上学的意義	宗教研究	86(4)
林　智康	『教行信証』における阿闍世の救済と逆謗除取	宗教研究	86(4)
ヒロタデニス	親鸞思想と言葉（2012年度チェーン・レクチャー概要テーマ「宗教と言語」）	京都・宗教論叢	7
嵩　満也	親鸞と言葉　――親鸞における宗教的言葉の理解とその表現（2012年度チェーン・レクチャー概要テーマ「宗教と言語」）	京都・宗教論叢	7

内記　洸	表現についての試論　——井筒俊彦『意識と本質』から見る親鸞	現代と親鸞	25
佐藤弘夫	親鸞の作った偽書	アジア遊学	161
浅井成海	顕浄土真実教行証文類文庫版解説『教行信証』のこころ	浄土真宗総合研究	7
佐々木　勇	興正寺蔵『浄土三經往生文類』(広本)の字音注について	浄土真宗総合研究	7
杉浦道雄	真宗における正雑二行の研究	閲蔵：同朋大学大学院文学研究科研究紀要	8
伊東恵深	『教行信証』「真仏土巻」所引『涅槃経』の文の意義	同朋仏教	48
小山一行	親鸞の思想と無量寿経　——本願の解釈	筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報	23

〈教学史・思想史〉

岩田真美	十九世紀の真宗とキリスト教　——自他認識をめぐって——	真宗学	127
三浦真証	近世初期真宗教学の変貌	真宗学	128
谷口智子	存覚における父母に対する報恩思想——『報恩記』を中心として——	真宗学	128
Dennis HIROTA	Freedom and Safe-guardedness in Shinran and Heidegger (邦題：親鸞とハイデガーにおける「自由」と「護念」の思想)	真宗学	128
	資料・真宗と国家　VI下 1942～1945〈太平洋戦争期・後篇〉	教化研究	152/153
髙木祐紀	曽我量深における三心観について——「如来表現の範疇としての三心観」を通して——	真宗研究	57
伊東恵深	「生死出ずべき道」を求めて——清沢満之「自力の迷情を翻転」の内実——	真宗研究	57
藤田正知	真慧上人の伝道についての一考察——信と念仏の関係について——	真宗研究	57

名畑直日児	清沢満之と「信念」　――不如意の智慧　――	真宗教学研究	33
松山　大	曽我量深の二河譬領解についての一考察　――特に「我」と「汝」について――	真宗教学研究	33
小山正文	真慧上人の野袈裟をめぐりて	高田学報	101
瀧川和也	一光三尊仏について　――真宗高田派と善光寺式阿弥陀三尊に関する覚書――	高田学報	101
栗原直子	近世高田教学における口伝資料の一考察	高田学報	101
知名定寛	近世地域真宗史料の宝庫　――琉球関係史料を中心に――	本願寺史料研究所報	43
知名定寛	（承前）近世地域真宗史料の宝庫　――琉球関係史料を中心に――	本願寺史料研究所報	44
左右田昌幸	「川越名号」をめぐる歴史の一コマ	本願寺史料研究所報	44
尾崎誠仁	史料紹介「祖師四百五十回御忌記」	本願寺史料研究所報	45
谷口智子	存覚における世俗的事柄に関わる報恩の説示　――『破邪顕正抄』を中心として――	真宗研究会紀要	45
西原法興	抄読『浄土真宗金剛錍　――三業帰命説批判概要――	真宗研究会紀要	45
川口　淳	清沢満之の社会観に関する一考察	大谷大学大学院研究紀要	29
龍口恭子	存覚と仏心宗　――『歩船鈔』の一考察	印仏研	61(1)
黒田浩明	『教行信証大意』の研究	印仏研	61(1)
西原法興	大瀛『浄土真宗金剛錍」要義	印仏研	61(1)
花　栄	真宗教学における唯識思想について	印仏研	61(1)
Bernat MARTI-OROVAL	清沢満之の宗教哲学における霊魂論　――仏教教理の影響を中心に	印仏研	61(1)
龍口明生	「妙好人伝」引用の説話	印仏研	61(2)
菊川一道	江戸期の「化身土文類」末理解に関する一考察　――主に僧鎔の「外教」の位置づけをめぐって	印仏研	61(2)
興津香織	涅槃山西教寺蔵『摑裂邪網編』草稿本について	印仏研	61(2)

藤末光紹	存覚『六要鈔』の証果論	行信学報	25
義盛幸規	もう一つの親鸞像　――口伝鈔講義(21)第十五条・阿弥陀仏と諸仏(1)	大法輪	79(4)
山崎龍明	特集知っておきたい浄土真宗の基礎知識　浄土真宗とは	大法輪	79(5)
菅原智之・松本智量	特集知っておきたい浄土真宗の基礎知識　知っておきたいしきたり	大法輪	79(5)
木越康・山田恵文	特集知っておきたい浄土真宗の基礎知識　教えについて	大法輪	79(5)
三明智彰	特集知っておきたい浄土真宗の基礎知識　日常よく読まれる御文(御文章)・和讃	大法輪	79(5)
義盛幸規	もう一つの親鸞像　――口伝鈔講義(22)第十五条・阿弥陀仏と諸仏(2)	大法輪	79(5)
義盛幸規	もう一つの親鸞像　――口伝鈔講義(23)第十六条・親鸞が流した涙(1)	大法輪	79(6)
義盛幸規	もう一つの親鸞像　――口伝鈔講義(24)第十六条・親鸞が流した涙(2)	大法輪	79(7)
義盛幸規	もう一つの親鸞像　――口伝鈔講義(25)第十七条・凡夫として振る舞うこと(1)	大法輪	79(8)
義盛幸規	もう一つの親鸞像　――口伝鈔講義(26)第十七条・凡夫として振る舞うこと(2)	大法輪	79(9)
義盛幸規	もう一つの親鸞像　――口伝鈔講義(27)第十八条・なぐさめるということ	大法輪	79(10)
義盛幸規	もう一つの親鸞像　――口伝鈔講義(28)第十九条・本願は誰のために建てられたのか	大法輪	79(11)
義盛幸規	もう一つの親鸞像　――口伝鈔講義(29)第二十条・罪をつくってはならない	大法輪	79(12)
義盛幸規	もう一つの親鸞像　――口伝鈔講義(30)第二十一条・一念と多念	大法輪	80(1)
塚田幸三	「妙好人(みょうこうにん)」考(前編)大拙と宗悦の視点から	大法輪	80(1)
義盛幸規	もう一つの親鸞像　――口伝鈔講義(31)第二十一条・一念と多念	大法輪	80(2)

塚田幸三	「妙好人」考(後編)シュタイナーの視点から	大法輪	80(2)
義盛幸規	もう一つの親鸞像　――口伝鈔講義(32)第二十一条・一念と多念	大法輪	80(3)
春近敬	近代ドイツにおける「仏陀」と「阿弥陀」	大正大学大学院研究論集	36
森覚	日本における仏教絵本の成立	大正大学大学院研究論集	36
中村薫	『真宗教旨陽駁陰資弁』における正像末の三時について	東海仏教	58
松山大	曽我量深の衆生領解についての一考察	東海仏教	58
遠藤美保子	『歎異抄』の成立と浄土宗の影響に関する試論	日本宗教文化史研究	16(2)
和田幸司	近世西本願寺門跡の地位獲得と葛藤	日本歴史	771
井上見淳	「たすけたまへと申す」考	龍谷大学論集	480
岩田真美	近代移行期における真宗思想の一断面――超然の護法思想を中心に	龍谷大学論集	480
中西直樹	明治前期・真宗大谷派の海外進出とその背景　――北海道開拓・欧州視察・アジア布教	龍谷大学論集	481
津田徹英	佛光寺本『善信聖人親鸞伝絵』の制作時期をめぐって	美術研究	408
大澤広嗣	戦乱のベトナムと仏教者の鈴木宗憲	武蔵野大学仏教文化研究所紀要	29
金龍静	室町戦国期の真宗史料点描	仏教史研究	49
池田向一	即非の浄土　――鈴木大拙の浄土教観	大谷大学研究年報	65
松金直美	近世真宗東派における仏教知の展開――正統教学確立と異安心事件をめぐって	真宗文化：真宗文化研究所年報	22
島義恵	念仏思想の継承　――真慧と蓮如	教學院紀要	20
岡田正彦	近代仏教研究における文献史料と文化資料（パネル宗教史研究のフィールドワーク論）	宗教研究	86(4)
吉永進一	正徳寺資料から見える戦前の仏教国際化（パネル宗教史研究のフィールドワーク論）	宗教研究	86(4)

髙橋典史	ハワイ日系宗教における現地適応と「日本」(パネル移民と宗教を結ぶホームランドへのノスタルジア)	宗教研究	86(4)
オリオン クラウタウ	戦後日本仏教学説の課題（パネル戦後の日本仏教論　――諸学説の再検討）	宗教研究	86(4)
桐原健真	連続と断絶　――服部之総の「親鸞」（パネル戦後の日本仏教論――諸学説の再検討）	宗教研究	86(4)
ライアンワルド	圭室諦成著『葬式仏教』再考（パネル戦後の日本仏教論　――諸学説の再検討）	宗教研究	86(4)
碧海寿広	戦後日本仏教と民俗学　――五来重の場合（パネル戦後の日本仏教論――諸学説の再検討）	宗教研究	86(4)
高田信良	〈下への超越〉と〈将来する浄土〉――武内義範の「信楽の思惟」(パネル宗教における死生観と超越)	宗教研究	86(4)
御手洗隆明	近代以前親鸞伝における善鸞像	宗教研究	86(4)
川野寛	存覚上人と法華	宗教研究	86(4)
谷口智子	存覚『報恩記』における父母に対する報恩思想	宗教研究	86(4)
西原法興	大瀛の三業帰命説批判　――管見『真宗安心十論』	宗教研究	86(4)
ペルナット マルティオロバル	清沢満之の宗教哲学における宗教起源論について	宗教研究	86(4)
春近敬	清沢満之門下の時代意識　――雑誌『精神界』を中心に	宗教研究	86(4)
陳敏齢	近代真宗の法蔵菩薩詮釈に関する一考察　――金子大榮を例に	宗教研究	86(4)
藤喜一樹	親鸞聖人七五〇回遠忌報恩大法会の実施報告について	宗教研究	86(4)
龍口恭子	九条道家の宗教生活	宗教研究	86(4)
蓮沼直應	鈴木大拙の妙好人解釈	宗教研究	86(4)
亀崎敦司	真宗「地帯」の再考　――三重県津市における宗教民俗の諸相から	宗教研究	86(4)
岩田真美	近代における仏教者のキリスト教観――島地黙雷・大等を中心に	宗教研究	86(4)

菱木正晴	「大逆」の僧・高木顕明の往還二廻向理解について	宗教研究	86(4)
沙加戸弘	『本願寺聖人親/鸞伝絵』の聖人像	文芸論叢	78
義盛幸規	わたくしにいはく　――『口伝鈔』撰述の意趣	文芸論叢	78
足立賀奈子	『御伝鈔演義』の譬喩因縁	文芸論叢	78
和田恭幸	『御伝鈔演義』と写本の説教台本	文芸論叢	78
石井公成	「人間聖徳太子」の誕生　――戦中から戦後にかけての聖徳太子観の変遷	近代仏教	19
Bernat MARTI-OROVAL	清沢満之の宗教哲学における霊魂滅否論について　――西洋思想の影響を中心に	近代仏教	19
森　新之介	鎌倉平民仏教中心史観の形成過程――明治における平民主義と仏教史叙述	近代仏教	19
常塚聴	佐田介石の人間観と社会観　――建白書における＜天眼＞＜天稟＞論について	現代と親鸞	24
安冨信哉	「相応」の智慧　――大拙訳『教行信証』理解への一視点	現代と親鸞	24
岡村美穂子・田村晃徳	インタビューあの頃の大拙先生――英訳『教行信証』の思い出	現代と親鸞	24
田村晃徳	生命(いのち)の名前　――鈴木大拙訳『教行信証』の一側面	現代と親鸞	24
羽塚高照	鈴木大拙訳『教行信証』再版に寄せて	現代と親鸞	24
佐藤平顕明	Shinran Shonin's Rejection of Spiritual Pride with respect to a Certain Passage from the Amida Sutra	現代と親鸞	24
花園一実	頓成の真宗学	現代と親鸞	25
塩谷菊美	雑纂という形式　――近世真宗における絵解き本と図会物（もう一つの古典知　――前近代日本の知の可能性）	アジア遊学	155
万波寿子	江戸時代の西本願寺と出版（もう一つの古典知　――前近代日本の知の可能性）	アジア遊学	155
川邉雄大	大谷光瑞と中国布教（大谷光瑞と中国――「国家の前途」を考える）	アジア遊学	156

王　　娜	中国の大谷光瑞像及びその研究について（大谷光瑞と中国　――「国家の前途」を考える）	アジア遊学	156
柴田幹夫	『清国巡遊誌』を読む（大谷光瑞と中国　――「国家の前途」を考える）	アジア遊学	156
野世英水	大谷光瑞と日露戦争下の従軍布教（大谷光瑞と中国　――「国家の前途」を考える）	アジア遊学	156
新野和暢	『大谷光瑞興亜計画』と中国認識（大谷光瑞と中国　――「国家の前途」を考える）	アジア遊学	156
猪飼祥夫	大谷光瑞と中国仏教（大谷光瑞と中国　――「国家の前途」を考える）	アジア遊学	156
加藤　愛	大谷光瑞と上海事変（大谷光瑞と中国　――「国家の前途」を考える）	アジア遊学	156
麓　慎一	ウラジオストック本願寺からシベリアへ　――太田覚眠とシベリア（大谷光瑞とアジア　――帝国の拡がりとともに）	アジア遊学	156
山本浄邦	韓国〈大谷コレクション〉の現代史（大谷光瑞とアジア　――帝国の拡がりとともに）	アジア遊学	156
加藤斗規	大谷光瑞と台湾（大谷光瑞とアジア　――帝国の拡がりとともに）	アジア遊学	156
高本康子	大谷探検隊入蔵者資料と最近の研究動向（大谷光瑞とアジア　――帝国の拡がりとともに）	アジア遊学	156
服部等作	スバシ出土舎利容器と信仰の姿　――大谷探検隊の将来品と汎アジア世界の宗教（大谷光瑞とアジア―帝国の拡がりとともに）	アジア遊学	156
村岡　倫	大谷探検隊とモンゴル最古のチベット仏教寺院エルデニ・ゾー　――第二次探検隊、橘・野村調査日記から（大谷光瑞とアジア―帝国の拡がりとともに）	アジア遊学	156
菅澤　茂	大谷光瑞とその生涯に関わる建築について（大谷光瑞とその時代　――人間光瑞に迫る）	アジア遊学	156

栗田英彦	大正初期浄土真宗本願寺派における教団改革と信仰運動（大谷光瑞とその時代　――人間光瑞に迫る）	アジア遊学	156
山本彩乃	『中外日報』にあらわれた大谷光瑞――明治三十六(一九〇三)年の大陸関連記事を中心に（大谷光瑞とその時代　――人間光瑞に迫る）	アジア遊学	156
足立沙織	上海別院　――幻の大仏塔（大谷光瑞とその時代　――人間光瑞に迫る）	アジア遊学	156
山本彩乃	『反省会雑誌』と大谷光瑞（大谷光瑞とその時代―人間光瑞に迫る）	アジア遊学	156
塩谷菊美	親鸞の実像を求めて　――『高田親鸞聖人正統伝』はなぜ「偽書」と見破られなかったか	アジア遊学	161
塚本一真・三浦真証・能美潤史	真宗聖教の流伝と編纂　――『浄土真宗聖典全書』の発刊によせて	浄土真宗総合研究	7
水本正人	非人にとっての救いと宗教（特集近世被差別民と宗教）	部落解放研究：部落解放・人権研究所紀	197
奥本武裕	被差別部落寺院をめぐる社会的関係の様相（特集近世被差別民と宗教）	部落解放研究：部落解放・人権研究所紀	197
矢野治世美	浄土真宗の「尼講」について　――紀伊国の事例から（特集近世被差別民と宗教）	部落解放研究：部落解放・人権研究所紀	197
引野亨輔	近世真宗学僧の「遺書」争奪戦――〝書物の時代〟と学統継承のかたち	福山大学人間文化学部紀要	13
中村　薫	南條文雄と楊仁山の典籍交換	同朋仏教	48
安冨信哉	近代と真宗　――宗教的「個」の系譜	同朋仏教	48
飯田真宏	水平社の親鸞	同朋仏教	48
古橋恒夫	『歎異抄』の文体と思想　――親鸞聖人の実像を求めて	文学研究	24
鷺山智英	宝暦年間筑前における真宗門徒農民の遠島処分について	筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報	23

緒方知美	北部九州真宗文化財調査報告 ——近世真宗のうみだした文化的環境	筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報	23
大渓太郎	加賀三ヶ寺と一向一揆	新潟親鸞学会紀要	9
廣澤憲隆	新潟では三十五日法要に朱蠟燭を用いるわけ	新潟親鸞学会紀要	9
柴田幹夫	大谷光瑞とアジア	新潟親鸞学会紀要	9
村山教二	「念仏まうさんとおもひたつこころのおこるとき」について ——真宗現代教学の問題点	新潟親鸞学会紀要	9

〈現代問題〉

釋氏真澄	浄土真宗のアメリカ化に関する一考察 ——北米開教区における「浄土」理解より ——	龍谷教学	48
Mrigendra Pratap	Buddhism, Wold Pease, and Religiously Motivated Violence	北陸宗教文化	26
谷山洋三	被災地の「心のケア」と宗教者のあり方（「震災と宗教」シンポジウム）	北陸宗教文化	26
木崎馨雄	東日本大震災への関わりについて（「震災と宗教」シンポジウム）	北陸宗教文化	26
大熊　玄	禅から見た震災のとらえかた ——鈴木大拙「震災所感」を中心に ——（「震災と宗教」シンポジウム）	北陸宗教文化	26
葛野洋明	浄土真宗における伝道活動の実践的研究 ——統計調査・実地調査を踏まえて——	真宗学	127
川村覚昭	浄土真宗の建学の精神 ——真宗教育の可能性——	大谷学報	92(2)
小池秀章	宗教教育考 ——浄土真宗の教義とその表現方法について —— (一)	研究紀要（京都女子大学宗教・文化研究所）	26
葛野洋明	浄土真宗における実践の研究 ——浄土真宗本願寺派「宗制」による社会貢献の視座を通して——	真宗研究	57

釋氏真澄	アメリカにおける英語真宗教学形成の一背景　——欧州系仏教同調者と欧州系僧侶——	真宗研究	57
河村　諒	真宗における浄土観の現代的展開についての一考察	真宗研究	57
普賢保之	浄土真宗における自死の問題	真宗研究	57
下室覚道	現代の諸問題と禅	印仏研	61(1)
頼尊恒信	真宗障害者福祉の現代的課題　——共に生きるということ	印仏研	61(1)
工藤英勝	仏教者は新型動力炉命名にどう関与したか？　——「もんじゅ」「ふげん」命名伝説の虚実	印仏研	61(1)
加茂順成	自信教人信一考　——教団の声明（せいめい）分析による帰納的理解	印仏研	61(2)
岡島秀隆	禅的発想法の可能性	印仏研	61(2)
木村清孝	仏教学は何をめざすのか（第63回学術大会パネル発表報告）	印仏研	61(2)
師　茂樹	震災と仏教（仏教学は何をめざすのか,第63回学術大会パネル発表報告）	印仏研	61(2)
渡邊寶陽	特集宮沢賢治と仏教　賢治と法華経　——賢治は、『法華経』のどの部分に惹かれたか	大法輪	79(4)
鍋島直樹	特集宮沢賢治と仏教　賢治が考えた「幸福」とは　——本当の幸いをさがしに	大法輪	79(4)
辻村優英	ダライ・ラマ14世が用いる「心」にかんする仏教用語の英訳語について　——感情・光り輝き知るもの・認識手段について	高野山大学密教文化研究所紀要	26
鍋島直樹	中村久子の生死観と超越（中）	龍谷大学論集	480
今井崇史	非代償性災害時におけるトリアージが招く「命の選別の問題」に対する二河白道を基盤とした非身体的側面からのケアリングの模索	武蔵野大学仏教文化研究所紀要	29
平原憲道	「ゴムの手」と瞑想研究が切り開く身体論　——認知科学と仏教の最前線	武蔵野大学仏教文化研究所紀要	29
安藤章仁	現代における樹心流念の意義	教學院紀要	20

坂井祐円	被災者支援において〈仏教的〉であるとはどういくことか？（パネル宗教者側の実践活動から見えてくる東日本大震災後の宗教学的課題）	宗教研究	86(4)
大河内大博	「いのち」を生ききることの困難　――僧侶の病床訪問活動から（パネル宗教的「いのち」観の危機と課題）	宗教研究	86(4)
戸田游晏	モノたちとの共生きと癒し　――臨床と仏教の環境観（パネル大震災の問う物質と霊魂―日本仏教再評価の一環として）	宗教研究	86(4)
森田敬史	医療現場の宗教者から見えてくる宗教的ケア（パネル公共空間における宗教的ケアのあり方―「臨床宗教師」の可能性）	宗教研究	86(4)
齋藤知明	現地宗教者の意識と支援活動　――高野山真言宗僧侶を中心に（パネル東日本大震災後における〈いわき市〉と宗教）	宗教研究	86(4)
小川有閑	伝統教団内の支援のネットワーク（パネル東日本大震災後における〈いわき市〉と宗教）	宗教研究	86(4)
龍口明生	戒律規定と沙弥教育（パネルアジアの宗教と教育）	宗教研究	86(4)
宮井里佳	中国仏教の唱導（パネルアジアの宗教と教育）	宗教研究	86(4)
岩瀬真寿美	日本の仏教教育（パネルアジアの宗教と教育）	宗教研究	86(4)
長岡岳澄	寺院の役割と日本人の宗教性（パネルアジアの宗教と教育）	宗教研究	86(4)
伊藤秀章	ビハーラ活動と日本人の宗教性（パネルアジアの宗教と教育）	宗教研究	86(4)
釋氏真澄	日本仏教のアメリカ化の諸相　――加州の浄土真宗と禅宗を比較して	宗教研究	86(4)
友久久雄	仏教とカウンセリングの接点	宗教研究	86(4)
江島尚俊	明治期・真宗大谷派における高等教育就学実態について	宗教研究	86(4)
本多彩	日系アメリカ人と仏教教育　――戦前の浄土真宗を例に	宗教研究	86(4)

横久保　義　洋	瞥見天津仏教事情	岐阜聖徳学園大学 仏教文化研究所紀要	13
福本康之・ 山口篤子	『宗祖讃仰作法音楽法要』について ——その音楽面を中心に	浄土真宗 総合研究	7
現代宗教課題 研究部会	自死（自殺）問題に関する特別部会	浄土真宗 総合研究	7
打本弘祐	スピリチュアルケアのための仏教的人間論　——ナーガールジュナの戯論をめぐって	桃山学院大学 社会学論集	46(2)
平野仁美	真宗保育実践に関する研究　——大谷保育協会所属園の見学を通して	同朋福祉	19
河村　諒	真宗における救済観の現代的展開の一考察	閲蔵：同朋大学大学院 文学研究科研究紀要	8
藤岡寿子	現代における仏教教育の「形」（本願寺の「オオイチョウせっけん」から）（第二十回学術大会研究発表(要旨)）	日本仏教 教育学研究	20
頓所是正	行列の出来る仏教講座をめざして	新潟親鸞 学会紀要	9
斎木浩一郎	現代心理学諸派における凡夫の概念とその超克	新潟親鸞 学会紀要	9

〈講演・シンポジウム〉

徳永一道	記念講演　真宗における「さとり」と「救い」	龍谷教学	48
赤尾栄慶・ 新　光晴・ 三栗章夫・ 武田　晋	第48回大会シンポジウム『教行信証』の書誌的研究について	龍谷教学	48
大田利生	浄土教の本質	真宗学	127
平　雅行	鎌倉の顕密仏教と幕府（平成23年度宗教・文化研究所公開講座講演録）	研究紀要（京都女子大学宗教・文化研究所）	26
藤丸智雄	曇鸞大師と心（平成23年度仏教文化公開講座講演録）	研究紀要（京都女子大学宗教・文化研究所）	26
殿内　恒	道綽禅師の浄土教　——成立背景を通して——（平成23年度仏教文化公開講座講演録）	研究紀要（京都女子大学宗教・文化研究所）	26

大江憲成	記念講演：精神の空洞化と行信の課題	真宗研究	57
安冨信哉	『教行信証』と危機意識（宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌記念シンポジウム：親鸞と現代―『教行信証』の課題）	真宗教学研究	33
下田正弘	言語的深化と〈信〉実現の実践思想――『教行信証』――（宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌記念シンポジウム：親鸞と現代―『教行信証』の課題）	真宗教学研究	33
本多弘之	真実信心の現代的意義（宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌記念シンポジウム：親鸞と現代　――『教行信証』の課題）	真宗教学研究	33
梯實圓	親鸞聖人の回心　――三願転入論――（第19回真宗教学学会講演会）	真宗教学研究	33
福島光哉	親鸞聖人と『楽邦文類』（第19回真宗教学学会講演会）	真宗教学研究	33
山田雅教・小山正文・草野顕之・佐々木正・松尾剛次・栗原廣海	シンポジウム　親鸞聖人の御生涯を再考する	高田学報	101
殿内恒	真宗文献学を考える　――教学の基盤として――	真宗研究会紀要	45
桐原良彦	真宗講座「往生浄土のみちすじ」	中央仏教学院紀要	24
内藤昭文	学術講演中道としての仏道	行信学報	25
中尾良信	第一回公開講演日本中世禅宗における人的交流と密禅併修	駒沢大学大学院仏教学研究会年報	45
福田洋一	第二回公開講演チベット仏教研究のススメ	駒沢大学大学院仏教学研究会年報	45
池田魯参	退任記念講演天台教学から道元・瑩山学へ	駒沢大学仏教学部論集	43
梯實圓	宗学院公開講座（二〇一一年度）本願念仏の伝承	宗学院論集	85
井上尚実	普遍宗教としての浄土真宗　――無償の贈与を平等に分かち合う思想	親鸞教学	100

竹村牧男	講演親鸞と『大乘起信論』 ――報身・報土の問題を中心に	東洋の思想と宗教	30
竹村牧男	講演筆記書写山の一遍上人	東洋学論叢	38
田中智彦	いのちと宗教（平成23年度武蔵野大学仏教文化研究所「公開講座」シンポジウム仏教・浄土真宗のこれから―その可能性を問う）	武蔵野大学仏教文化研究所紀要	29
高田文英	浄土真宗の課題と展望（平成23年度武蔵野大学仏教文化研究所「公開講座」シンポジウム仏教・浄土真宗のこれから―その可能性を問う）	武蔵野大学仏教文化研究所紀要	29
爪田一寿・田中智彦・高田文英	シンポジウム第二部（平成23年度武蔵野大学仏教文化研究所「公開講座」シンポジウム仏教・浄土真宗のこれから―その可能性を問う）	武蔵野大学仏教文化研究所紀要	29
青木新門	〈公開講座講演要旨〉いのちのバトンタッチ ――映画「おくりびと」に寄せて	武蔵野大学仏教文化研究所紀要	29
宮崎哲弥	〈公開講座講演要旨〉インドの仏教、日本の仏教、そして…	武蔵野大学仏教文化研究所紀要	29
Christopher Queen・大來尚順【翻訳】	Engaged Buddhism ―― Social Service and Public Activism Spiritual Practice in the New Global Buddhism	武蔵野大学仏教文化研究所紀要	29
辛嶋静志	第四二回光華講座言葉の向こうに開ける大乘仏教の原風景 ――経文に見える大乘、一闡提、観音、浄土の本当の意味	真宗文化：真宗文化研究所年報	22
阿満利磨・小野田俊蔵【司会】・北尾	エンゲイジド・ブッディズム（京都・宗教系大学院連合2011年度研究会報告第10回「仏教と一神教」研究会テーマ「エンゲイジド・ブッディズム」）	京都・宗教論叢	7
大谷栄一	シンポジウム「十五年戦争と近代仏教」の趣旨	近代仏教	19
八木英哉	シンポジウム『時局伝道教化資料』に見る布教方針について ――天皇＝阿弥陀仏の表現について	近代仏教	19
Orion KLAUTAU	シンポジウム十五年戦争期における宮本正尊と日本仏教	近代仏教	19

白川哲夫	シンポジウムもう一つの靖国　――戦死者追弔の近現代史	近代仏教	19
高木慶子	現代と親鸞の研究会激変する社会のなかでいのちを考える　――人生の苦難のなかで今を生きる	現代と親鸞	24
前田專學	講演録鈴木大拙英訳『教行信証』編集をめぐって	現代と親鸞	24
マイケル コンウェイ	英訳『教行信証』研究会鈴木大拙訳『教行信証』「行巻」管見　――「如実修行相応」の英訳を手掛かりに	現代と親鸞	24
槌田劭・内記洸・山本伸裕【他】	現代と親鸞の研究会人間知の傲慢、科学の欺瞞　――大地に足して共に生きる	現代と親鸞	25
大峯顕・花園一実・内記洸【他】	『教行信証』真仏土・化身土巻研究会末法の時代における真理とは	現代と親鸞	25
浅井成海	二〇〇四年一月十六日ご命日法要聞思のこころ	浄土真宗総合研究	7
平川宗信	記念講演刑法と人間　――親鸞の地平から（京都女子大学法学部開設記念フォーラム特集法における人間）	京女法学：Kyojo journal of law and politics	2
木村清孝	生死去来真実人　――大悲の禅とのかかわりから（曹洞宗大本山總持寺御移転百年記念平成二十四年度鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウム―死の痛みを超えて―大悲の禅に学ぶ）	鶴見大学仏教文化研究所紀要	18
子島潤	〈死の痛み〉を癒す医療　――ホスピスとビハーラ（曹洞宗大本山總持寺御移転百年記念平成二十四年度鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウム―死の痛みを超えて―大悲の禅に学ぶ）	鶴見大学仏教文化研究所紀要	18
関根透	医療倫理の視点から生と死を考える　――『看病用心紗』を中心に（曹洞宗大本山總持寺御移転百年記念平成二十四年度鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウム―死の痛みを超えて―大悲の禅に学ぶ）	鶴見大学仏教文化研究所紀要	18

矢島道彦	尊厳死とはなにか　――仏教の立場から（曹洞宗大本山總持寺御移転百年記念平成二十四年度鶴見大学仏教文化研究所公開シンポジウム―死の痛みを超えて―大悲の禅に学ぶ）	鶴見大学仏教文化研究所紀要	18
笹田博通・川村覚昭	公開シンポジウム「仏教と教育と臨床―改めてつながり・縁を問う」概要	日本仏教教育学研究	20
友久久雄	公開シンポジウム臨床における仏教・教育のあり方	日本仏教教育学研究	20
山田昭全	講演『平家物語』の鎮魂　――六道巡りから(佛教文化学会第22回学術大会基調講演・記念公演大会テーマ「仏教と音楽」)	仏教文化学会紀要	21
新井泰子	講演「平家語り」の音楽性(佛教文化学会第22回学術大会基調講演・記念公演大会テーマ「仏教と音楽」)	仏教文化学会紀要	21
内山慶法	豊山流大師講の詠歌・和讃(佛教文化学会第22回学術大会基調講演・記念公演大会テーマ「仏教と音楽」)	仏教文化学会紀要	21
小笠原隆浩	講演法要の形式声明の音律祈りの心(佛教文化学会第22回学術大会基調講演・記念公演大会テーマ「仏教と音楽」)	仏教文化学会紀要	21
草野顕之	講演親鸞聖人伝の史実と伝承	新潟親鸞学会紀要	9
奈倉哲三	特別講座僧侶は誰がために、寺院は何がために《疑と信の結節点を求めて》――弥彦神社本地仏阿弥陀如来像焼却阻止行動から、今、何を学ぶべきか	新潟親鸞学会紀要	9
末木文美士	特別講演思想史の観点から見た日本仏教	仏教史学研究	55(1)

〈平成23年度追加掲載論文〉

溪英俊	『略論安楽浄土義』についての一考察	印仏研	60(1)
岡崎秀麿	善導『観経四帖疏』における見仏	印仏研	60(1)
杉山裕俊	『安楽集』における自力・他力について	印仏研	60(1)
高間由香里	画像解析による法然上人御影の考察	印仏研	60(1)

沼倉雄人	良忠著作中にみられる「先師」について	印仏研	60(1)
能島覚	智積院新文庫聖教と浄土教典籍	印仏研	60(1)
龍口明生	妙好人の伝記採録の意図　――妙好人伝「五巻本」を中心に	印仏研	60(1)
菊藤明道	親鸞伝説の性格と意義　――正聚房僧純編『親鸞聖人霊瑞編』を中心として	印仏研	60(1)
紅楳英顕	親鸞の念仏思想の特性　――特に法然との相異について	印仏研	60(1)
武田晋	親鸞における『往生論註』十念思想の受容と展開	印仏研	60(1)
伊東恵深	親鸞の「横超」思想とその現代的意義	印仏研	60(1)
貫名譲	「行巻」大行釈引文の研究　――善導引文	印仏研	60(1)
谷口智子	存覚の報恩思想における真宗者の世俗行為に対する態度	印仏研	60(1)
飯島憲彬	本願寺派能化の知空著『浄土和讃首書』の引用文献について	印仏研	60(1)
河村諒	真宗における死生観の検討	印仏研	60(1)
頼尊恒信	真宗障害者福祉の実践道　――向下的共生道としての自立生活運動	印仏研	60(1)
釋氏真澄	ハントと浄土真宗英語礼拝聖典の成立	印仏研	60(1)
溪英俊	曇鸞の凡夫観についての一考察	真宗研究会紀要	43・44
釋氏真澄	アメリカにおける念仏者の実践：京極逸蔵と六波羅蜜	真宗研究会紀要	43・44
武田晋	二〇一〇年度真宗研究会例会親鸞教義の書誌的研究	真宗研究会紀要	43・44
普賢保之	二〇一一年度真宗研究会例会覚如の教学理解	真宗研究会紀要	43・44

付記　ここに掲載しました論文は、平成24年４月より平成25年３月までに発表されたものです。掲載漏れの論文も多いかと思いますが、ご容赦ください。この目録は龍谷大学図書館に収蔵されている雑誌を中心に集めております。もし掲載漏れ・誤植等お気づきの際には、お手を煩わせますが、真宗学会までご連絡いただければ幸いです。

CONTENTS

Master Genshin and Shinran Shōnin
.....HAYASHI Tomoyasu(1)

The Significance of the Inconceivable (Fukashigi) in Shinran's Thought
.....NAITŌ Tomoyasu(31)

Shinshūgaku: How Do We Study What Shinran Terms "Shinshū"?
.....HIROTA Dennis(49)

Problems of the Concept of Kalyāṇa-mitra in Shinran's Pure Land Teaching (1) .....KAWASOE Taishin(81)

The Meaning of Life and Death — How to Narrate Our Life
.....TABATA Masahisa(101)

A Study of the Development of Tōyō Engetsu's Thought and Scholarship: A Historical Examination of His Biography Focusing on His Early Years .....TATSUDANI Akio(125)

A Significance of "To Realize Shinjin Oneself and to Guide Others to Shinjin" of Shin Buddhism Mission .....KISHIMA Nobuyuki(149)

Myōkōnin and Prajñā : From the Viewpoint of Yanagi Sōetu's *The Culture of No Anti-Thesis* .....FUJI Yoshinari(167)

Shinran's Perspectives on Freedom from Birth and Death (1): The Significance of The Way to Go beyond Birth and Death
.....NABESHIMA Naoki(189)

A Study of the Method for Studying or Researching as Practical Shin Buddhist Studies. .....KADONO Yōmyo(211)

The Theory of Others in ShinBuddhist Studies
—'Others' as a Principle of the Practical ShinBuddhist Studies
.....SUGIOKA Takanori(233)

A Background of Shinran's View on Bodhi-citta
.....TAKEDA Susumu(251)

A Study of "A Collection of Passages on the Types of Birth in the Three Pure Land Sutras"
— through the Text's Development— ·····TONOUCHI Hisashi (271)

Completely Settled Birth and Uncertain Birth in the Pure Land
·····TAMAKI Kōji (291)

Concerning the Expression "Equal to the Buddha"
·····INOUE Yoshiyuki (309)

A Study on Honen's Writing for Commentaries on the "Ōjōyōshū": Focusing on "Ōjōyōshū-Ryōken" and "Ōjōyōshū-Ryakuryoken"
·····TAKADA Bunei (329)

A Study on the tradition of "*Sango-Kimyo* (三業帰命)" Theory
—The Relationship between Saying "tasuketamae" and "*Gaike* (改悔) "—·····INOUE Kenjun (349)

Mori Ryūkichi's Challenge to Shinranron as the Methodological Cornerstone of Shinshu Intellectual History in the Postwar Era
·····IWATA Mami (369)

The Nature of Narrative in *Nigabyakudō*
·····YAMAMOTO Hironobu (389)

A Comparative Study with *Kokuhō* text and *Kenchi* text of *Shōzōmatsu wasan* with a Focus on relations with Shandao's *Hōjisan* ·····INADA Eishin (403)

A study of the thought on the Paths of Difficult and Easy Practice in The Commentary on the Ten Bodhisattva Stages (*Jūjūbibasharon*)
·····YAMATO Takamichi (423)

Jōdo Shinshū's Doctrinal Reflection on The Possibility of Children Attaining Birth in the Pure Land (*shōni ōjō*)
·····NASU Eishō (*23*)

Reconsideration of Organ Transplantation from Brain—Dead Persons
·····HAYASHIMA Osamu (*1*)

SHINSHUGAKU

JOURNAL OF SHIN BUDDHIST STUDIES

Nos. 129·130 March 2014

Commemorative Issue

in Honour of

Professor HAYASHI, Tomoyasu,
Professor NAITŌ, Tomoyasu
and Professor HIROTA, Dennis
Studies of Shinran's Buddhism

SHINSHU GAKKAI

Research Association of Shin Buddhist Studies

Ryukoku University

Shichijo Omiya, Shimogyo-ku

Kyoto, Japan